八尾市文化財調査報告44
平成12年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書

２００１年３月
八尾市教育委員会

八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書　正誤表

頁	行	誤	正
1	23	灰色灰色粘質土	淡灰色粘質土
25	7	東西幅1.5m、東西幅2mに	南北幅1.5m、東西幅2mに

八尾市文化財調査報告44
平成12年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書

２００１年３月
八尾市教育委員会

はじめに

八尾市は、大阪府のほぼ中央部に位置し、生駒山地西麓から大阪平野の東部にかけての範囲に市域を有しております。古くは、河内湖、河内潟に面し、旧大和川をはじめとする多くの河川によって、肥沃な平野が形成されてきました。ここには旧石器時代から連綿と遺跡が形成されており、全国的にも有数な遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

本書には、当教育委員会が平成12年度に市内の個人住宅建設をはじめ、民間の各種事業の工事等に伴って実施した遺構確認調査の成果を収めております。

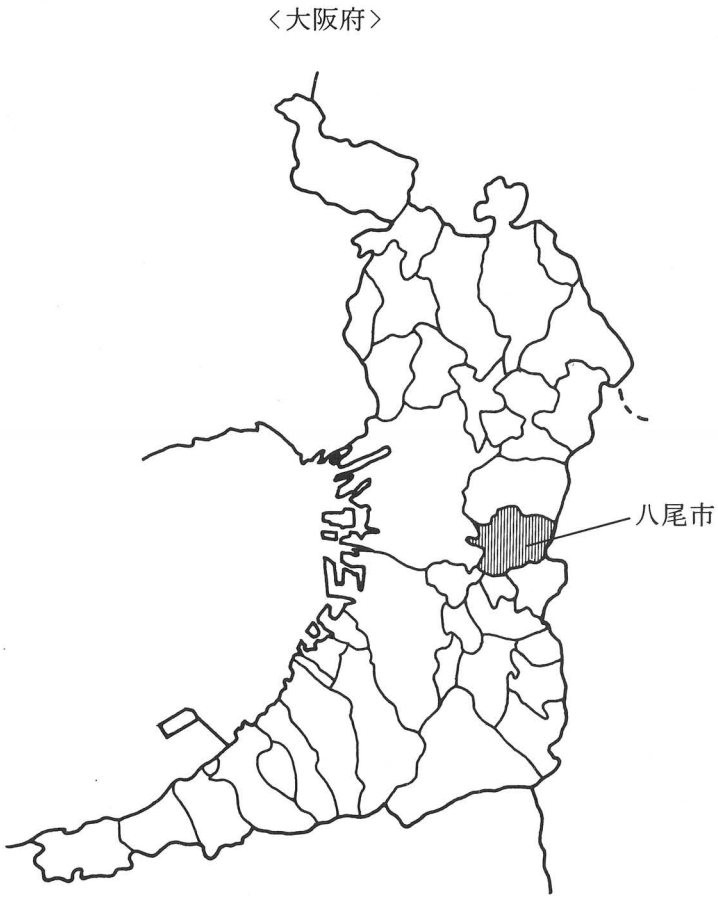
今後、市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれるよう、保存・活用されていくことが、重要な課題となるでしょう。本書が、その役割の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に際し、深いご理解とご協力を賜りました関係各位に感謝いたします。

平成13年3月
八尾市教育委員会
教育長　　森　卓

例　言

1．本書は、八尾市教育委員会が平成12年度に国庫補助事業（市内遺跡）として、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。
2．調査にあたっては、八尾市教育委員会社会教育部文化財課　米田敏幸、渕斎吉田野乃、吉田珠己、藤井淳弘、西村公助が担当した。
3．本書には、巻末に掲載した調査一覧表のうちで、特に成果のあった調査の概要・報告を収録した。
4．本書の作成にあたっては、各調査担当者が執筆を行い、文責はそれぞれ各報告の文末に記した。本書の編集及び巻末の調査一覧表・抄録の作成は藤井が行った。



八尾市の位置

本　文　目　次

1．恩智遺跡(1999－466)の調査 ---------- 1

2．萱振遺跡(1999－383)の調査 ---------- 4

3．萱振遺跡(2000－103・214)の調査 ---------- 9

4．久宝寺遺跡(2000－48)の調査 ---------- １６

5．久宝寺遺跡(1999－639)の調査 ---------- ２０

6．郡川遺跡(1999－627)の調査 ---------- ２５

7．心合寺跡の調査　－遺跡範囲確認調査－---------- ３１

8．渋川廃寺(2000－65)の調査 ---------- ３９

9．高安古墳群(2000－407)の調査 ---------- ４０

10．東郷遺跡(2000－232)の調査 ---------- ４４

11．中田遺跡(1999－114)の調査 ---------- ４７

12．中田遺跡(1999－244)の調査 ---------- ４９

13．中田遺跡(2000－91)の調査 ---------- ５３

14．弓削遺跡(1999－429)の調査 ---------- ５５

15．弓削遺跡(1999－524)の調査 ---------- ６６

調査一覧表 ---------- ７０

図　版　目　次

図版1　萱振遺跡(1999-383)の調査
図版2　萱振遺跡(1999-383)の調査
図版3　萱振遺跡(2000-103・214)の調査
図版4　久宝寺遺跡(2000-48)の調査
図版5　久宝寺遺跡(1999-639)の調査
図版6　弓削遺跡(1999-524)の調査・郡川遺跡(1999-627)の調査
図版7　郡川遺跡(1999-627)の調査
図版8　心合寺跡(範囲確認)の調査
図版9　心合寺跡(範囲確認)の調査
図版10　心合寺跡(範囲確認)の調査
図版11　高安古墳群(2000-407)の調査
図版12　弓削遺跡(1999-429)の調査
図版13　萱振遺跡(2000-103)　出土遺物
図版14　萱振遺跡(2000-214)・久宝寺遺跡(1999-639)　出土遺物
図版15　久宝寺遺跡(1999-639)　出土遺物
図版16　郡川遺跡(1999-627)　出土遺物
図版17　郡川遺跡(1999-627)　出土遺物
図版18　郡川遺跡(1999-627)　出土遺物
図版19　心合寺跡(範囲確認)　出土遺物
図版20　弓削遺跡(1999-429)　出土遺物
図版21　弓削遺跡(1999-429)　出土遺物
図版22　弓削遺跡(1999-429)　出土遺物
図版23　弓削遺跡(1999-429)　出土遺物

1．恩智遺跡（1999－466）の調査

1．調 査 地：恩智中町３丁目93の一部

2．調査期間：平成12年２月17日

3．調査方法

本調査地は恩智遺跡に属し、弥生時代集落の縁辺の一画に位置すると考えられた。そのため専用住宅建て替えに際し、約1.5ｍ×1.5ｍの調査区を設定し、地表下約1.8～２ｍまで層理に従い人力によって掘削して、遺構の検出に努めた。なお現地表はT.P.＋16.85ｍ前後である。

4．調査概要

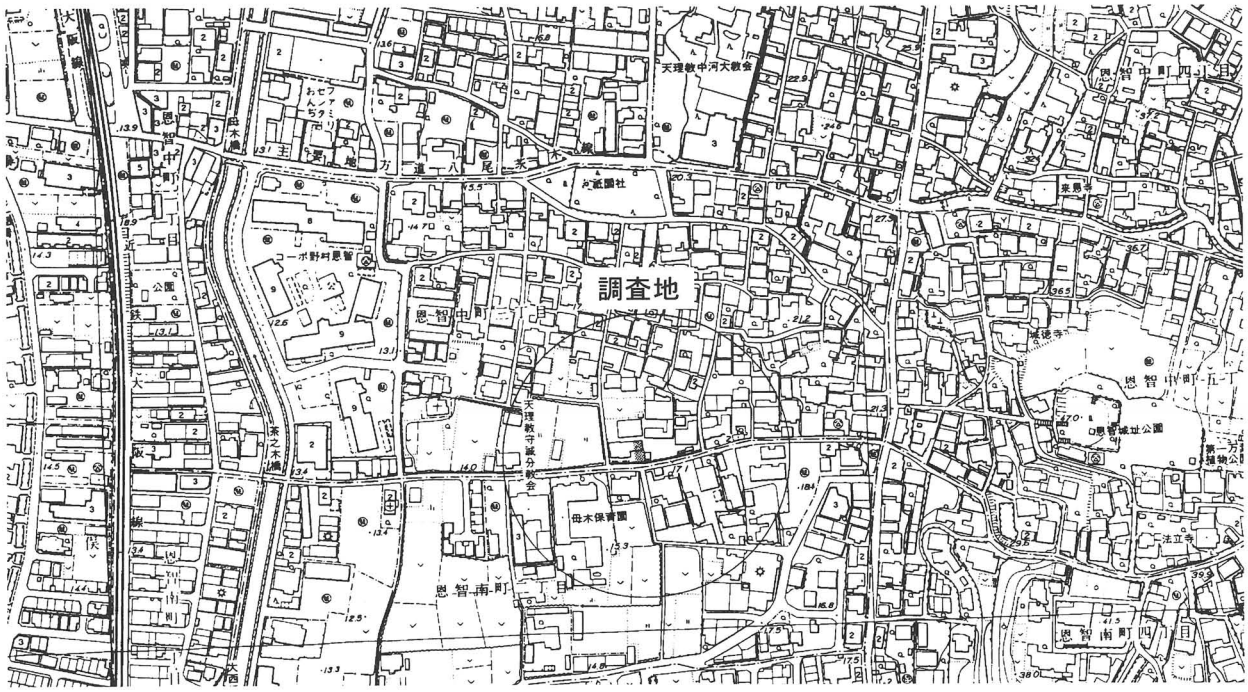
調査では近世～中世にかけての遺構構築面を５面と中世の包含層を確認した。しかし、弥生時代の遺構面は確認できず、若干の遺物を得るに留まった。１面～４面は近世～現代の遺構面で、５面が中世～近世の遺構面と考えられる。以下、上部の遺構から概説する。

１面並びに２面は耕作面で東西方向の鋤溝を検出した。１面は地表下0.38ｍの淡褐灰色砂質シルト（マンガン斑を含む）をベースとする。溝は幅約0.3ｍで淡灰白色シルトを埋土とする。２面は地表下0.5ｍの淡褐灰色礫混シルトをベースとする。溝は幅0.3～0.4ｍで灰色～淡灰色シルトを埋土とする。

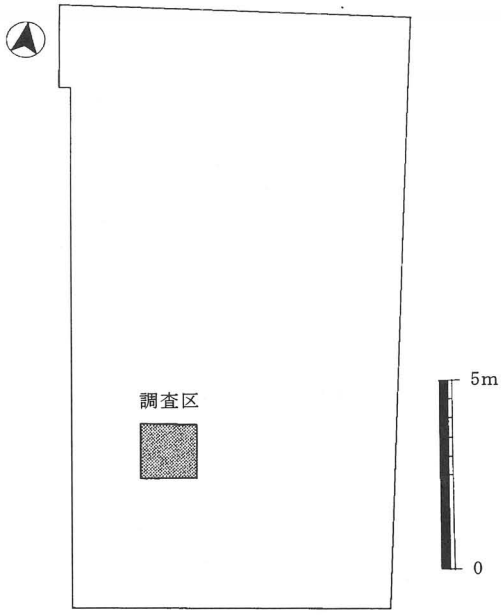
３面は地表下0.6～0.65ｍの暗赤褐色砂質土をベースとし、杭穴、小穴、溝を検出した。溝は東西方向で幅0.18ｍ、深さ0.04ｍと浅く、やはり耕作に伴う溝と考えられる。

4面は地表下0.97ｍの灰色微砂質土をベースとする。南北方向の溝３条と、土坑１基を検出した。（第４図）溝は調査区の東側に集中し、重複関係にある。最も古い溝１は検出長0.86ｍ、幅0.28ｍ以上、深さ0.09ｍ以上、淡灰茶色粘質土を埋土とする。溝２は検出長1.27ｍ、幅0.48ｍ以上、深さ0.07ｍで灰色粘土を埋土とする。溝３は全長0.52ｍ、幅0.1ｍ、深さ0.05ｍで灰色粘質土を埋土とする。土坑は大半が調査区外にひろがるため全容は不明である。南北長0.22ｍ、東西長0.09ｍ、深さ0.07ｍ以上で、埋土は灰色灰色粘質土である。

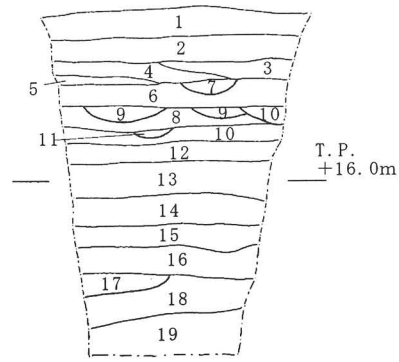
これらの遺構は遺物がほとんど出土していないが、５面との関係から近世～現代に比定した。検出した遺構は耕作に関連するものばかりで、居住域を示す井戸や柱穴などは検出することはできなかったこと



第１図　調査地周辺図（1/5000）

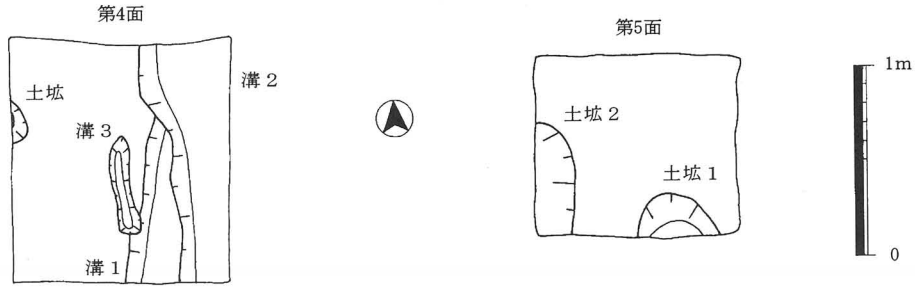


第2図　調査位置図（1／200）

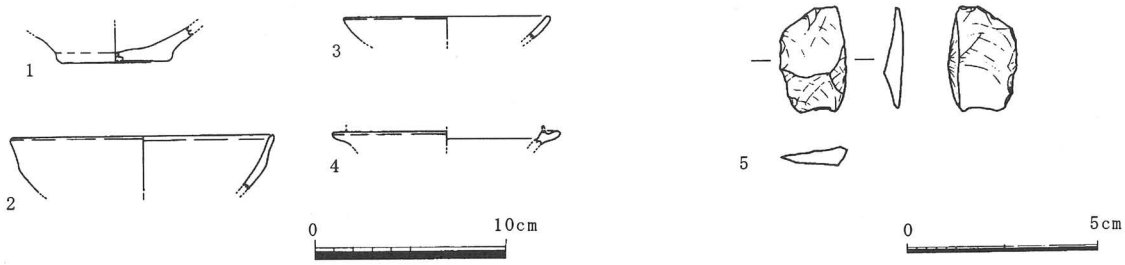


1. 表土
2. オリーブ灰色シルト
3. 淡灰色シルト
4. 淡灰色砂質土
5. 〃　(Mn)
6. 淡褐灰色砂質シルト
7. 淡灰白色シルト
8. 淡褐灰色礫混シルト
9. 灰色～淡灰色シルト
10. 暗赤褐色細砂質土
11. 淡灰色シルト
12. 黄灰色微砂質土
13. 灰色粘質土（Fe、Mn含む）
14. 灰色微砂質土(Fe含む)
15. 灰色シルト
16. 灰茶色礫混
17. 灰白色粘土シルト
18. 暗灰茶色粘土シルト礫混
19. 暗灰色砂質シルト礫混

第3図　西壁土層断面図（1／40）



第4図　第4面・第5面遺構平面図（1／40）



第5図　出土遺物実測図（1／4）〔石器のみ1／2〕

から、本調査地は近世以降は主として耕作地として利用されていたことがわかる。

５面は地表下1.38mの暗灰茶色粘土シルト礫混じりをベースとし、土坑２基を検出したが、いずれも調査区外にひろがる。土坑１は南北長0.24m以上、東西長0.43m以上、深さ0.13mで灰白色粘質土を埋土とする。土坑２は南北長0.61m以上、東西長0.21m以上、深さ0.13m以上で、灰色粘質土を埋土とする。遺物は瓦器椀砕片（１・２）が出土している。

この遺構構築層およびその下部層である暗灰色砂質シルト礫混じり（T.P.＋15.47m以下）からは極砕片ではあるが須恵器、土師器、瓦器と石器剥片（３～５）などの遺物が見つかっている。このようなことからこの２層は遺構ないしは整地など人為的な土層と考えられるが、明確にはできなかった。

5．まとめ

今回の調査では弥生時代の遺構は検出できなかったが、5面の生活面と中世の遺物を含む土層を確認することができた。今後周辺の調査を行うことによって中世の遺物を含む土層がどのような性格をもったものであるかが明らかになると思う。また、弥生時代の集落の縁辺についても確認する必要がある。

恩智遺跡は生駒山系に連なる高安山に形成された扇状地に立地する。遺跡として認知されたのは1917年に京都大学の梅原末治と島田貞彦による踏査を端緒とする。1939年に大阪府が藤岡謙二郎を担当として発掘調査が行い、多くの弥生土器や石器が出土したが、遺跡の性格については明らかにできなかった。この後幾度かの発掘調査が行われたが、遺跡の概要を明確にすることはできなかった。しかし、1975年に恩智川改修に伴って実施された緊急調査や市教育委員会が個人住宅の建て替えに伴って実施した調査では縄文時代前期から晩期の多量の遺物と弥生時代全般を通じての遺構を確認した。そして現在にいたるまで小規模ではあるが、地道な調査が継続されている。

このように古くから知られている遺跡であり、また弥生時代の大集落のひとつと考えられているがその実態は今ひとつはっきりしていない。小規模な調査が多く、遺構が明確にとらえられず、集落の範囲が確定されていないのである。集落の中心は天王の杜と呼ばれる恩智神社のお旅所周辺と考えられている。これまでの調査における遺物の出土状況からみてこれは正しいであろう。では縁辺はとなると難しい。南については本調査地前の東西方向の道路を境として南に下がる地形となっているため、これが南端の可能性がある。東については天王の杜から東へ200mの東高野街道近辺（旧170号線）では遺物量が激減するため、このあたりと考えてもよいかも知れない。西については天王の杜から西へ300mにある近鉄大阪線の線路付近が旧大和川の流路にあたっており、これを西限と考える。実際近辺の調査でも弥生時代の河道らしきものが検出されている。北については天王の杜から約270mの地点にある東西道路を境として高低差があるため、これが北端となる可能性がある。しかし、道路の北側で行った調査では弥生時代前期から後期の遺構が検出されている。ただ、遺物量は少なく、包含層も薄くなる。この東西道路から北は河川の影響と考えられる砂層が堆積し、これには弥生土器や石器が含まれている。こうしたことから東西道路から砂層の堆積部分を北限と考えてよいだろう。

北限と推定される地域の東にはかつて鉾立塚があった。これについては恩智神社の縁起に次のような話がある。新しくきた玉祖神社の神と河内二の宮である恩智神社の神が氏子の獲得の競争をした。それは朝早く鉾を立てた場所までがその範囲とするというものであった。玉祖の神は朝早くから白見塚で夜が明けるのをまって山を下り、鉾を突き立てた場所が鉾立塚であったと伝えられる。これによって玉祖神社は高安11ヶ村が氏子となり、恩智神社は恩智村周辺のみとなってしまった。

縁起に登場する鉾立塚と弥生集落の北端と考えられる場所と位置が重なり合っている。だが、このような神社の縁起が弥生時代と直接むすびつくとはいえない。地形や環境などによって境界が設定されたのであろう。しかし、もしかして新たな参入者と地元民との争いが古墳時代以降にあり、その物語が民話として伝承され、縁起の元となったとすればと仮定することもできる。

このような仮定に答えをだすことが、考古学の仕事であろう。現時点では明確な答えを提出することができない。しかし、今回行ったような地道な調査がその答えに導いてくれるはずである。必ずしも多くの遺構や遺物を検出することのみが考古学という学問に課せられた仕事ではない。調査地と周辺の歴史や環境との総合的な検討から初めて一つの遺構、遺物が理解されるのである。その意味では今回の調査では弥生時代の遺構を確認できなかったことから、南端の可能性を示唆するものといえよう。今後の調査によってさらに明確な答えに近づいていきたいと思う。

（渚　斎）

２．萱振遺跡（1999－383）の調査

１．調 査 地：楠根町４丁目１－４他

２．調査期間：平成12年１月26日～２月１日

３．調査方法

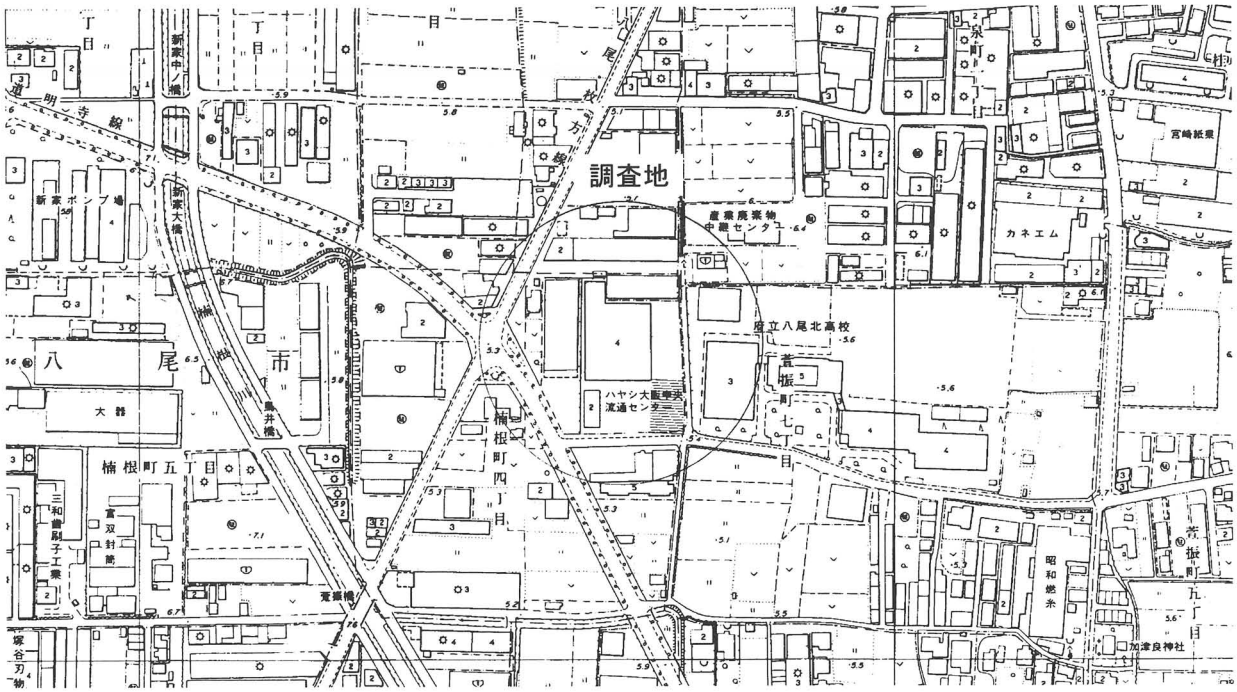
施工予定地に南北方向の調査区を３本設定し、地表下1.5m前後まで調査を行った。調査面積は３箇所で合計81.5㎡である。

４．調査概要

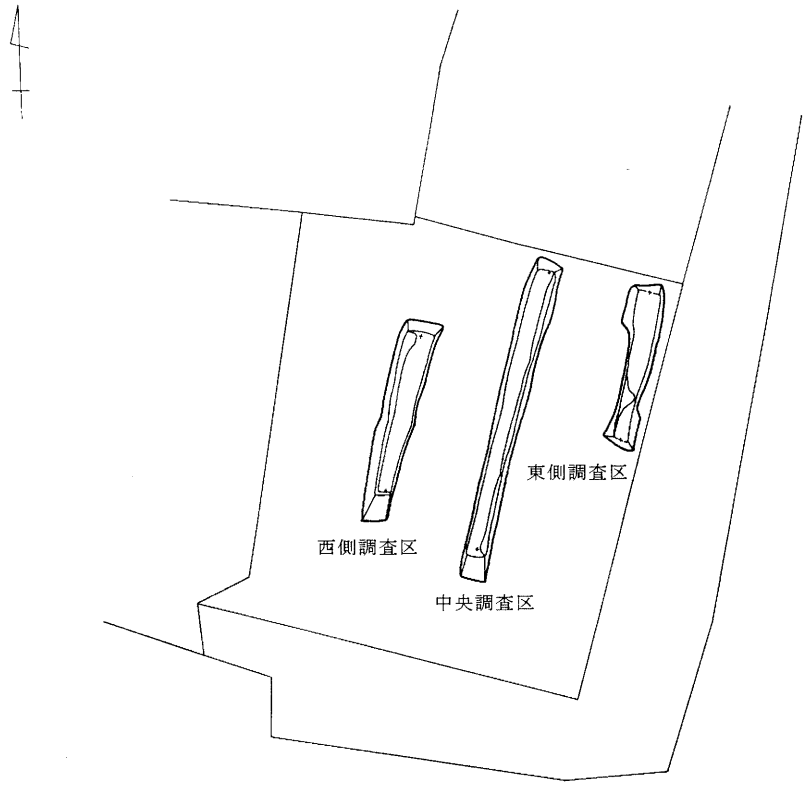
〔東側調査区〕最大幅2.5m、長さ11mの調査区であり、面積は18㎡である。地表下0.72～1.06m、T.P.＋4.33～3.99mで弥生時代後期の包含層である黒灰色粘土層（5－A・5－B層）を確認した。ここからは弥生式土器の甕片（１）等　が出土している。この下の灰色砂混粘砂層（６層）上面（TP＋4.0～4.1m前後）で弥生時代後期の遺構とみられる溝１条（ＳＤ１）、土坑２基（ＳＫ１、ＳＫ２）及び小穴５基を検出した。遺構の詳細は表のとおりである。

〔中央調査区〕最大幅1.5m、長さ21.5mの調査区であり、面積は32.3㎡である。地表下0.84～1.4m、TP＋4.28～3.7mで弥生時代後期の包含層である褐色斑暗灰色粘土層（12層）を確認した。ここからは弥生式土器の甕片（２．３）、壺片等が出土している。この下の灰色粗砂層（14層）上面（TP＋3.9～3.7m前後）で弥生時代後期の遺構とみられる土坑２基（ＳＫ３・ＳＫ４）及び小穴62基を検出した。遺構の詳細は表のとおりである。また11層は東壁断面を観察する限りでは砂混であり、人為的な盛土かとみられ、５層により削平されたとみられる層相を示している。

〔西側調査区〕最大幅2.5m、長さ13.5mの調査区であり、面積は30.4㎡である。地表下0.94～1.4m、TP＋4.18～3.78mで弥生時代後期の包含層である褐色斑暗灰色粘土層（18層）を確認した。ここからは北壁から4.8m付近を中心に弥生式土器の甕片（４～６）、高坏片（７）等が出土している。この下の灰色粘砂層（19層）、灰色粗砂層（20層）上面（T.P.＋3.9～3.8m前後）で弥生時代後期の遺構とみられるピット３基（ＳＰ１～ＳＰ３）、溝１条（ＳＤ２）、及び小穴38基を検出した。ＳＰ１、ＳＰ２は埋土の上面から小穴が切り込まれているが、柱穴跡とみられる掘り込みを掘り方内に確認している。ＳＰ３も隅丸方形かと



第６図　調査地周辺図（１／５０００）



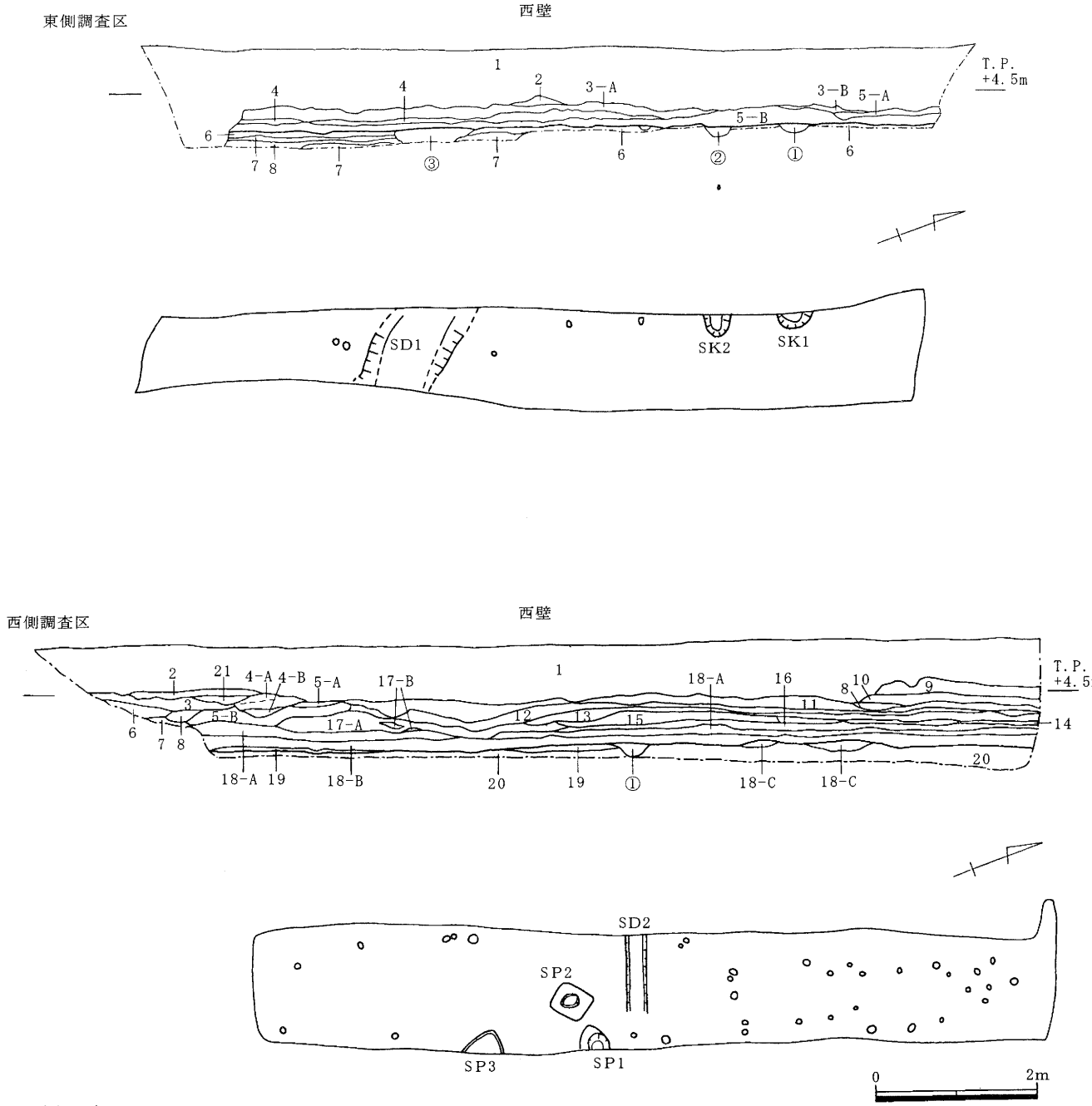
第7図　調査区設定図（1／500）

みられる形状からみて、柱跡と考えられる。遺構の詳細は表のとおりである。

〔まとめ〕本調査に北接する平成３年度の(財)八尾市文化財調査研究会による調査においても、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構が検出されている。今回の調査では古墳時代初頭の遺構は全く確認できなかったが、弥生時代後期の遺構面は確認することができた。　（吉田野乃）

調査区	遺構名	形状	最大径・巾(m)	最大深(m)	埋土	出土遺物
東側調査区	ＳＫ１	円形か	径0.44	0.1	灰緑色砂混粘砂層	なし
	ＳＫ２	円形か	径0.35	0.12	暗灰色砂混粘砂層	なし
	ＳＤ１		幅0.76	0.19	褐色斑淡灰色砂混粘砂層	なし
中央調査区	ＳＫ３	円形か	径0.78	約0.15	暗灰青色粘砂層	弥生式土器壺片等
	ＳＫ４	円形か	径0.68	約0.15	灰色粘砂層	なし
西側調査区	ＳＰ１	円形か	掘り方径0.38	0.05	暗灰色粘土層	なし
		円形か	柱穴0.25	0.15	灰色有機物混粘土層	なし
	ＳＰ２	隅丸方形	掘り方長0.46	0.05	暗灰色粘土層	なし
		不整円形	柱穴径0.24	0.1	灰色微砂混暗灰色粘土	なし
	ＳＰ３	隅丸方形か	長0.46	0.06	灰青色粘性微砂層	なし
	ＳＤ２		幅0.26	0.05	灰青色粘性砂層(灰色粘土ブロック)	なし
全調査区	小穴	円形・不整円形・楕円形	0.05～0.15前後	0.1前後	暗灰色粘土層	

検出遺構一覧表



東側調査区

1	現代盛土層	
2	淡灰緑色粘性微砂層	
3-A	灰白緑色粘土層	
3-B	灰白緑色粘土層と灰色微砂層の互層	
4	褐色斑灰色粘土層と灰色微砂層の互層	
5-A	黒灰色砂混粘土層	(弥生時代後期包含層)
5-B	同上砂多、有機物混	(弥生時代後期包含層)
6	灰色砂混粘砂層	(遺構面構成層)
7	灰色粗砂層	(遺構面構成層)
8	淡灰緑色微砂質シルト層	

遺構埋土

①	灰緑色砂混粘砂層	(ＳＫ1埋土)
②	暗灰色砂混粘砂層	(ＳＫ2埋土)
③	褐色斑淡灰色砂混粘砂層	(ＳＤ1埋土)

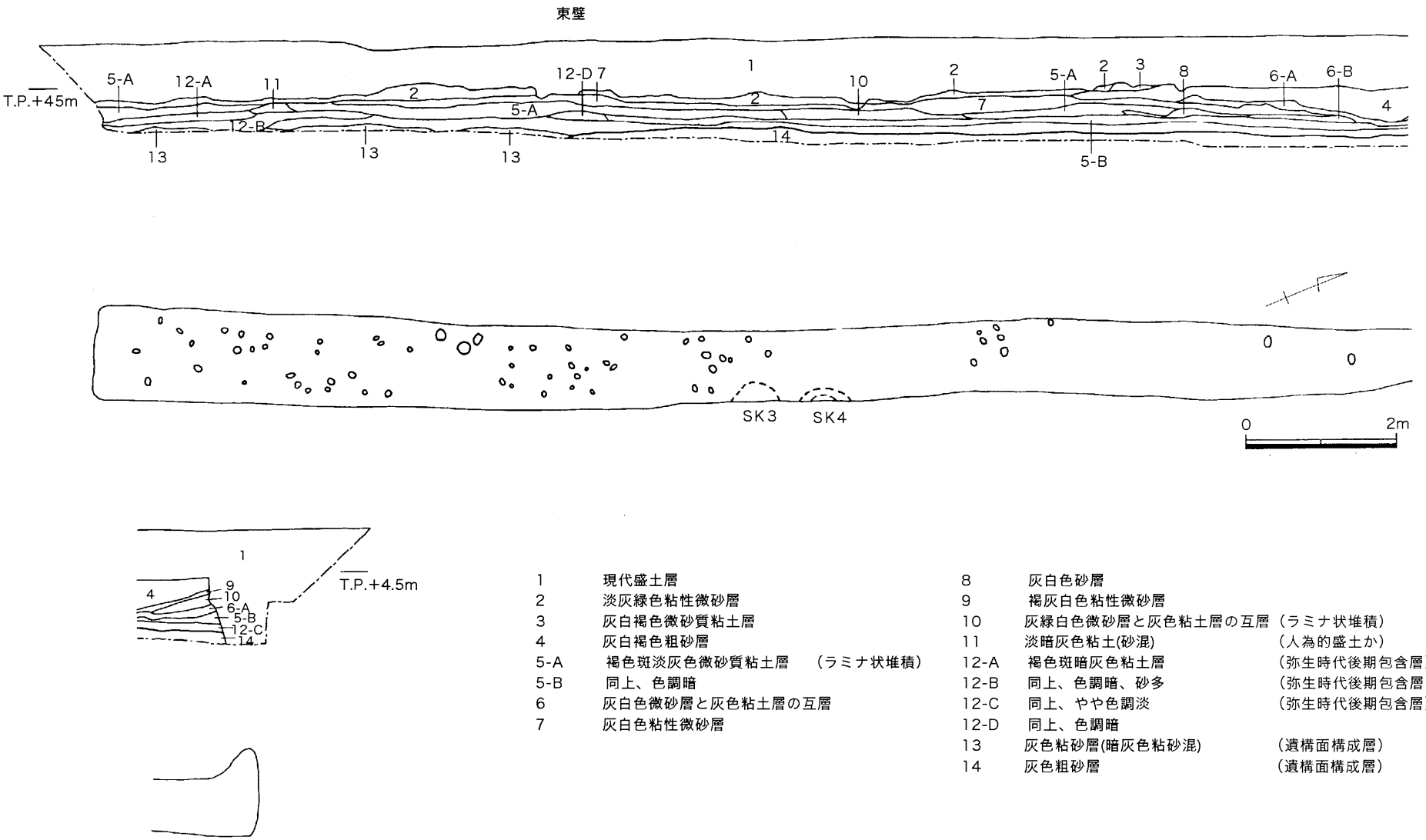
西側調査区

1	現代盛土層	
2	灰白色微砂層	
3	淡灰緑色粘性微砂層	
4-A	灰色微砂層	
4-B	灰色粗砂層	
5-A	淡灰緑色微砂層	
5-B	同上色調暗、粘性大、ラミナ状堆積	
6	灰白褐色粗砂層	
7	灰白色微砂層と灰色粘土層の互層	
8	灰色砂層	
9	褐色斑淡灰茶緑色微砂質粘土層	(ラミナ状堆積)
10	淡灰色微砂質粘土層	(ラミナ状堆積)
11	褐灰白色粗砂層	(ラミナ状堆積)
12	灰色粘性微砂層	
13	褐色斑灰色粘土層	
14	灰白色微砂層	
15	灰白色砂層、灰色粘土層の互層	
16	褐色斑灰色微砂質粘土層	
17-A	淡灰色微砂質粘土層	
17-B	灰白色微砂ブロック	
18-A	褐色斑暗灰色粘土層	(弥生時代後期包含層)
18-B	同上色調暗	(弥生時代後期包含層)
18-C	同上砂混	(弥生時代後期包含層)
19	灰色粘砂層(暗灰色粘砂混)	(遺構面構成層)
20	灰色粗砂層	(遺構面構成層)
21	灰茶色粘土層	

遺構埋土

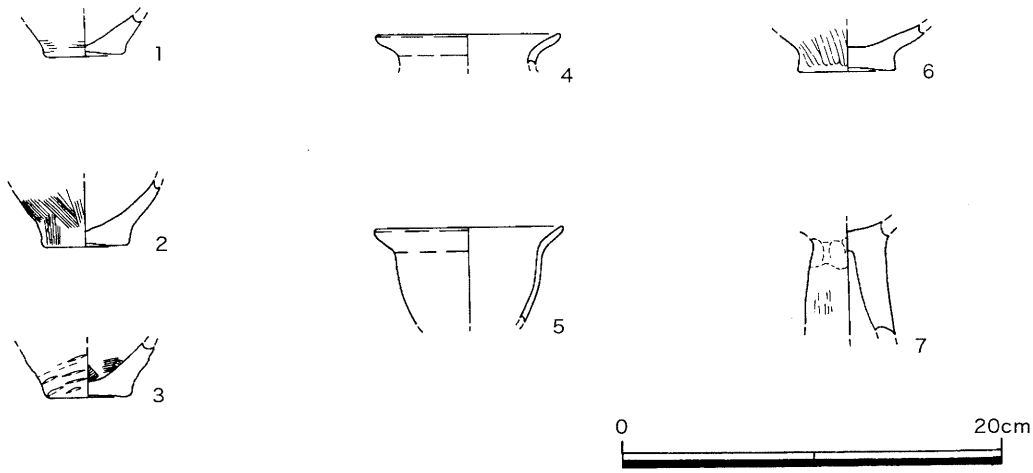
① 灰青色粘性砂層(灰色粘土ブロック)(ＳＤ2埋土)

第8図　東側・西側調査区　平面・土層断面図 (1／80)



1	現代盛土層	
2	淡灰緑色粘性微砂層	
3	灰白褐色微砂質粘土層	
4	灰白褐色粗砂層	
5-A	褐色斑淡灰色微砂質粘土層	（ラミナ状堆積）
5-B	同上、色調暗	
6	灰白色微砂層と灰色粘土層の互層	
7	灰白色粘性微砂層	
8	灰白色砂層	
9	褐灰白色粘性微砂層	
10	灰緑白色微砂層と灰色粘土層の互層	（ラミナ状堆積）
11	淡暗灰色粘土(砂混)	（人為的盛土か）
12-A	褐色斑暗灰色粘土層	（弥生時代後期包含層）
12-B	同上、色調暗、砂多	（弥生時代後期包含層）
12-C	同上、やや色調淡	（弥生時代後期包含層）
12-D	同上、色調暗	
13	灰色粘砂層(暗灰色粘砂混)	（遺構面構成層）
14	灰色粗砂層	（遺構面構成層）

第9図　中央調査区　平面・土層断面図（1／80）



第10図　出土遺物実測図（1／4）

出土位置	出土層	種類	番号	器種	部位	径（cm）	現高（cm）	調整・手法	色調	焼成	胎土	備考
東調査区	黒灰色粘土層付近	弥生式土器	1	甕	底部	3.8	2.1	体外面―板ナデ 底外面―ナデ 内面―ナデ	灰黄色	やや軟	やや良	
中央調査区	黒灰色粘土層		2	甕	底部	4.2	3.4	体外面―ハケメ 底外面―ナデ 内面―ナデ	淡燈赤色	やや軟	粗	
中央調査区北より９ｍ	黒灰色粘土層直上		3	甕	底部	4.0	2.7	体外面―タタキ 底外面―ナデ 内面―ヨコハケ	暗赤燈色	やや硬	粗	外面にスス付着
西調査区北より４．８ｍ	黒灰色粘土層		4	甕	口縁部	9.6	1.6	内外面―ナデか	淡暗褐色	やや軟	粗	
			5	甕	口縁～体下半部	9.8	5.0	摩滅により不明	淡燈赤色	軟	やや粗	
			6	甕	底部	5.0	2.3	体外面―縦方向ヘラミガキ 内面―ナデ	暗赤燈色	やや軟	非常に粗	
			7	高坏	脚部	4.6(最大径)	5.8	外面―縦方向ヘラミガキ、ユビオサエ 内面―ナデか	淡暗灰色	やや軟	粗	

出土遺物観察表

３．萱振遺跡（2000－103・214）の調査

１．調 査 地：萱振町７丁目57-1・68-2・68-3

２．調査期間：平成12年８月18日（2000-103）・9月４日（2000-214）

３．調査方法：

［2000-103］：分譲住宅建設に伴い、人孔設置箇所（2m四方）の５ヶ所（１区～５区と呼称）について地表下1.7m前後までの遺構確認認調査を行った。調査面積は約20㎡を測る。

［2000-214］：この調査地は、2000-103の調査地の北側に隣接している。店舗建設に伴い、建物建築範囲に東西２ヶ所（６区・７区と呼称：約2m四方）で地表下1.0m前後まで遺構確認調査を行った。調査面積は約8㎡を測る。

なお、この２つの調査地は、隣接した場所にあり、今回各調査成果を合わせて報告することにする。

４．調査概要：

［2000-103の調査概要］

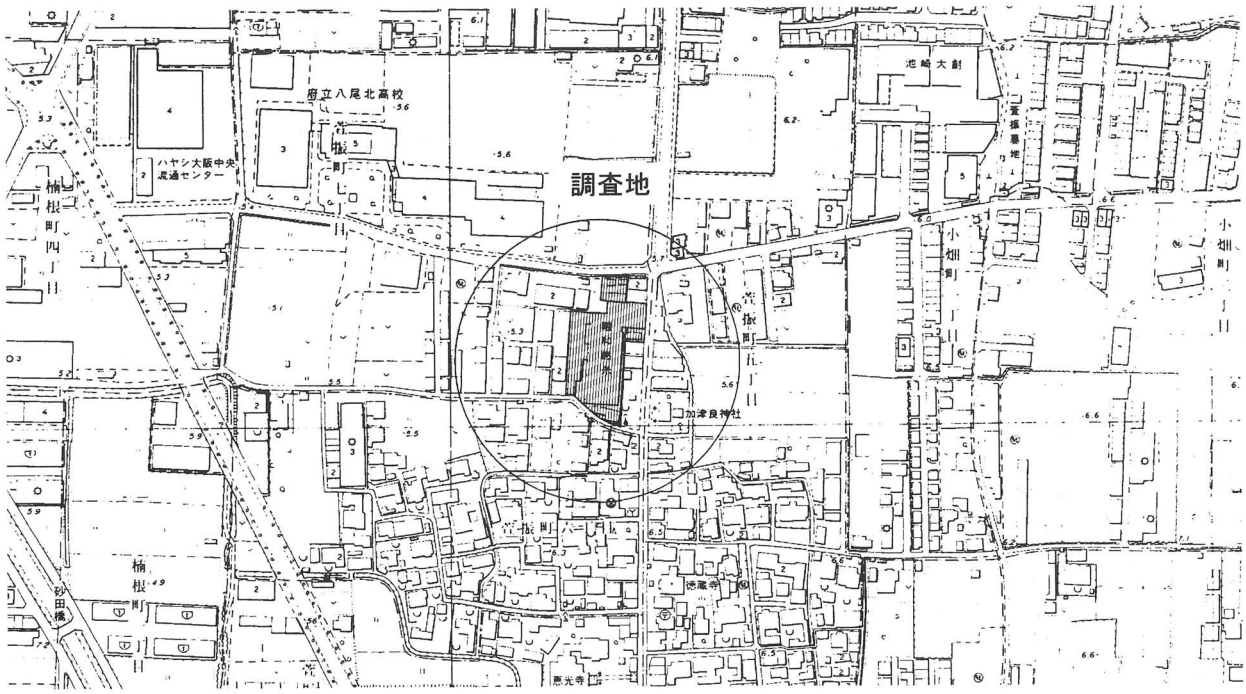
1区）　調査地南西の調査区で、地表下0.5m付近より南北方向の溝を１条確認している。幅約2m以上、深さ約0.6mの台形状断面の溝である。溝埋土（1区－6・7層）からは、屋瓦を中心として、すり鉢、羽釜、瓦質土器、土師器、須恵器、瓦器の破片が出土している。瓦には、軒丸瓦や丸瓦があり、軒丸瓦の三巴文から鎌倉時代（13世紀代）のものと考えられ、中世以降に埋没したものであると考えられる。この溝の続きは、その他の調査区では確認できなかった。

以下、地表下0.9mから河川堆積層が続く。顕著な遺物は確認できなかった。

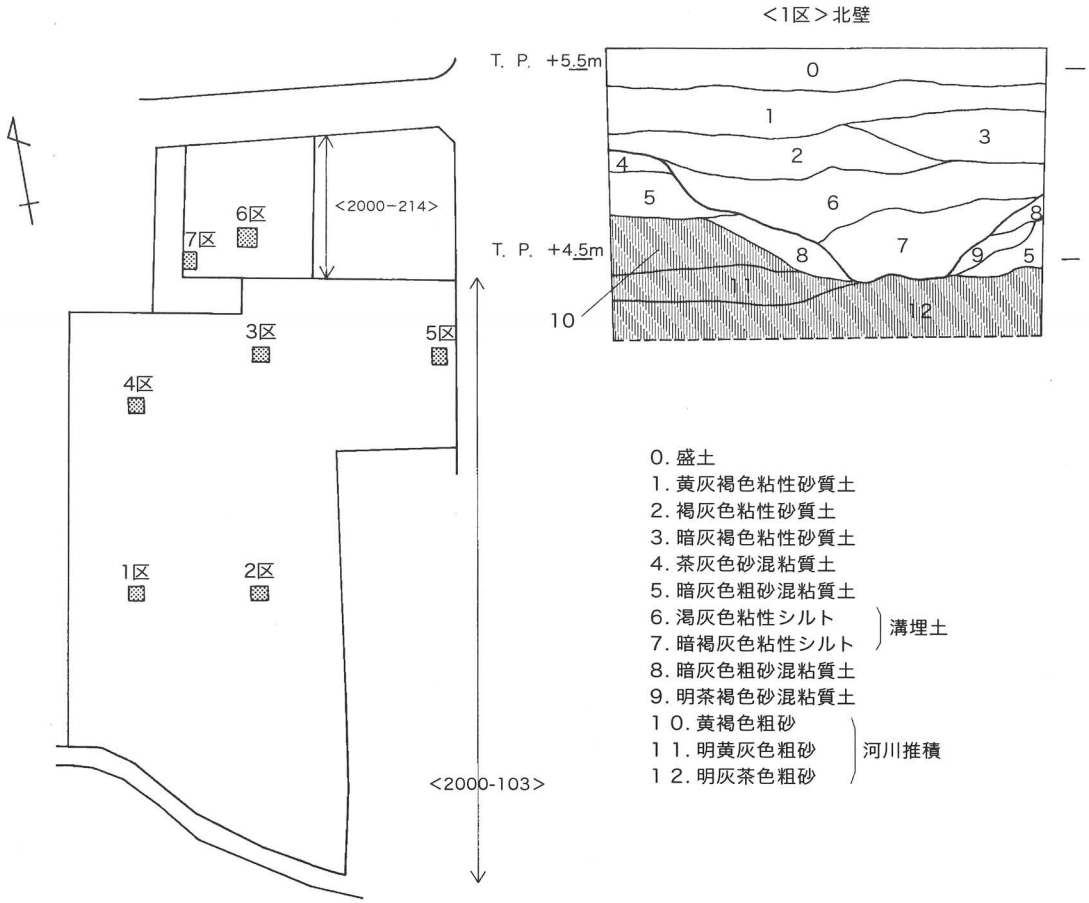
2区）　1区の東側に位置する調査区である。1区で確認した中世の遺構面に対応する層は確認できなかった。以下、地表下0.9mから河川堆積層が続く。遺物は確認できなかった。

3区）　2区の北側に位置する調査区である。2区と同様に1区に対応した近世の遺構面は確認できず、地表下0.9mから河川堆積層が続く。遺物は確認できなかった。

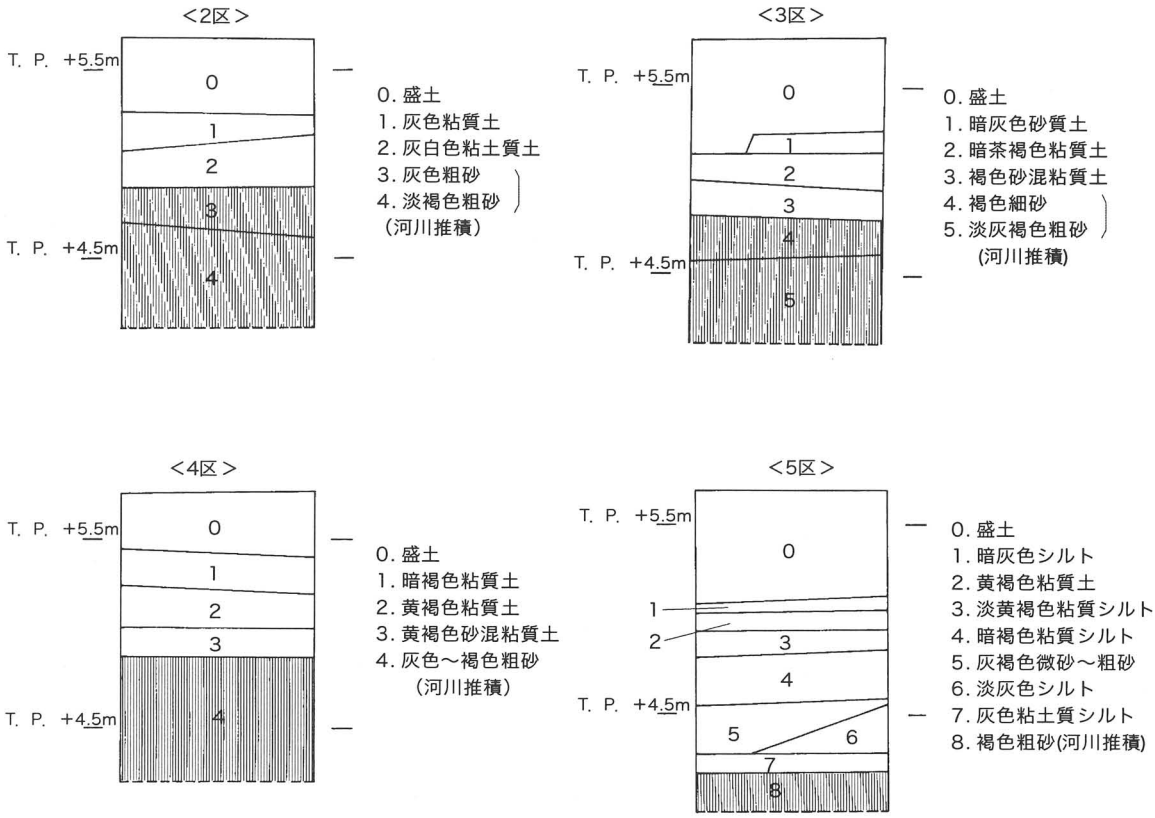
4区）　1区の北側に位置する調査区である。1区の溝状遺構の続きはこの北側の調査区でも確認できな



第11図　調査地周辺図（１／５０００）



第12図　調査区設定図（1／1000）



第13図　土層断面模式図（1／40）

かった。また該期の遺物を含む層も確認できなかった。以下、地表下0.75mから河川堆積層が続く。
5区）　3区の東側に位置する調査区である。他の4つの調査区と異なり河川堆積層が地表下1.5mから始まり、他の調査区よりやや深いものの、上層でも遺構・遺物ともに確認できなかった。

［2000-214の調査概要］

6区）　3区の北側約12mに位置する調査区である。基礎掘削深の地表下1.0m前後までの調査を実施した。この調査の掘削深では、1区～5区で確認した河川堆積層までは達せず、河川堆積層上面の遺構面までの調査となった。

盛土直下の褐灰色粗砂混粘質土層(2層)から、土師器、須恵器に混じって平瓦が出土している。以下地表下0.85m(T.P.＋4.8m)の暗灰色シルト混粗砂層(6層)をベースとして、中世の遺構面を検出している。検出した遺構はピット1基のみ(直径約0.4m)である。ピット内の出土遺物は、土師器細片２点のみであった。

7区）　6区の西側約5mの調査区である。旧耕土直下の地表下0.7m(T.P.＋4.9m)の暗褐色シルト混粘質土(3層)をベースとして、方形土壙と落ち込み状土壙を確認している。方形土壙は、調査区中央で検出した約0.8m四方のほぼ正方形の形状で、出土遺物には瓦器、須恵器、土師器、白磁、灰釉陶器、焼土塊がある。いずれも小片ばかりで、何らかの廃棄壙であったと考えられる。時期は、中世である。

落ち込み状土壙は、調査区南側端で検出した。調査区外の南側に広がると思われ、高坏や甑を中心として出土しており、埋土に炭が多く混じっている。住居址に関連する遺構であると考えられる。時期は、古墳時代中期頃である。

7区では、古墳時代中期と中世のそれぞれ時期の異なる遺構がほぼ同一遺構面に存在していることが明らかになった。

５．出土遺物

図化できたのは、16点ある。(1)～(5)が1区の出土遺物である。1区の溝からは軒丸瓦(1)、丸瓦(2～5)の破片が出土している。(1)の軒丸瓦の巴文様は、巴文の頭部が完全に独立しておらず、巴頭部がやや尖っている。外縁の珠文帯は、小さく、突出している。外縁帯は、幅広である。これらの特徴から鎌倉時代中期頃のものであると考えられる。

(6･7)は、6区の遺物包含層からの出土で瓦器碗の破片である。

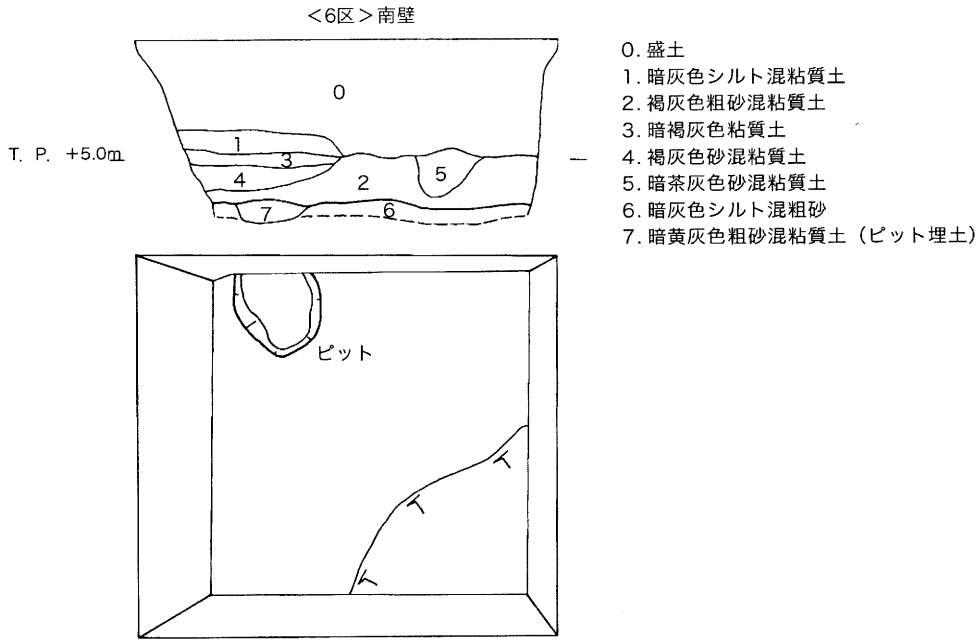
(8)～(16)が7区の出土遺物である。方形土壙の出土遺物は、多数出土しているが、ほとんどが細片で唯一図化できたのが、(8)の土師皿の破片である。これら出土遺物から6区･7区ともに中世の遺構面が広がっていることがわかる。

(9)～(16)が落ち込み状土壙の出土遺物で、(9)～(13)が高坏の坏部及び脚部である。いずれも別個体で高坏が多数を占めている。坏部は椀形を呈し、外面はハケ、内面はヘラミガキが見られる。(14)は甕の口縁部～頸部である。(15)･(16)は甑である。同一個体と見られるが、接合はできなかった。外面はハケ調整である。また、図化できなかったが、同一個体と思われる甑底部(穿孔あり)の破片が出土している。

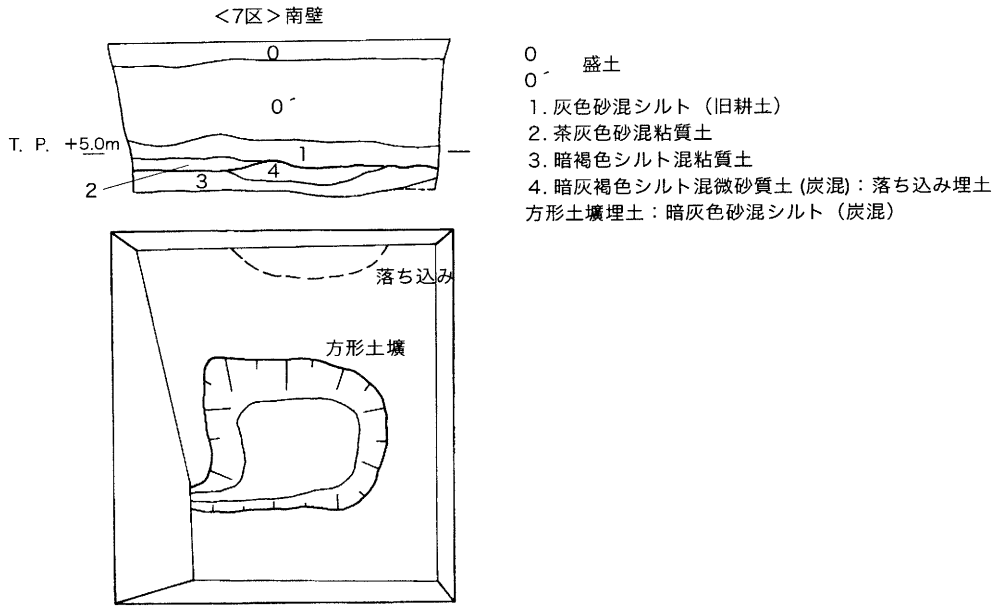
６．まとめ

1～5区では、調査区すべてに、T.P.+4.7m前後(5区ではT.P.+4.2m)を上面として河川堆積層が続くことが明らかとなった。おそらく、6･7区でも検出した遺構面の直下は同様の河川堆積層が続くと思われる。いずれの調査区でも河川底面の深さは確認できなかったが、今回の調査地東側で実施された下水道工事に伴う発掘調査(西村1996)では、T.P.+4.2mを上面として層厚約4.2mの深い河川堆積層であることが明らかになっている。今回確認した河川堆積もこれに対応する可能性が高い。さらに、この河川は、府立八尾北高校の大阪府教育委員会の調査で検出した河川(広瀬1992)へと続く北西方向の大河川であった可能性が高い。

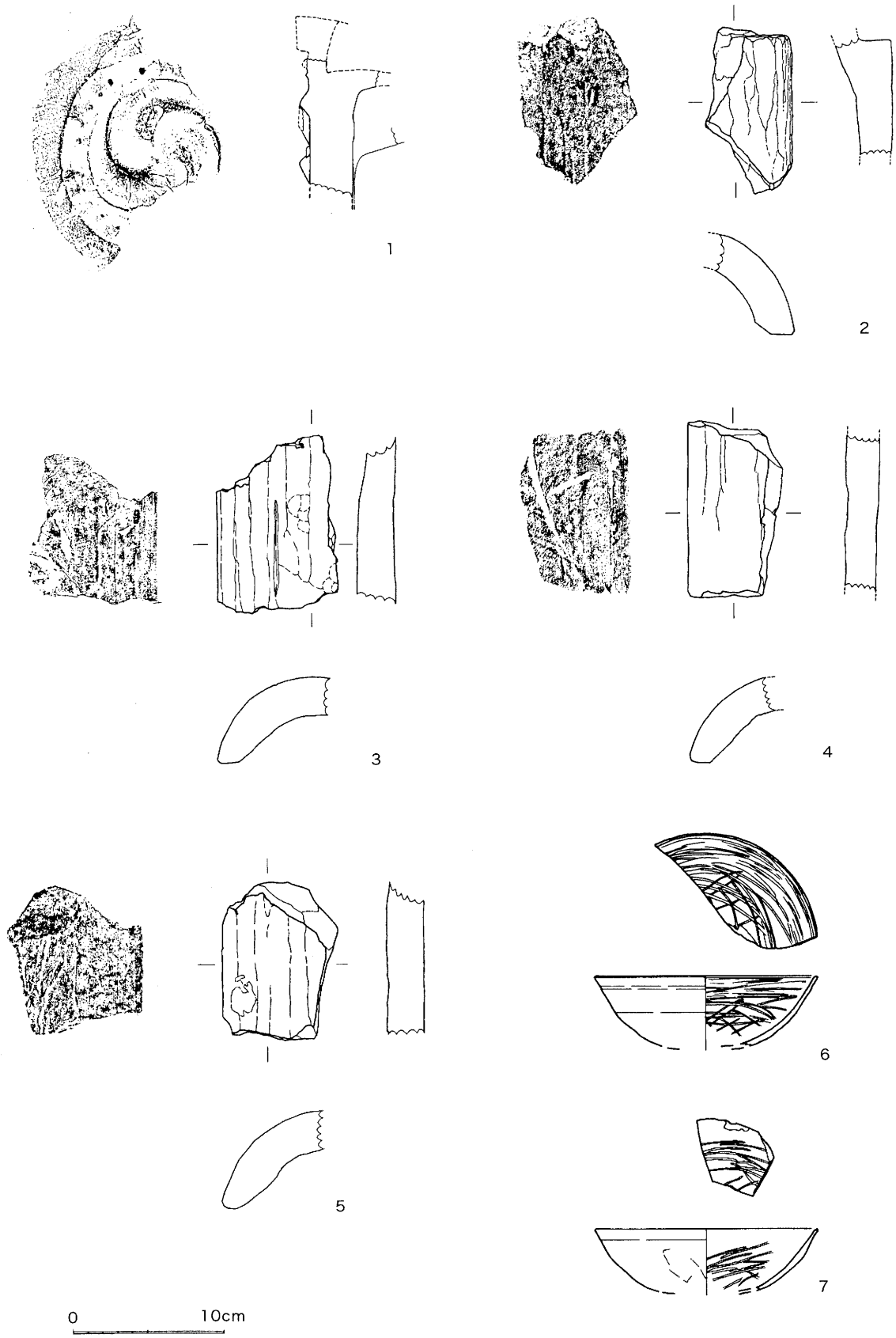
この河川が埋没した時期は、上面に古墳時代中期･中世の遺構面が一部に見られることから古墳時代中



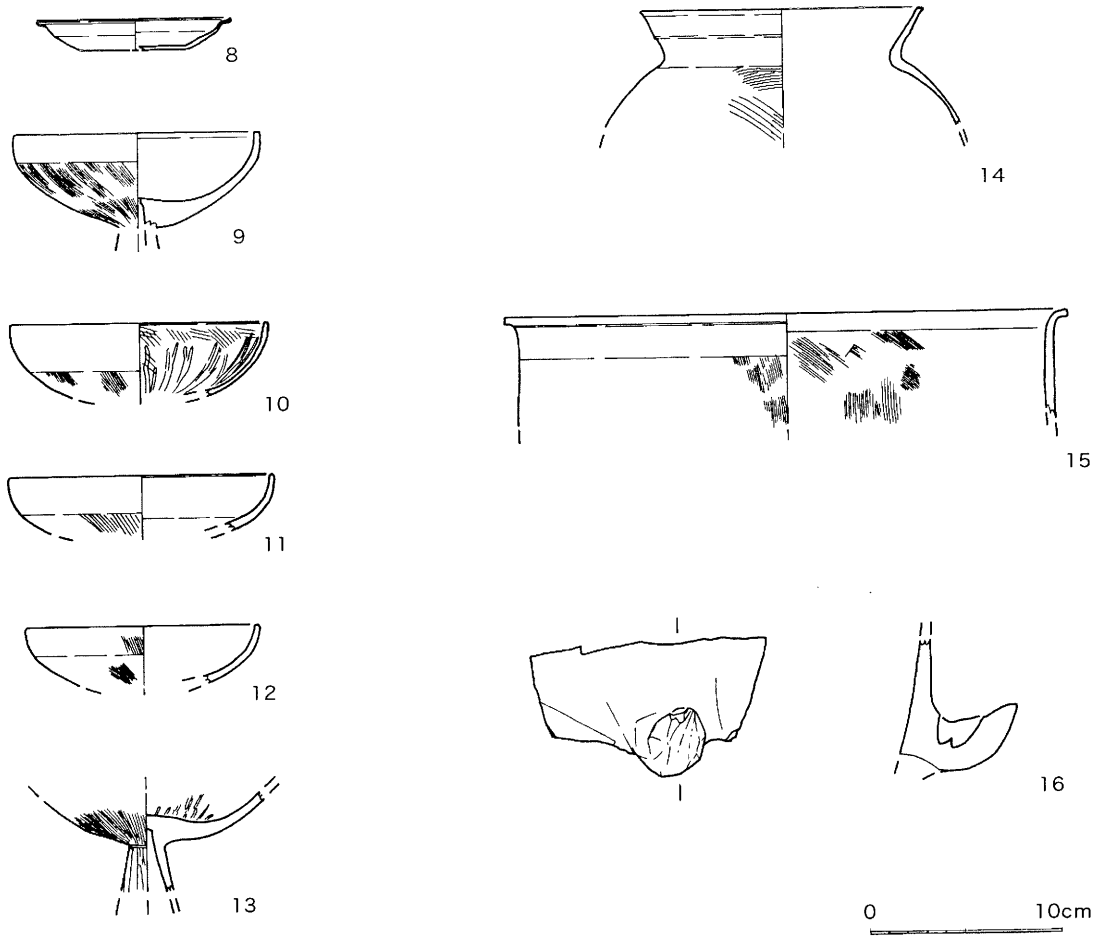
第14図　6区土層断面図・平面図（1／40）



第15図　7区土層断面図・平面図（1／40）



第16図　出土遺物実測図（1～5：2000-103・6.7=2000-214・S=1／2）



第17図出土遺物実測図(8～16=2000-214・S=1／4)

期以前に埋没した河川である可能性が高い。

そして、この河川が埋没した後には、比較的安定した土地になったと考えられ、6区・7区で検出した古墳時代中期～中世の集落域が形成されていったものと思われる。特に中世瓦の出土は、調査地東側にある式内社の加津良神社の存在も合わせて、該期の遺構面が広がっている可能性がある。　（藤井）

【参考文献】

広瀬雅信　1992『萱振遺跡　大阪府文化財調査報告書　第39輯』大阪府教育委員会
渚斎　1993「萱振遺跡(92-006)の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ』
西村公助　1996「萱振遺跡第18次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告53』
岡田清一　1998「萱振遺跡第21次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告60』

萱振遺跡(2000-103・214) 出土遺物観察表

No.	出土地点	器種	法量(cm)	調整・形態等の特徴	色調	焼成	胎土
1	1区 溝	軒丸瓦	(残存長) 9.6 (瓦当厚) 1.5	(瓦当面) 巴文	(外面) 10YR5/1 褐灰	良好	密
2	1区 溝	丸瓦	(長辺) 5.3 (短辺) 2.9 (厚さ) 1.2	(凹面) 布目痕 (凸面) 無文ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞｹｽ (側面) ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾐｶﾞｷ	(外面) 10YR5/1 褐灰	良好	密
3	1区 溝	丸瓦	(長辺) 5.6 (短辺) 4.0 (厚さ) 1.2	(凹面) 布目痕・ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ (凸面) ﾍﾗﾐｶﾞｷ後ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ (側面) ﾍﾗｹｽﾞﾘ	(外面) 10YR4/1 褐灰	良好	密
4	1区 溝	丸瓦	(長辺) 6.0 (短辺) 3.1 (厚さ) 1.1	(凹面) 布目痕 (凸面) 無文ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞｹｽ (側面) ﾍﾗｹｽﾞﾘ	(外面) 10YR6/1 褐灰	良好	密
5	1区 溝	丸瓦	(長辺) 5.3 (短辺) 3.8 (厚さ) 1.2	(凹面) 布目痕 (凸面) 無文ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞｹｽ (側面) ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞｹｽ	(外面) N4/0 灰	良好	密
6	6区 包含層	瓦器	(口径) 15.0 (残存高) 4.7	(外面) ﾖｺﾅﾃﾞ・ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ (内面) 暗文	(外面) N5/0 灰 (内面) N5/0 灰	良好	密
7	6区 包含層	瓦器	(口径) 15.0 (残存高) 4.2	(外面) ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ (内面) 暗文	(外面) N7/0 灰 (内面) N6/0 灰	良好	密
8	7区 方形土壙	土師皿	(口径) 10.1 (器高) 1.7	(外面) ﾖｺﾅﾃﾞ・ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ (内面) ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	(外面) 5YR7/6 橙 (内面) 5YR8/4 淡橙	良好	密
9	7区 Pit (焼土層)	高坏 坏部	(口径) 12.8 (残存高) 4.9	(外面) ﾀﾃﾊｹ (内面)	(外面) 5YR6/6 橙 (内面) 5YR7/6 橙	良好	密
10	7区 Pit (焼土層)	高坏 坏部	(口径) 13.5 (残存高) 3.9	(外面) ﾀﾃﾊｹ・ﾖｺﾅﾃﾞ (内面) 粗いﾊｹ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	(外面) 5YR6/8 橙 (内面) 5YR7/6 橙	良好	密
11	7区 Pit (焼土層)	高坏 坏部	(口径) 14.0 (残存高) 3.0	(外面) 粗いﾊｹ・ﾖｺﾅﾃﾞ (内面) ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	(外面) 5YR7/6 橙 (内面) 5YR6/6 橙	良好	密
12	7区 Pit (焼土層)	高坏 坏部	(口径) 12.3 (残存高) 3.1	(外面) ﾀﾃﾊｹ (内面) 調整不明	(外面) 5YR6/6 橙 (外面) 5YR6/6 橙	良好	密
13	7区 Pit (焼土層)	高坏 脚部	(底径) 3.0	(外面) ﾊｹ後ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾃﾊｹ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ (内面) ﾍﾗﾐｶﾞｷ〔若干黒変あり〕・ﾅﾃﾞ	(外面) 5YR6/6 橙 (内面) 5YR7/8 橙	良好	密
14	7区 Pit (焼土層)	甕 口縁～肩部	(口径) 15.1 (残存高) 6.2	(外面) ﾊｹ (内面) ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾕﾋﾞｵｻｴ	(外面) 10YR7/3 にぶい黄橙 (内面) 10YR7/4 にぶい黄橙	良好	密
15	7区 Pit (焼土層)	甑 口縁部	(口径) 29.6 (残存高) 5.7	(外面) ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹ (内面) ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾃﾊｹ・ﾅﾅﾒﾊｹ	(外面) 7.5YR7/6 橙 (内面) 7.5YR8/3 淡黄橙	良好	密
16	7区 Pit (焼土層)	甑 取手	― ―	(外面) ﾍﾗによる切込み・ﾅﾃﾞ (内面) ﾀﾃﾊｹ	(外面) 7.5YR7/6 橙 (内面) 7.5YR8/3 淡黄橙	良好	密

4．久宝寺遺跡（2000－48）の調査

1．調 査 地：神武町１番７９号

2．調査期間：平成12年５月８日～平成12年５月10日

3．調査方法

倉庫建設に先立ち、敷地内の建物建設予定個所に調査区を７ヶ所（１区5×5m、２区 6×5 m、３区4×4m、４区3×3.2m、５区3.5×3m、６区3.5×3.3 m、７区3.3×3.1 m、合計面積112.88㎡）設定し、それぞれ地表下2.0 m前後まで重機と人力を併用して調査を行った。

4．調査概要

１区

６層は古墳時代初頭に相当する地層で、上面（T.P.+5.9～6.0m）は土壌化しており、粘土やシルトのブロックが多く混ざった土であることから、撹拌した土である。耕作の痕跡の可能性がある。上面では落ち込み1箇所（ＳＯ101）を検出した。

ＳＯ101

この落ち込みの掘り方は明確ではなく、おそらく調査区の北東から南西に溝状に蛇行して伸びる形状であると思われ、幅1.4～1.6mを測る。断面形状は皿状で、深さ0.2mを測る。埋土は灰色粘土で、遺物の出土はなかった。

２区

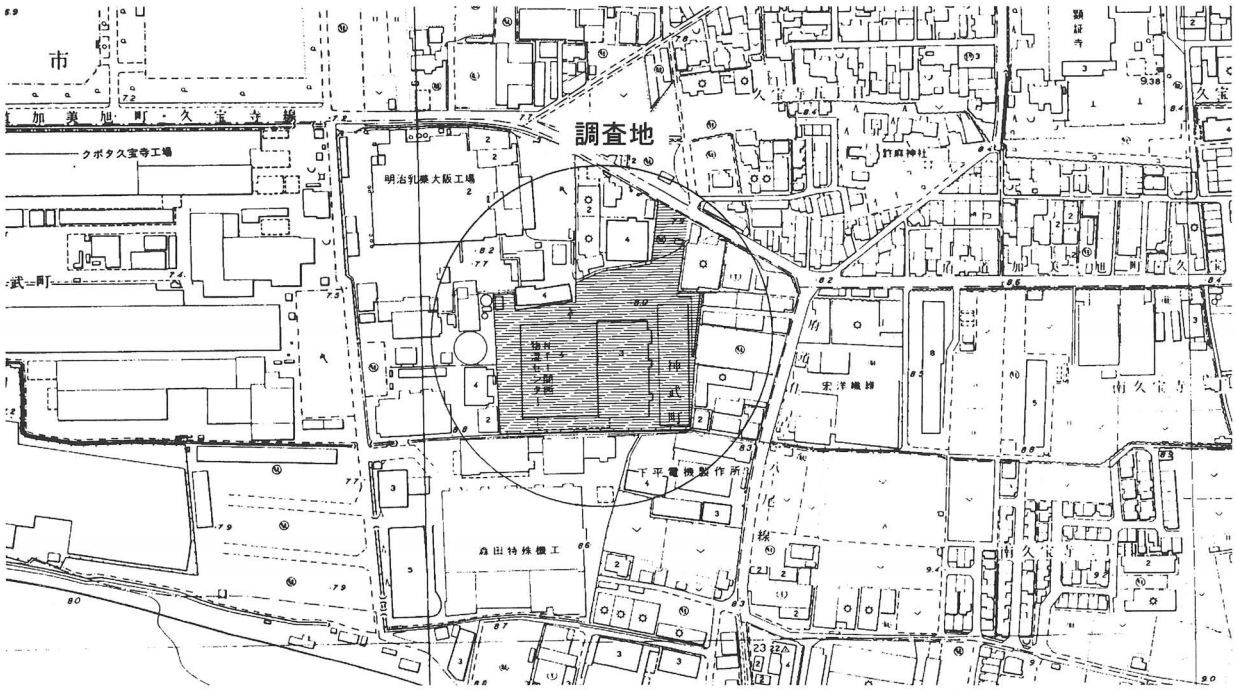
６層上面（T.P.+6.0～6.1m）で調査を行ったが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。この地層は古墳時代初頭に相当する。

３区

７層上面（T.P.+6.2～6.3m）で土坑1基（ＳＫ301）を検出した。この地層は古墳時代初頭に相当する。

ＳＫ301

平面形状は南北に長い楕円形で、長径2.１m、短径1.2mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.1m測る。埋土は灰色粘土で、遺物の出土はなかった。



第18図　調査地周辺図（１／５０００）

４区

６層上面(T.P.+6.3m)で調査を行ったが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。この地層は古墳時代初頭に相当する。

５区

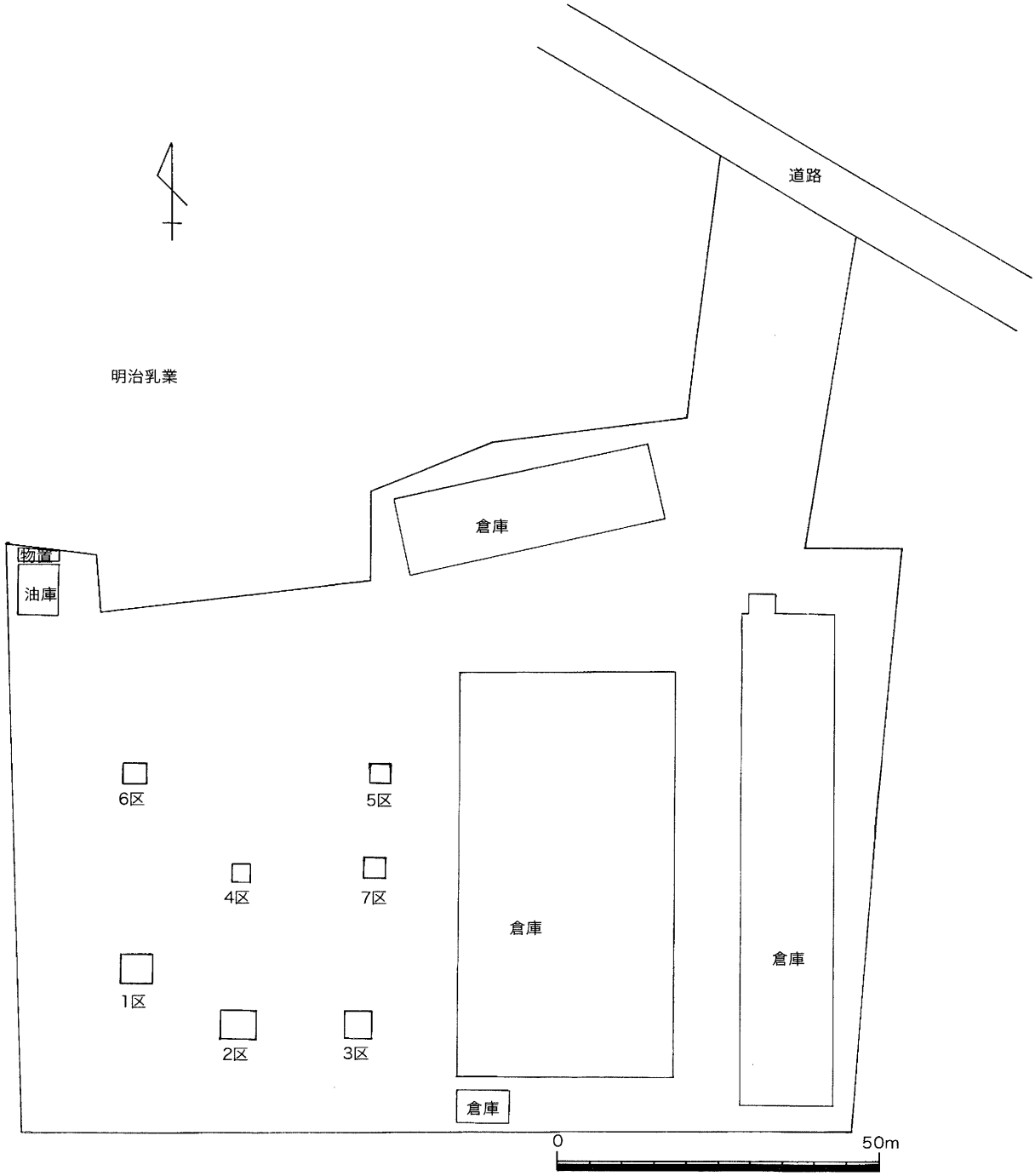
10層上面(T.P.+6.1～6.2m)で、古墳時代初頭の土坑２基(ＳＫ501・ＳＫ502)を検出した。

ＳＫ501

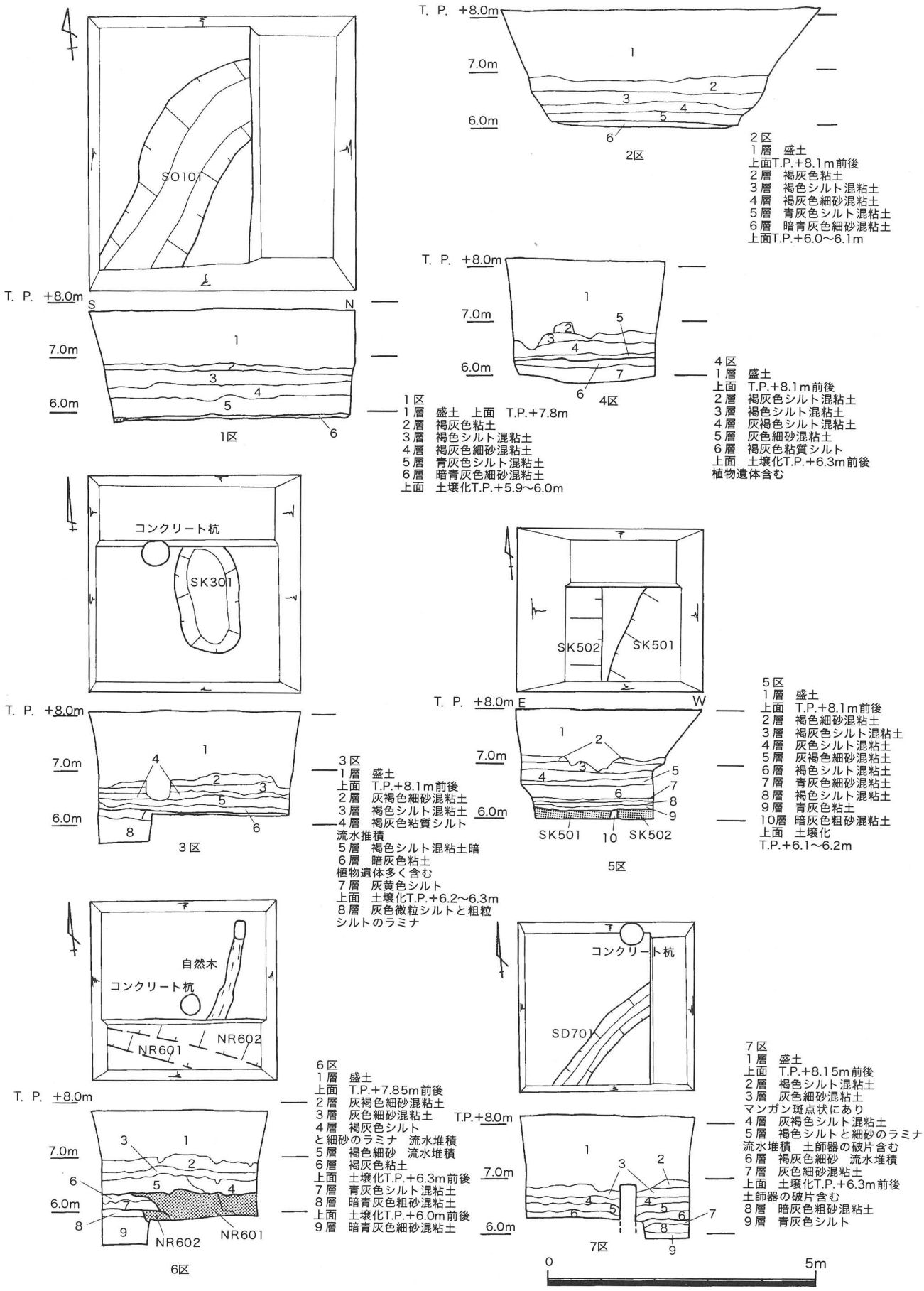
遺構の西側肩のみの検出であるため遺構の規模は不明である。深さ約0.2mを測る。埋土は黒色細砂混粘土で、古墳時代初頭(庄内式)の甕(１)が出土した。

ＳＫ502

遺構の東側肩のみの検出であるため遺構の規模は不明である。深さ約0.2mを測る。埋土は黒色細砂混粘土で、遺物の出土はなかったが、ＳＫ501と同時期と思われる。



第19図　調査区設定図



第20図　1区～7区平断面図

6区

6層上面(T.P.+6.3m)で河川(NR601)と、8層上面(T.P.+6.0m)で河川(NR602)を検出した。

NR601

河川の南肩のみを検出したのみで、この河川の形状や規模などは不明である。南東－北西方向に伸びる。埋土は上からⅠ灰色粗砂と細砂のラミナ、Ⅱ褐灰色微砂と細砂のラミナ、Ⅲ青灰色粘土、Ⅳ灰色粘土(植物遺体多く含む)で、土師器の破片が数点と自然の木が出土した。

NR602

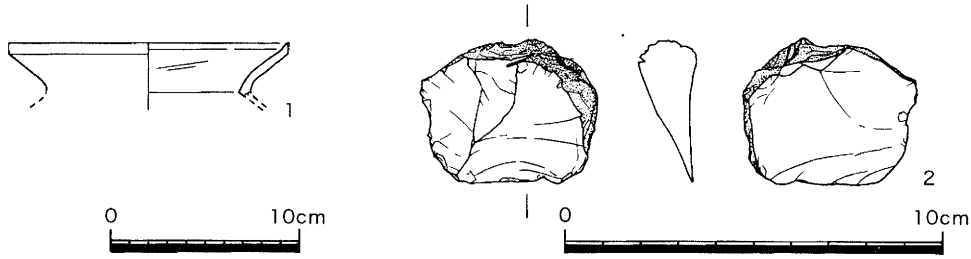
河川の南肩のみを検出したのみで、この河川の形状や規模などは不明である。NR601と同じく南東－北西方向に伸びる。埋土はⅠ青灰色シルトと微砂のラミナで、遺物の出土はなかった。

7区

7層上面(T.P.+6.3m)で、溝1条(SD701)を検出した。7層内からは土師器の破片やサヌカイトの剥片(2)が出土していることから、上面で検出した遺構の時期は、古墳時代初頭頃に比定できる。

SD701

南西－北東に直線に伸びる。幅0.5mを測り、断面形状は皿状で、深さ0.1mを測る。埋土は灰色細砂混微砂で、遺物の出土はなかった。



第21図　出土遺物実測図(土器1／4　石器1／2)

5.出土遺物

5区のSK501からは古墳時代初頭(庄内式)の甕(1)が出土した。(1)は口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケを施す。7区の7層からはサヌカイトの剥片(2)が出土した。(2)は両面に剥離が見られ、一部に自然面が残る。

6.まとめ

今回の調査では遺構の性格が明確にできなかった。しかし、これまでの調査(財団法人八尾市文化財調査研究会　第6次調査地)において古墳時代初頭の遺構が検出されており、今回の調査地の5区で検出した遺構(SK501・SK502)はこれら遺構面の広がりの一端であると考えられる。

また、同研究会第6次調査地の第7層からは弥生時代中期(第Ⅲ様式)の土器が出土しており、墓域が存在した可能性が高いと述べられている。今回の調査ではこの時期の土器の出土はなく、墓域の存在は明らかにできなかった。しかし、7区の7層からは石器の剥片が出土おり、この石器は弥生時代の遺物である可能性があり、近隣に弥生時代の遺構が存在している可能性が高いと考えられる。　(西村公助)

【参考文献】 原田昌則　1993「Ⅲ　久宝寺遺跡(第6次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告37

5．久宝寺遺跡（1999－639）の調査

1．調　査　地：北亀井町3丁目41番地

2．調査期間：平成12年5月15日・16日

3．調査方法

工場建設に伴い、建物建築範囲について、東西方向に2ヶ所の調査区（約2.8m四方：東側を第1区・西側を第2区と呼称）を設定し、地表下約3.2m前後まで遺構確認調査を実施した。

4．調査概要

第1区：層厚約0.9mの盛土層以下、旧耕土層が見られる。以下、地表下1.4m～1.7mに洪水砂が見られた。そして、地表下2.15m～2.4m（T.P.+5.9m～5.7m：総厚約0.2m）の暗灰色小礫混粘質シルト層（植物遺体含）に土師器細片が含まれる。遺物は少量ながら、古墳時代初頭頃の遺物包含層であると考えられる。断面で浅い皿状の落ち込みは確認できたものの、顕著な出土遺物は確認できなかった。

以下、地表下2.85m（T.P.+5.2m）からは河川堆積層が続く。

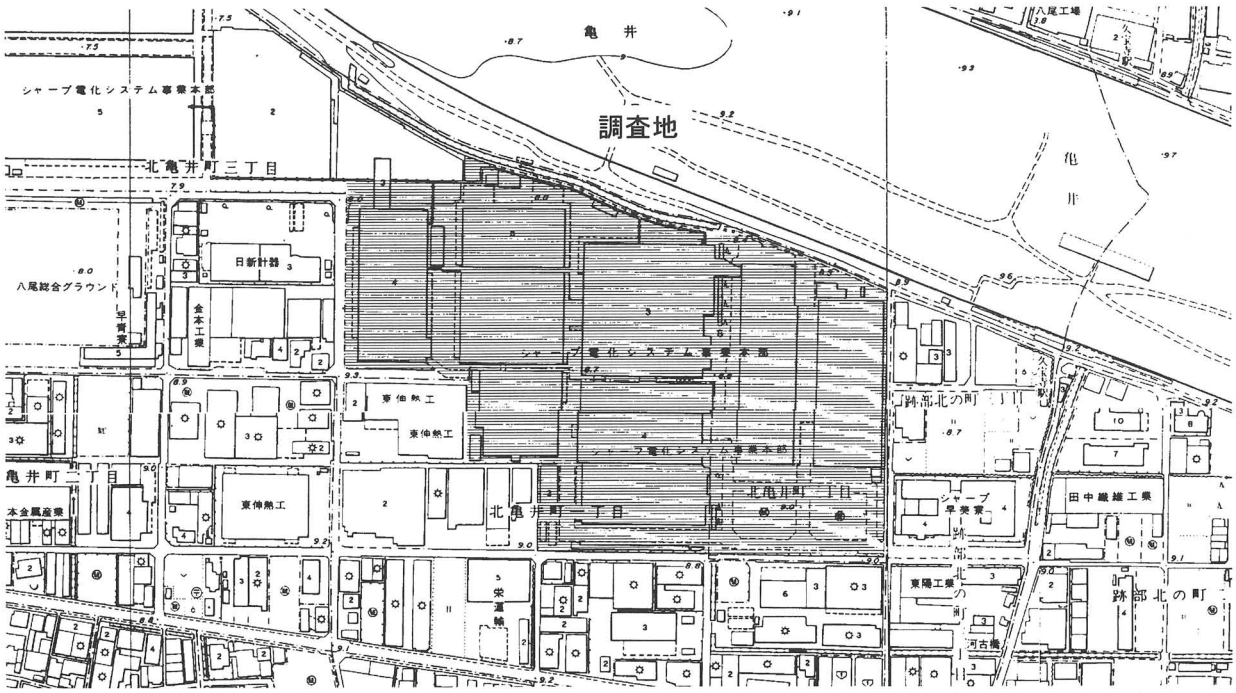
第2区：層厚約0.9mの盛土層以下、地表下1.75m（T.P.+6.25m）から弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器を多数含む層厚約50cmの落ち込み状の堆積層（6～8層）が確認できた。この層は調査区内全体に広がる。この層は、溝の堆積土と考えられ、上層が灰色粘質シルト（植物遺体をラミナ状に含む：6層）と下層が暗灰色微砂混シルト（7・8層）に分けられる。上層に特に庄内式甕などの完形品を含んでいる。この層は、地表下2.25m（T.P.+5.75m）まで続く。おそらく2時期の遺物包含層になると考えられる。

以下、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

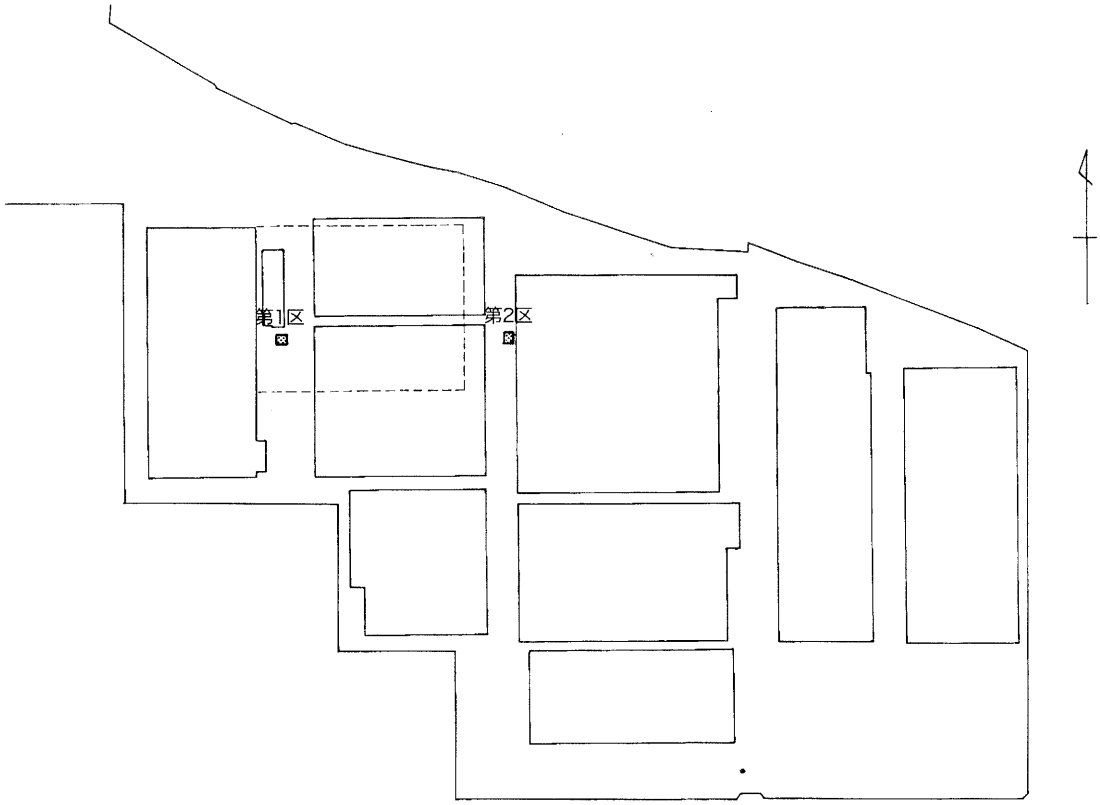
5．出土遺物

今回の調査の出土遺物は、第2区の溝内の土器集積からの遺物を中心としており、第1区の出土遺物はわずかな土師器の小片のみで図化できなかった。今回図化できた出土遺物は、第2区のみで、19点を数え、すべてこの集積内の出土遺物である。上層の古墳時代初期の土器に混じって、一部弥生時代後期の遺物も含まれていた。

1～3は庄内式甕で、1はほぼ完形品で中位に最大径をもつ。4・5は布留式系甕である。6～9は、甕



第22図　調査地周辺図（1／5000）



第23図　調査区設定図（S＝1／3000）

の口縁部の破片である。それぞれV様式系甕、庄内式甕である。10は小型甕で体部はハケ調整である。11は、口縁部の短い小型丸底壺である。12～14は高坏の破片である。12は口縁部が直線的に伸びる。15・16は装飾壺の口縁部である。17・18は、それぞれ壺の口縁である。18は弥生時代後期の壺で外面はヘラミガキである。

これら出土した土器は、庄内式土器を主体としており、一部に布留式甕を含んでいる。おそらく、庄内式期～布留式期の遺構の一部である可能性が高い。

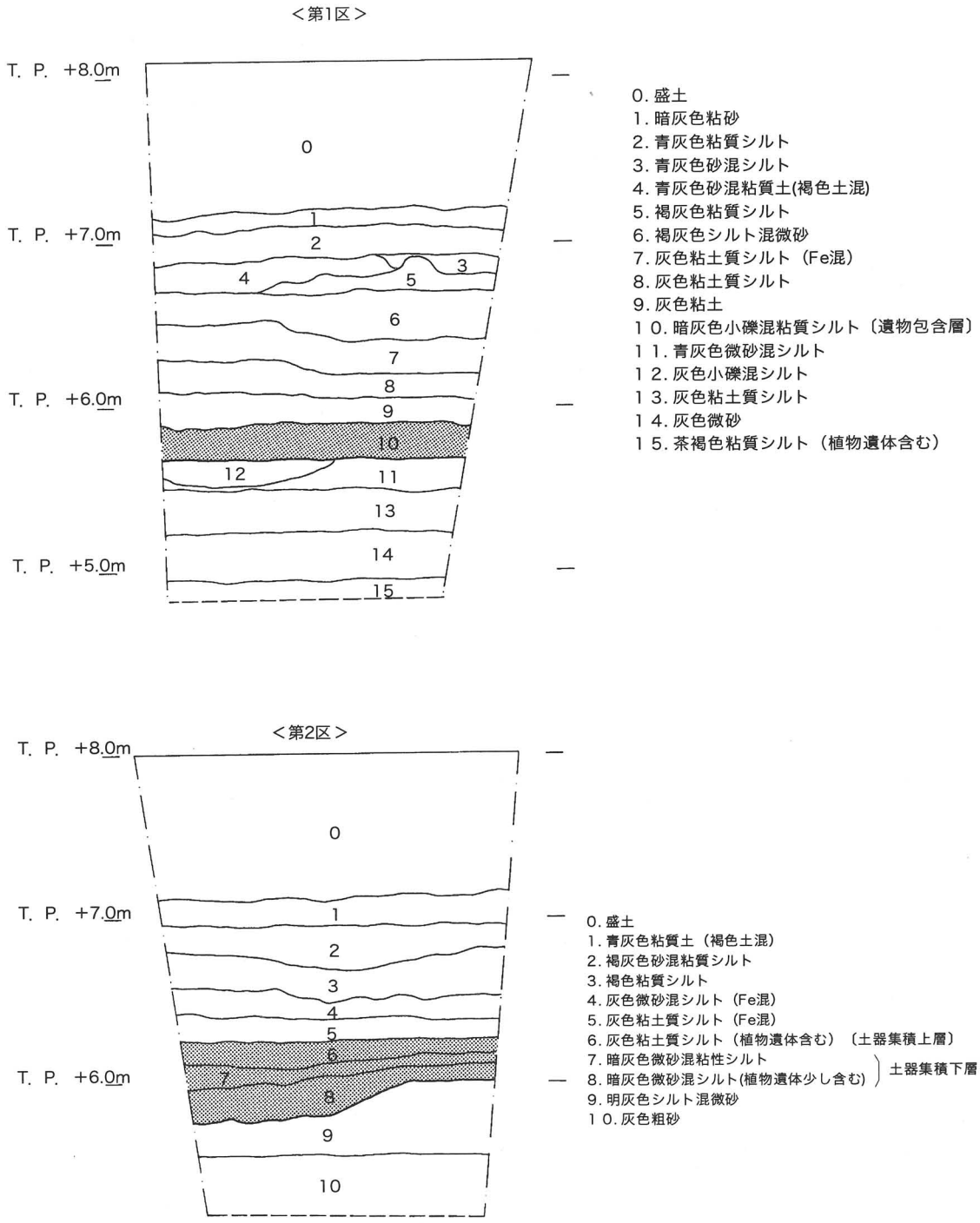
また、甕以外にも高坏・壺に一部ススが見られるものもあり、集落域で使用された土器が溝に廃棄されたものであろう。

6．小結

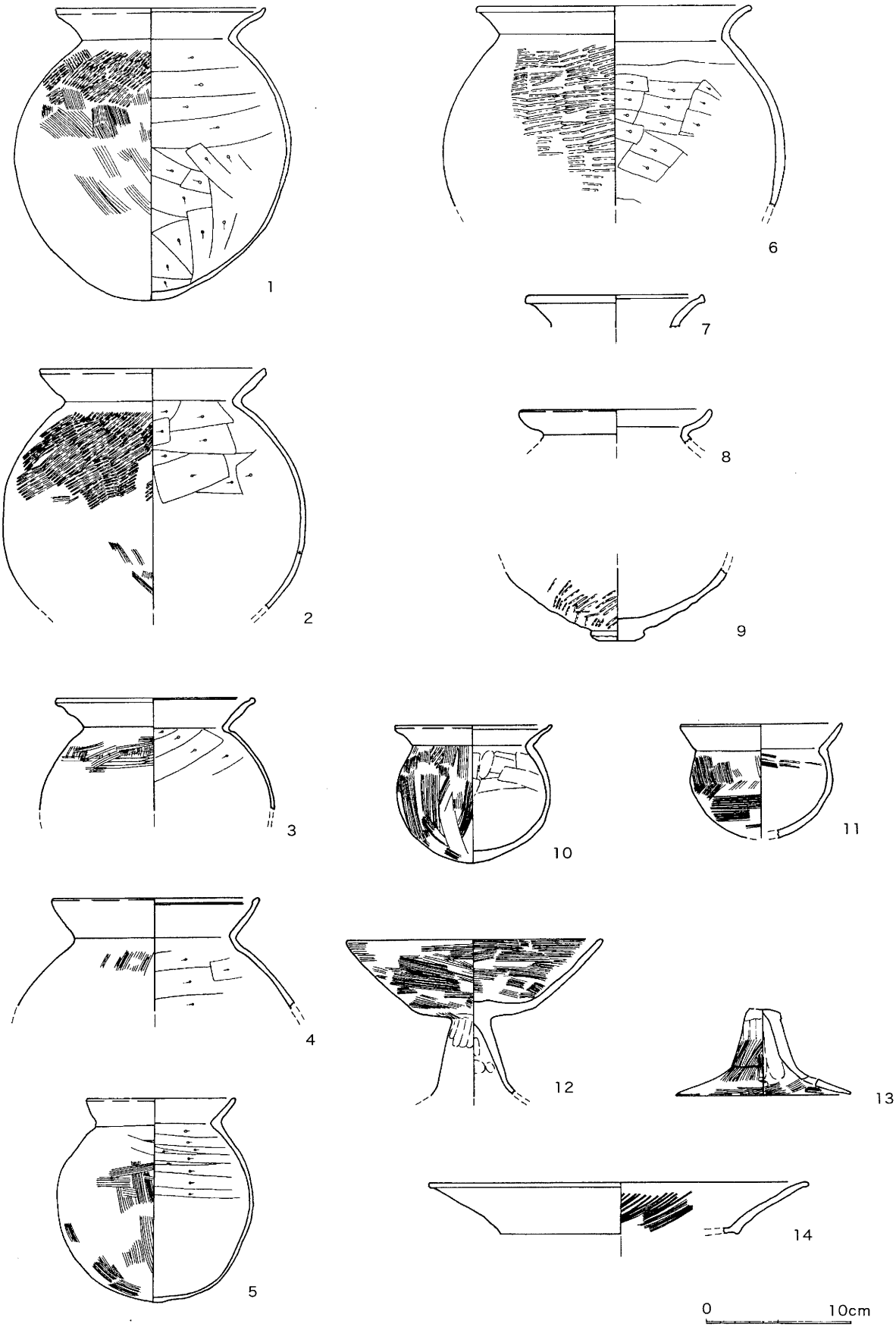
今回の遺構確認調査は、調査対象範囲に比して調査地が狭小で、遺構の性格等は十分に把握できなかったが、発掘調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内式期～布留式期）の良好な遺構を検出しており、該期の遺跡の広がりが明らかになっている。

近年、周辺で実施されている多数の発掘調査の成果を含めて、今後、久宝寺遺跡の発掘調査において、さらに集落域の性格が明らかになることを期待したい。

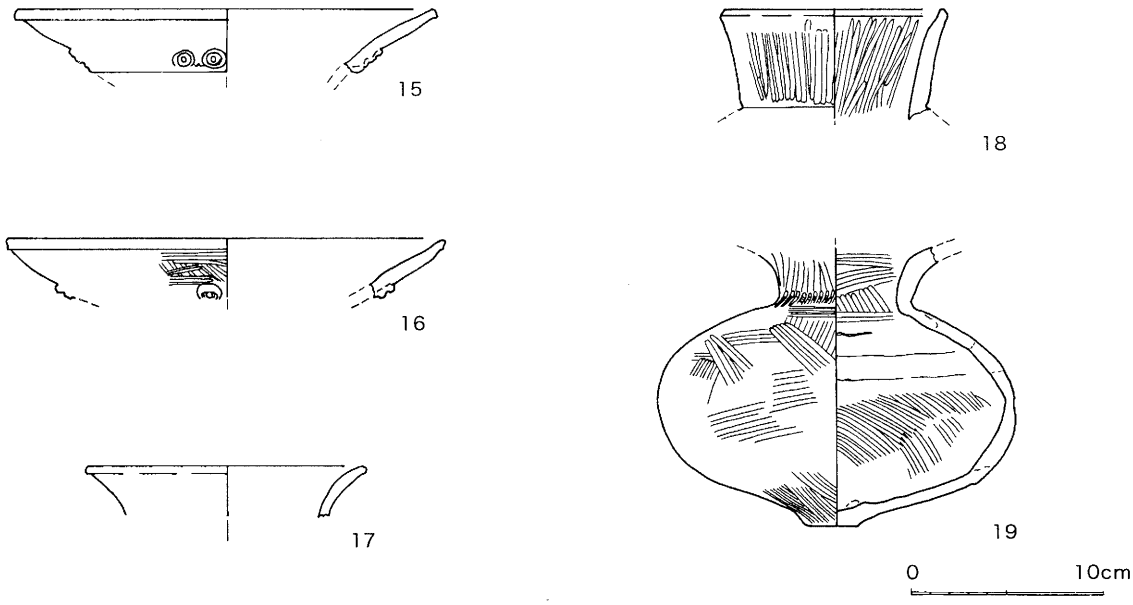
（藤井）



第24図　土層断面図（S=1／40）



第25図　出土遺物実測図（S＝1／4）



第26図　出土遺物実測図（S＝1／4）

久宝寺遺跡(1999-639) 出土遺物観察表

No.	出土地点	器種	法量(cm)	調整・形態等の特徴	色調(上:外面、下:内面)	焼成	胎土	備考
1	第2区 土器集積上層	庄内式甕	(口径)14.4 (器高)20.0 (体部最大径)19.0	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾅﾒﾊｹ・ﾀﾀｷ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	2.5YR6/2 灰黄 2.5YR6/2 灰黄	軟	やや粗	外面一部摩滅
2	第2区 土器集積	庄内式甕 口縁～体部	(口径)15.4 (残存高)16.6	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・右上がりﾀﾀｷ後ﾊｹ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺ方向ｹｽﾞﾘ	10YR3/2 黒褐 10YR5/2 灰黄褐	軟	やや粗	外面ｽｽ付着
3	第2区 土器集積	庄内式甕 口縁～体部	(口径)13.5 (残存高)7.7	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺﾊｹ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾅﾒ方向ｹｽﾞﾘ	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/7 にぶい橙	非常に軟	粗	全体摩滅
4	第2区 土器集積	庄内式甕 口縁～体部	(口径)14.2 (残存高)7.8	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾃﾊｹ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺ方向ｹｽﾞﾘ	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい黄橙	軟	やや粗	外面ｽｽ付着 全体摩滅
5	第2区 土器集積	布留式甕	(口径)10.8 (器高)14.3	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾃ・ﾖｺﾊｹ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺ方向ｹｽﾞﾘ	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR8/1 灰白	非常に軟	やや粗	内面一部摩滅
6	第2区 土器集積	V様式系甕 口縁～体部	(口径)19.0 (残存長) 13.7	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺ方向ｹｽﾞﾘ	7.5YR6/2 灰褐 7.5YR8/3 浅黄橙	軟	やや密	
7	第2区 土器集積	庄内式甕 口縁部	(口径)13.0 (残存高)2.9	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR6/2 灰黄褐 10YR7/1 灰白	やや軟	やや密	
8	第2区 土器集積	甕 口縁部	(口径)12.2 (残存高)2.3	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR3/1 黒褐 10YR6/2 灰黄褐	やや軟	粗	ｽｽ付着
9	第2区 土器集積	V様式系甕 底部	(底径)3.8 (残存高)5.0	(外面)ﾀﾀｷ・不定方向ﾅﾃﾞ (内面)不定方向ﾅﾃﾞ	5YR6/4 にぶい橙 2.5YR6/4 にぶい橙	やや軟	粗	内面全体摩滅
10	第2区 土器集積	小型甕	(口径)10.8 (器高)9.5 (体部最大径)10.5	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾃﾊｹ・ﾀﾀｷ後ﾊｹ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・板状工具によるﾅﾃﾞ	2.5YR3/2 暗赤褐 10YR6/1 褐灰	軟	やや密	
11	第2区 土器集積	小型丸底壺	(口径)12.0 (器高)6.8	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・不定方向ﾊｹ目 (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺﾊｹ	10YR7/4 にぶい黄橙 7.5YR6/4 にぶい橙	軟	粗	内面一部摩滅
12	第2区 土器集積	高坏	(口径)17.6 (残存長)10.7	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺﾊｹ・ｹｽﾞﾘ (内面)ﾖｺﾊｹ・ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾕﾋﾞｵｻｴ	5YR6/4 にぶい橙 5YR6/4 にぶい橙	軟	密	
13	第2区 土器集積	高坏 脚部	(底径)12.2 (残存高)6.0	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺﾊｹ・ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾅﾃﾞ (内面)ﾕﾋﾞﾅﾃﾞ・ﾖｺﾊｹ・ﾖｺﾅﾃﾞ	2.5YR7/2 灰黄 2.5YR7/2 灰黄	やや軟	密	外面粘土接合痕
14	第2区 土器集積上層	高坏 坏部	(口径)26.2 (残存長)3.55	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ後放射状のﾐｶﾞｷ	7.5YR6/6 橙 10YR7/3 にぶい黄褐	非常に軟	密	内面ｽｽ付着
15	第2区 土器集積上層	装飾壺 口縁	(口径)21.8 (残存高)3.3	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ後板状工具によるﾅﾃﾞ	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR6/2 灰黄褐	やや軟	密	
16	第2区 土器集積上層	装飾壺 口縁	(口径)23.0 (残存高)3.1	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾃ、ﾅﾅﾒ方向ﾐｶﾞｷ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR5/2 灰黄褐 10YR6/2 灰黄褐	やや軟	密	
17	第2区 土器集積	広口壺 口縁部	(口径)14.4 (残存高)2.7	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ	10YR5/2 灰黄褐 10YR6/2 灰黄褐	やや軟	やや粗	外面ｽｽ付着
18	第2区 土器集積	直口壺 口縁部	(口径)11.6 (残存高)5.7	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾀﾃ方向ﾐｶﾞｷ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾃﾅﾃﾞ後ﾀﾃ方向ﾐｶﾞｷ	2.5YR7/2 灰黄 2.5YR7/2 灰黄	やや軟	やや密	
19	第2区 土器集積最下層	短頸壺	(残存長)14.5 (体部最大径)18.8	(外面)不定方向ﾐｶﾞｷ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾅﾒ方向ﾊｹ・ﾕﾋﾞｵｻｴ後ﾅﾃﾞ	10YR8/3 浅黄橙 5YR7/4 にぶい橙	非常に軟	粗	一部摩滅

6．郡川遺跡（1999－627）の調査

1．調 査 地：黒谷６丁目171－２

2．調査期間：平成12年３月24日

3．調査方法

専用住宅建設に係る事業計画地に1．2ｍ×1．2ｍの調査区を１ヶ所設定し、人力によって層理にしたがって掘削を行い遺構、遺物の検出に努めた。その結果３面の遺構面を検出し、さらに地表下0．8ｍで弥生時代後期の土器が良好な状態で出土したため、調査区を東西幅1．5ｍ、東西幅２ｍに拡張し、遺構の確認をするとともに、遺物の取り上げを行った。調査地は生駒西麓に位置し、標高はT．P．＋71ｍ前後である。

4．調査概要

弥生時代後期、古墳時代後期、そして時期不明の２つ遺構の合わせて４時期の遺構面を検出した。上部の遺構から概観する。

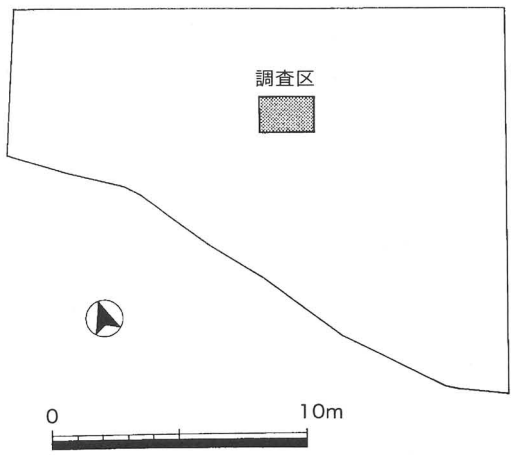
第１面は地表下0．4ｍの暗褐色砂質土上面で土坑１を検出した。土坑１の平面形態は隅を絞り込んだ隅丸方形を呈するとみられ、東西長0．92ｍ、南北長0．9ｍ、深さ0．18～0．24ｍを測る。埋土は炭化物混じりのオリーブ灰色砂質土である。遺物は出土していない。

第2面は地表下0．5ｍ前後にある灰黒色礫混じり粘砂上面で、南北方向の溝を検出した。溝は土坑１に西肩を切られていたが，検出長1．12ｍ、幅約0．4ｍ、深さ0．13ｍで，暗褐灰砂質土を埋土とする。遺物は出土しておらず、時期は不明である。遺構面ベース層は古墳時代後期の包含層であることから、これを下限としておく。

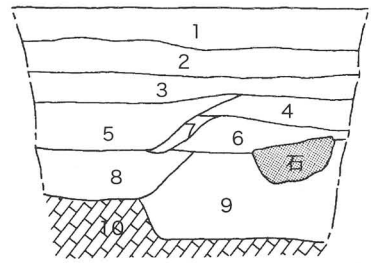
第３面は上記の包含層を除去した地表下0．74ｍに遺存する暗灰茶色粘質土上面で土坑２を検出した。土坑２は調査区外にひろがるため全容は不明であるが、東西長約0．88ｍ、南北長0．38ｍ、深さ0．24ｍを測り、埋土は淡茶灰色粘質土である。埋土から土師器砕片が出土しているが、時期を明確にできる遺物は見つかっていない。このため古墳時代後期以降としておきたい。

遺構面のベース層は弥生時代後期の遺物を包蔵していたため、これを掘削すると地表下0．9ｍ付近で土器集積を確認した。このため調査区を２ｍ×1．5ｍに拡張し、遺構の把握に努めた。この弥生時代後期

第27図　調査地周辺図（1/5000）

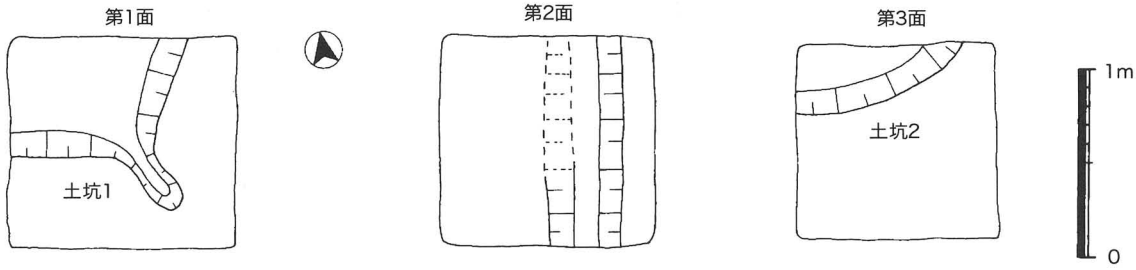


第28図　調査区設定図（1／300）

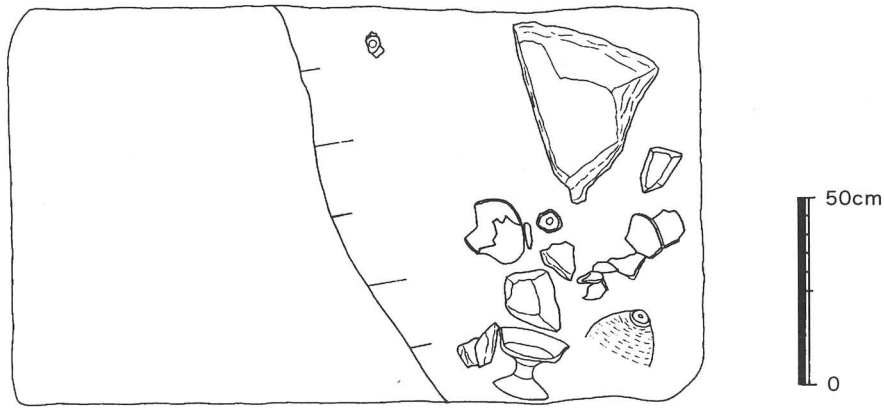


1. 表土
2. 盛土
3. 灰オリーブ粘砂
4. 暗褐色砂質土
5. オリーブ灰色砂質土炭化物混（土坑1）
6. 灰黒色礫混粘砂
7. 暗褐灰色砂質土(溝)
8. 淡灰茶色粘質土（土坑2）
9. 暗灰茶色粘質土（土坑3）
10. 暗黄褐色砂質土礫混

第29図　北壁土層断面図（1/40）



第30図　遺構平面図（1／40）



第31図　溝遺物出土状況図（1／20）

の生活面を第４面とした。

地表下1.0mで暗黄褐色砂質土礫混じり層をベースとする東側への落ち込みが認められた。落ち込みは調査区外に大きくひろがるため全容については不明であり西肩の一部を検出するに留まった。検出長は東西幅1.1～0.6m、南北幅は約1.05m、深さ約0.5mである。東西幅は北側が大きくなっている。また、土層断面の確認から本来の切り込み面は検出面より上位であることが確かめられた。この遺構は第３面以上からの構築であったが、土坑２に切られていたのである。

埋土は暗灰茶色粘質土で人頭大より一回り大きな礫から10cm程度の礫までが全体に不均等に混じっている。土器は完形あるいは完形に近いものから、砕片までが出土しているが、礫の下に完形に近い土器が埋まっている状態もみられた。

この落ち込みは東西方向の山の斜面に対して平行、すなわち南北方向に肩が検出されている。また、埋土に巨礫が混じっており、遺物は砕片から完形にまでが出土している。このような状況から遺構は溝であると考えられる。土坑であるならば埋土中に巨礫が混じっていることは不自然であろう。また、巨礫の下に完形の土器があったことは遺構が埋まるまでに時間があったことがうかがえる。東側にひろがる溝は恐らくさらに深く掘りこまれていることが推定される。溝の性格は明確ではない。ただ、溝内から出土した土器には穿孔したものも僅かだが存在しており、普段は土器の廃棄も行われていたようである。後期段階の集落では溝への土器の廃棄が検出されているが、これも同様の行為とみられ、あるいは集落を区画する溝の可能性をもつ。そして、最終的に溝は山側からの巨礫を含む土砂の流入によって埋没したものと考えられるのである。

5．出土遺物

前述しているように、第１～３面まではほとんど遺物が出土していない。このため図化したものはすべて第４面の溝から出土ものである。

壺は短頸壺（１）も存在するが、体部が無花果形をしている広口壺（２～５）の比率が高い。(1)は全体的に器壁が厚く、下半に最大径をもつ下膨れの壺である。外面縦位のヘラミガキで、焼成後に穿孔が施されている。広口壺では大型の（２）は外面ハケ調整が主体となっているが、小型の（３～５）はヘラミガキが施される。

甕は大型品でも器高22cm前後、小型品は15cm前後で全体に小型化している。口縁端部は受け口状を呈するもの（８～10）と斜め上方にのびて丸くおさまるもの（11～14）がある。

鉢は器高18cmの大型品(20)と５～６の椀形を呈する小型品(21・22) がある。(20)は前期の鉢のような形態をしている。外面は横位のヘラミガキ、内面はヘラ状工具によるナデである。

高坏は外反する口縁を有するものが主体となる(23～26)。口縁と受け部の比率は約２：３～１：２の間で、口縁部が長くなってきている。脚裾部も広く屈曲する(23・25)が多い。

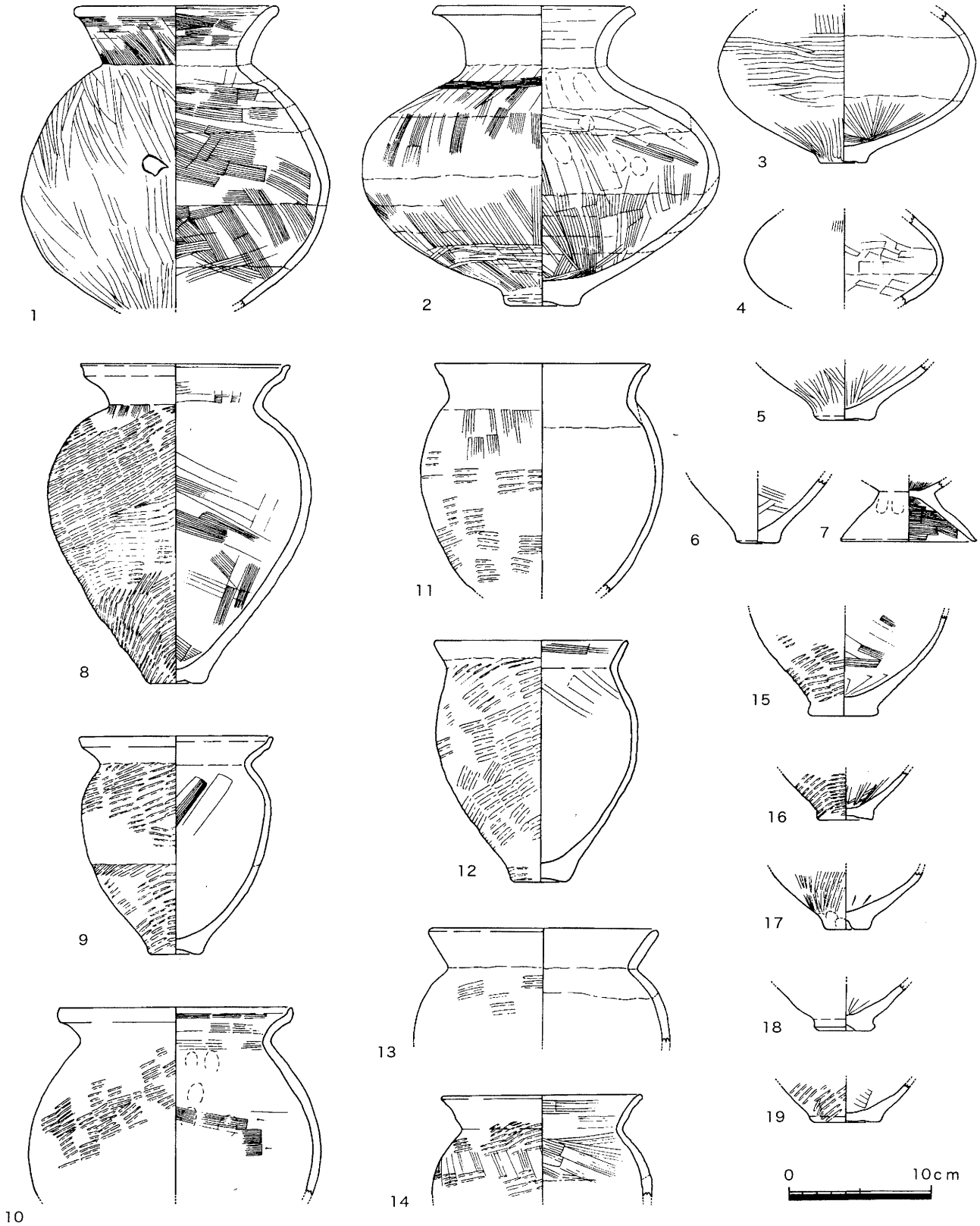
これらの遺物はその特徴から弥生時代後期後半に位置づけることができる。色調は橙から赤褐色を呈し、在地産と考えられる。

6．まとめ

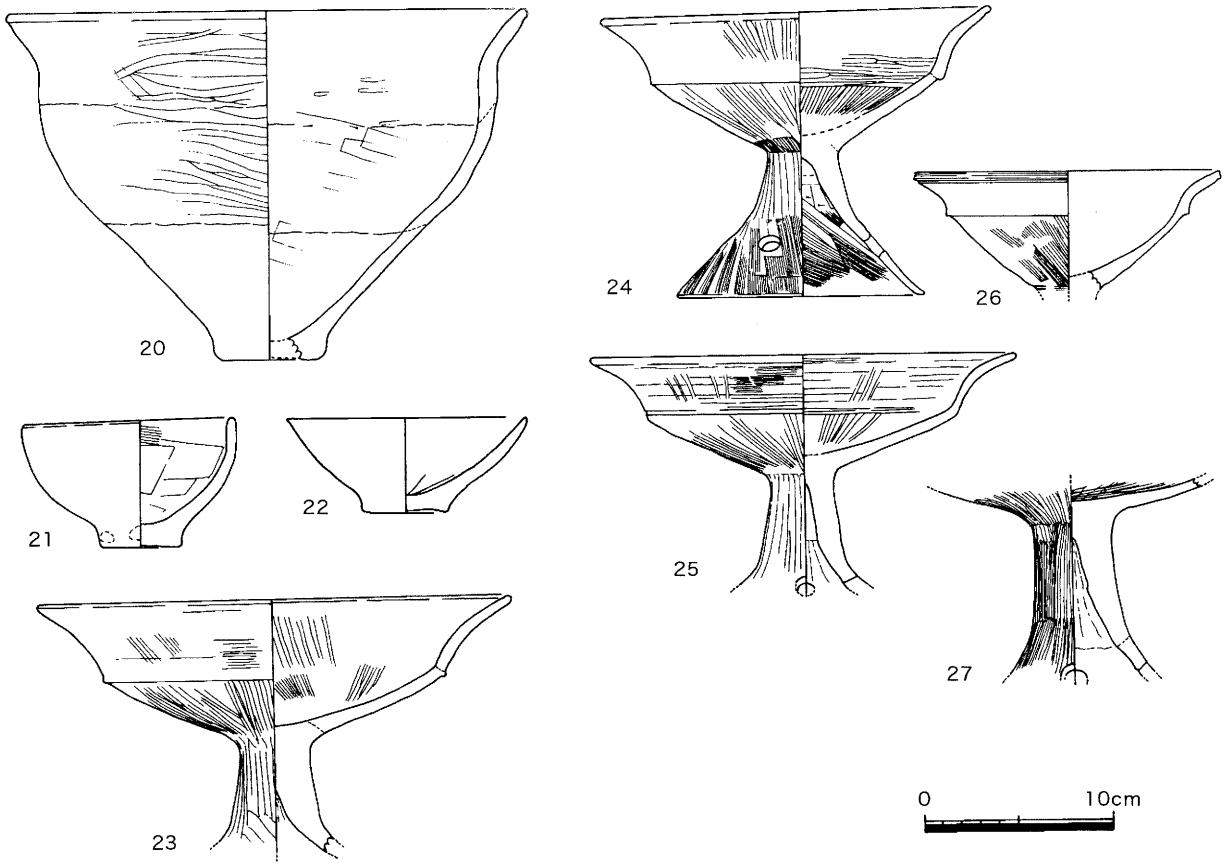
本調査は生駒西麓に位置しているが、既に造成が終了し平坦地となっている。こうした場所で弥生時代後期の遺構が良好な状態で遺存しているとは予想していなかった。個人住宅建築に伴う調査であったため、十分な調査ができなかったが、気付いたことを記しておこう。

弥生時代の溝は南北方向にのびているが、調査地から北へ約30mの地点で谷になっていることから山手へ屈曲していることが想定される。西側の現状は大きく切土されて下がっているため環境復元は困難である。しかし、溝が居住域を区画するものと考えればおそらく居住域は東側、すなわち山手にあったものと推定される。周辺はすでに宅地となっており、すぐには調査できないが、今後あらゆる機会に確認していきたいと思う。

（渚　斎）



第33図　出土遺物実測図（1／4）



第32図　出土遺物実測図（1／4）

遺物番号	器種	法量cm（残存）			調整及び形態上の特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
		口径	器高	底径						
1	弥生土器 広口壷	13.5	(20.7)	—	外面―口縁部端部～上半横位ハケ、下半ナナメハケ、頸部以下ヘラミガキ 内面―口縁部ヨコナデ後ヘラ状工具によるナデ、以下ハケ	5YR5/6明赤褐色	粗	やや硬	口縁部～肩部	穿孔あり
2	弥生土器 広口壷	13.3	26.6	4.4	外面―口縁部ヨコナデ、頸部縦位ハケ後3条の沈線文、肩部～体部ハケ、底部横位のヘラ状工具によるナデ 内面―口縁部ヨコナデ、頸部指頭圧痕肩部指頭圧成形後ヨコナデ、以下指頭圧成形後ハケ	7.5YR5/6明褐色	非常に粗	やや硬	ほぼ完形	
3	弥生土器 広口壷	—	(10.4)	3.1	外面―肩部タテ方向ヘラミガキ、体部ヨコ方向ヘラミガキ底部ヨコ方向ヘラミガキ 内面―肩部～体部ナデ、底部ハケ	7.5YR6/6橙色	やや密	硬	肩部～底部のみ	
4	弥生土器 広口壷	—	(6.2)	—	外面―体部ハケ 内面―体部ヘラナデ	7.5YR6/4にぶい橙色	やや粗	やや硬	体部のみ	
5	弥生土器 広口壷	—	(3.9)	3.5	外面―縦位ヘラミガキ 内面―ヘラ状工具によるナデ	外面―7.5YR6/4にぶい橙色 内面―7.5YR5/1褐灰色	やや密	やや硬	底部4/5	
6	弥生土器 広口壷	—	4.3	2.4	外面―剥離のため調整不明瞭 内面―ヘラ状工具によるナデ	10YR5/4にぶい黄褐色	やや粗	硬	底部1/2	
7	弥生土器 壷底部	—	(4.1)	9	外面―指頭圧成形後ナデ 内面―ハケ	5YR5/6明赤褐色	やや粗	やや軟	脚部4/5	
8	弥生土器 甕	14.4	22.1	3.6	外面―口縁部ヨコナデ、頸部タタキ後ハケ、体部～底部タタキ 内面―口縁部横位ハケ、以下ハケ	5YR6/8橙色	非常に粗	やや軟	ほぼ完形	
9	弥生土器 甕	13.4	15.1	3.4	外面―口縁部ヨコナデ、以下タタキ 内面―口縁部ナデ、一部ハケ	7.5YR7/6橙色 7.5YR4/2灰褐色	粗	やや軟	約1/2	
10	弥生土器 甕	16.2	(13.0)	—	外面―口縁部ナデ、以下タタキ 内面―口縁部ヨコハケ、以下ハケ、一部指頭圧痕有り	7.5YR6/6橙色	粗	やや硬	口縁部～体部1/4	

遺物番号	器種	法量cm（残存）			調整及び形態上の特徴	色調	胎土	焼成	残存率	備考
		口径	器高	底径						
11	弥生土器甕	14.8	(15.8)	—	外面—口縁部ヨコナデ、頸部～肩部縦位ハケ、以下タタキ 内面—剥離により調整不明瞭	5ＹＲ6/8橙色	粗	軟	口縁1/23 肩部～体部1/4	
12	弥生土器甕	13.4	16.7	3.6	外面—口縁部ヨコナデ、以下タタキ 内面—口縁部ハケ、頸部～肩部ヘラ状工具によるナデ	5ＹＲ7/8橙色	非常に粗	やや軟	ほぼ完型	
13	弥生土器甕	15.6	7.8	—	外面—口縁部ヨコナデ、以下タタキ 内面—口縁部ナデ、以下調整不明瞭	7.5ＹＲ5/4にぶい褐色	非常に粗	やや軟	口縁部1/10 肩部1/3	
14	弥生土器甕	13.6	(7.1)	—	外面—口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ハケ 内面—口縁部横位ハケ、以下ハケ、一部ヘラ状工具によるナデ	5ＹＲ5/8明赤褐色	やや粗	やや硬	口縁部5/8 肩部1/2	
15	弥生土器甕	—	(7.0)	4.4	外面—タタキ 内面—上半ハケ、下半ヘラ状工具によるナデ	7.5ＹＲ5/4にぶい褐色	非常に粗	やや軟	底部のみ	
16	弥生土器甕	—	(3.3)	3.6	外面—タタキ 内面—ヘラ状工具によるナデ	(外面) 2.5ＹＲ5/6 明赤褐色 (内面) 7.5ＹＲ4/2灰褐色	粗	やや硬	底部のみ	
17	弥生土器甕	—	(4.0)	2.7	外面—上半タタキ、下半指頭圧痕 内面—ヘラ状工具によるナデ	7.5ＹＲ6/4にぶい橙色	粗	やや硬	底部のみ	
18	弥生土器甕	—	(3.0)	3.6	外面—剥離のため調整不明瞭 内面—ヘラ状工具によるナデ	(外面) 7.5ＹＲ5/4 にぶい褐色 (内面) 10ＹＲ4/2灰黄褐色	粗	やや硬	底部のみ	
19	弥生土器甕	—	(2.7)	4.4	外面—タタキ 内面—ハケ	(外面) 7.5ＹＲ5/6 明褐色 (内面) 10ＹＲ4/2灰黄褐色	粗	やや軟	底部1/3	
20	弥生土器鉢	27.0	18.2	5.0	外面—口縁部～体部ヘラミガキ、底部調整不明瞭 内面—ヘラ状工具によるナデ	7.5ＹＲ5/4にぶい褐色	粗 (石英粒多)	やや硬	口縁部～底部1/8	
21	弥生土器鉢	10.9	6.8	4.0	外面—口縁部～体部調整不明瞭。底部指頭圧痕を認める 面—口縁部ナデ、以下ヘラナデ、底部に指頭圧痕を認める	7.5ＹＲ6/6橙色	非常に粗	やや軟	口縁部1/4 体底部9/10	
22	弥生土器鉢	12.6	(5.1)	4.1	外面—剥離のため調整不明瞭 内面—ヘラ状工具によるナデ	7.5ＹＲ4/2灰褐色	粗	やや硬	底部のみ	
23	弥生土器高坏	24.6	(13.3)	—	外面—坏部横位ハケ一部縦位ヘラミガキ、坏部下方縦位ヘラミガキ、脚部縦位ヘラミガキ 内面—坏部縦位ヘラミガキ、脚部シボリ目	5YR5/6明赤褐色	粗	やや硬	坏部1/2 脚部1/2	
24	弥生土器高坏	20.4	15.0	12.8	外面—坏部縦位ヘラミガキ、脚部ヘラミガキ、裾部縦位ハケ 内面—坏部横位ヘラミガキ以下ヘラミガキ、脚部上半ヘラケズリ、下半～裾部ハケ	5ＹＲ6/6橙色	粗	やや軟	坏部4/5 脚部9/10	3孔を穿つ
25	弥生土器高坏	22.2	(12.3)	—	外面—坏部横位ハケ一部縦位ヘラミガキ、脚部縦位ヘラミガキ 内面—坏部横位ハケ後タテ方向ヘラミガキ、脚部シボリ目	5ＹＲ5/6明赤褐色	やや粗	硬	坏部1/4 脚部	4孔を穿つ
26	弥生土器高坏	16.0	(6.2)	—	外面—坏部上方ヨコナデ、以下ナナメハケ 内面—ヨコナデ	5ＹＲ6/6橙色	粗	やや軟	坏部1/4	
27	弥生土器高坏	—	(9.7)	—	外面—坏部下半縦位ヘラミガキ、脚部・縦位ヘラミガキ 内面—坏部下半ヘラミガキ、脚部シボリ目	7.5ＹＲ8/6浅黄橙色	やや粗	やや硬	坏部受け部～脚部	4孔を穿つ

7．心合寺跡の調査　―大竹5丁目143番・146番の遺跡範囲確認調査―

1．調 査 地：大竹5丁目143・146番

2．調査期間：平成12年1月11日～1月31日

3．調査方法：

今回の調査地は、『八尾市埋蔵文化財分布図（平成８年度版）』によると白鳳～鎌倉時代の寺院跡である「心合寺跡」（吉田2000）の範囲の北側に隣接し、古墳時代中期の中河内最大の前方後円墳である「国史跡心合寺山古墳」（八尾市教育委員会編2000）の北西部に位置するため池の「新池」西側の空閑地である。今回の調査範囲となる「心合寺跡」・「心合寺山古墳」関連の遺構及び遺物包含状況を確認するため、平坦面では2.5m四方の調査区を5ヶ所（第１区～第5区と呼称）、その東側の新池堤裾部にある壇状の高まりについては、幅1mのトレンチ3本（北から第１トレンチ～第３トレンチと呼称）を設定し、遺跡範囲確認調査を行った。これらの調査面積は、約47㎡を測る。

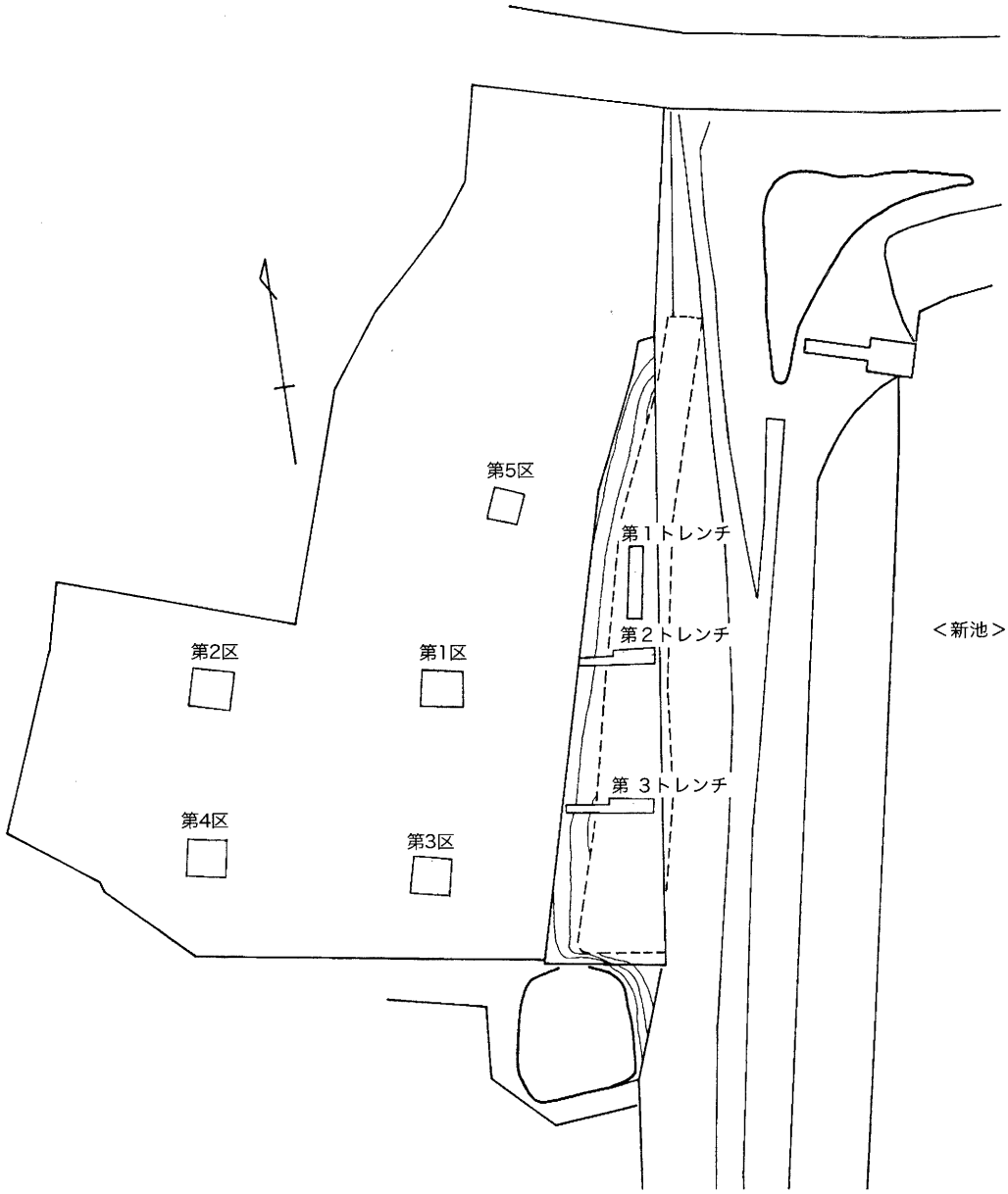
4．調査概要

今回の調査地には、『八尾市史　前近代編』（八尾市1988）の巻頭写真で使用されている「大竹　心合寺山古墳」によると北側の道路寄りに小さなため池が存在している。撮影された時期は不明であるが、近年まで残っていたようである。現在では、このため池は埋められている。そして、調査地の南側は、畑地・水田として使用されていたようである。

第1区：調査地内北東部中央の調査区である。現地表T.P.+25.8mを測る。地表下0.6mまで盛土層が続く。地表下0.6m～0.8mまでは盛土以前の旧水田面が続き、以下地表下1.4mから地表下1.95mまで粗砂～微砂層が続き、時期を指し示すような遺構・遺物ともに確認できなかった。おそらく、土砂堆積層上面を整地層により埋め立てられたものと考えられる。

第２区：調査地内北西部の調査区である。第1区の西側にあたる。現地表T.P.+25.7mを測る。地表下0.4m前後の盛土層以下、地表下0.6m～0.75mに埴輪・瓦器・土師器・瓦・須恵器の破片を含む褐色粘質土層（4層・層厚約0.2m）があり、遺物包含層となると考えられる。その直下、地表下0.75mの灰褐色粘質土（6層）に遺構面を確認している。川西編年Ⅴ期の円筒埴輪や土師器・瓦器・須恵器の破片を含む土壙２基（SK01・SK02）

第34図　調査地周辺図（１／５０００）



第35図　調査位置図（S=1／500）

を検出している。中世以降の遺構面である可能性が高い。

SK01は、調査区北東隅で検出した約1m前後の規模の不定形な土壙で、深さ約0.3mを測る。埋土は7層～12層である。出土遺物は、円筒埴輪の破片を中心としており、これら埴輪や土器の廃棄坑である可能性が高い。この土壙は、北側に広がるものと考えられる。

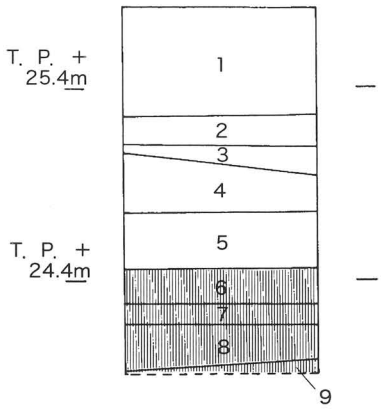
SK02は、調査区北西隅で検出した長辺約0.6mの土壙で、深さ約0.15mを測る。埋土は、暗褐色粘質土(13層)である。出土遺物は、埴輪・土師器・瓦器の破片がある。

以下、地表下2.0mまで遺構・遺物ともに確認できなかった。

第３区:調査地内南東部の調査区である。第1区の南側にあたる。現地表T.P.+25.8mを測る。地表下0.5mの盛土層以下、旧水田面があり、以下の層で遺構・遺物ともに確認できなかった。地表下1.7mから地表下2.0mまで砂層が続く。第1区とほぼ同様の堆積状況を示している。

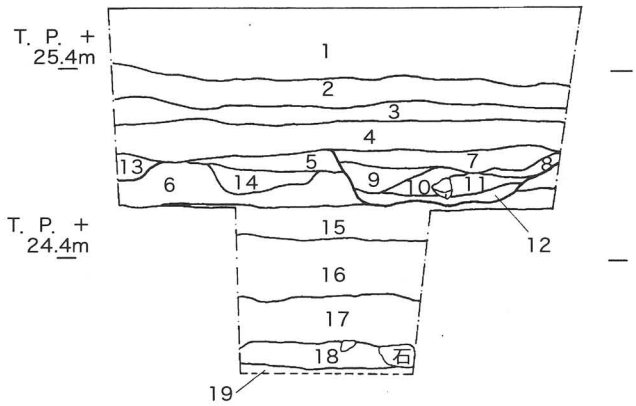
第４区:調査地内南西部の調査区である。遺構面を確認した第２区の南側にあたる。現地表T.P.+25.65mを測る。地表下0.3mまでは盛土層で、旧耕土層があり、以下第2区で確認した遺構面は確認できなかった。ただし、地表下0.65m～0.9mの褐色小礫混粘質土(5層)から摩滅した土師器・瓦・埴輪・須恵器細片が出土

<第1区>南壁

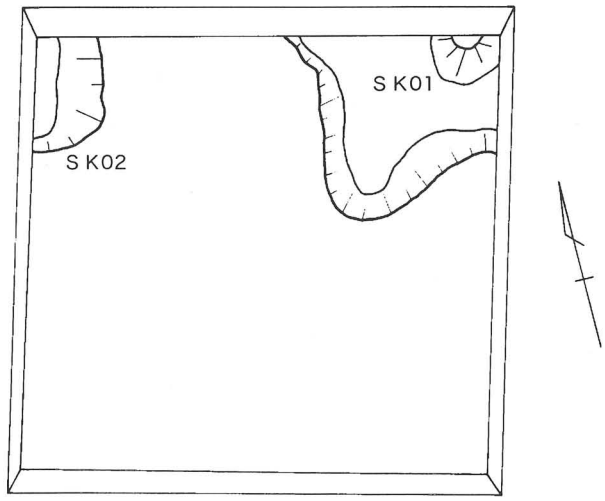


1. 盛土
2. 青灰色粘砂
3. 淡青灰色砂混粘質土
4. 灰色小礫混粘質土（やや硬質）
5. 灰色砂礫混粘質土
6. 赤褐色粗砂
7. 褐色微砂
8. 灰色細砂
9. 灰色細砂（こぶし大の礫混）

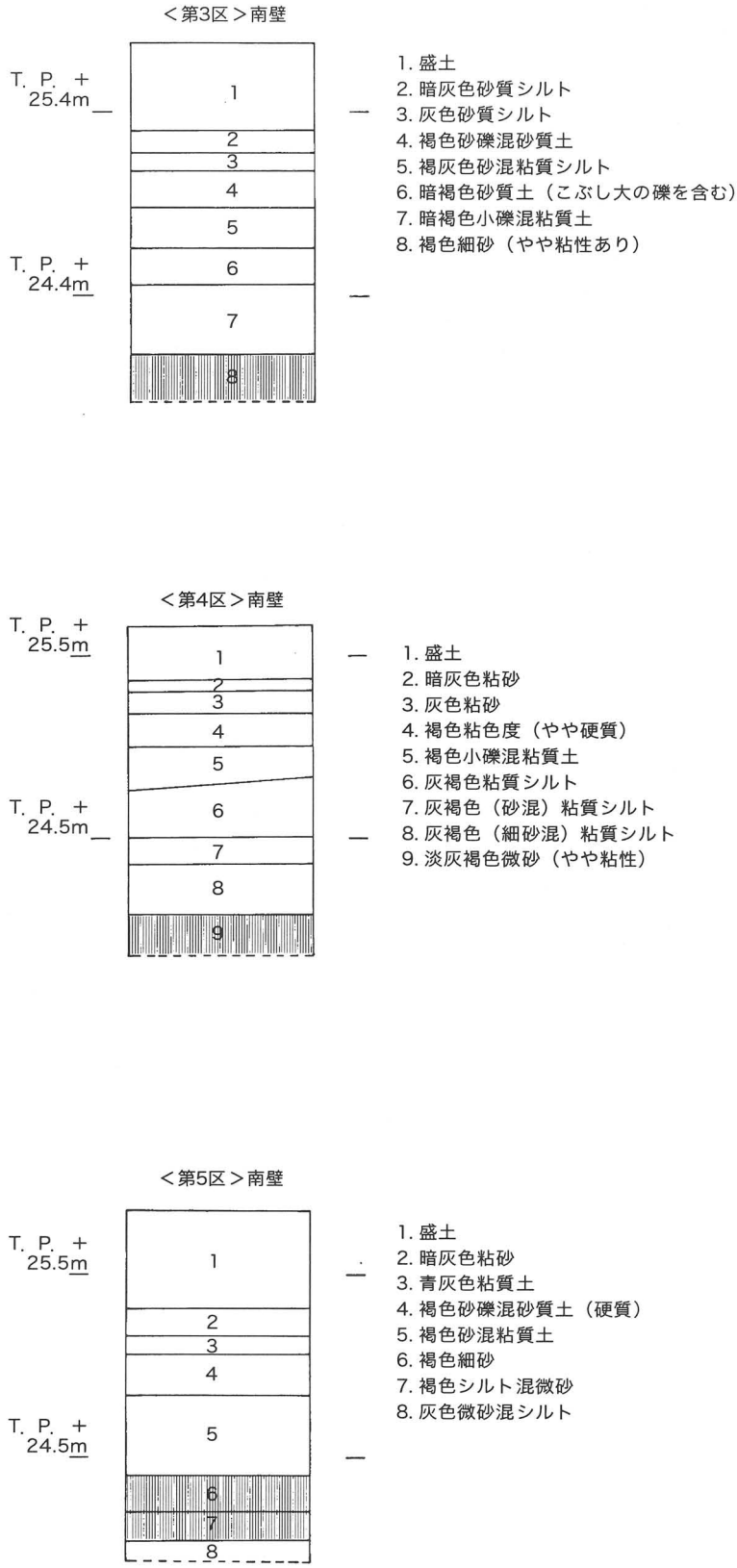
<第2区>北壁



1. 盛土
2. 黒灰色砂質シルト
3. 灰色砂質シルト
4. 褐色白礫混粘質土（やや硬質）
5. 暗茶褐色粘質土
6. 灰褐色粘質土（ベース面）
7. 褐灰色粘質シルト
8. 黒灰色粘質シルト
9. 褐灰色粘質シルト（粘性強）
10. 灰褐色粘質シルト
11. 暗褐色粘質シルト（黒灰色粘質シルト混）
12. 暗茶褐色粘質シルト微細混（黒灰色粘質シルト混）
（7～12：SK01埋土）
13. SK02埋土：暗褐色粘質土
14. 暗褐色粘質土
15. 褐灰色粘質土
16. 褐色砂混粘質シルト
17. 褐色細砂混粘質土
18. 褐色砂混粘質土
19. 褐色粗砂混粘質土



第36図　土層断面図・平面図（第1区・第2区・S＝1／40）



第37図　土層断面模式図（第3～5区・S＝1／40）

している。第2区の遺構面は、南側に広がる可能性があったが、この調査区では、判然としなかった。

以下、地表下1.55m～1.8mまで砂層が続き、遺構・遺物ともに確認できなかった。

第５区:調査地内北端の調査区である。第１区の北側に位置する。現地表T.P.+25.85mを測る。地表下0.5mまで盛土層が続き、旧水田面が確認できる。以下、地表下1.45m～1.8mまで砂層が続き、遺構・遺物ともに確認できなかった。

第１トレンチ:第1区東側に位置する土壇状の高まりの北端部で南北方向に設定した幅１m、長さ５mの調査区である。現地表T.P.＋27.0mを測る。表土直下に東西方向に畝状の近世～近代の耕作面があり、この土壇の平坦面が耕作時に形成されたものであることを示している。以下、この調査区の掘削深度となる地表下1.1mまで摩滅した埴輪・土師器・瓦・瓦器・須恵器等の破片を含む層はあるものの、顕著な遺構・遺物ともに確認できなかった。これらは、すべて後世の盛土であると考えられる。

第２トレンチ:壇上の第１トレンチの南側で東西方向に設定した幅１m、長さ５mの調査区である。表土層以下、地表下0.7m～1.0mまで、平瓦、瓦質土器、土師器・須恵器細片が出土しているものの、摩滅が著しい。顕著な遺構、遺物はともに確認できなかった。平瓦は、「心合寺」に伴う瓦と考えられるが、おそらく、二次的な盛土であると考えられる。おそらく、「新池」堤体築造時となる中世以降の盛土層であると考えられる。

第３トレンチ:壇上の第2トレンチから南に８mの地点で東西方向に設定した幅１m、長さ６mの調査区である。表土層以下、地表下0.2の暗黄灰色粘質土(2層)から地山層直上の暗灰褐色シルト混粘質土(6層)まで埴輪・瓦・土師器・須恵器細片出土しており、第1・2トレンチと同様に「新池」堤築造当時の中世以降の盛土であると考えられる。

５.出土遺物

出土遺物の確認できたのは、第2区・第4区・第1～３トレンチである。第2区以外は、遺構に伴う遺物ではなく、流入土中の出土遺物である。いずれも破片で、図化できたのは第2区と第2・3トレンチの瓦・埴輪・土器の8点のみである。

１～３は、第2区のSK01の出土遺物ですべて川西編年Ｖ期の円筒埴輪の破片である。外面調整は、タテハケである。タガの突出は低い台形状である。摩滅は著しいものの、調査地周辺で使用されていたものと考えられる。ただし、心合寺山古墳で使用されている埴輪(Ⅲ期)とは時期が異なる。

４～６は、第２トレンチの出土遺物で、４は瓦質土器の破片、５・６は、平瓦の破片である。５は凸面に斜格子タタキが見られる。

７・８は、第３トレンチの出土遺物で、７．８ともに平瓦の破片である。７は凸面に格子タタキが残る。

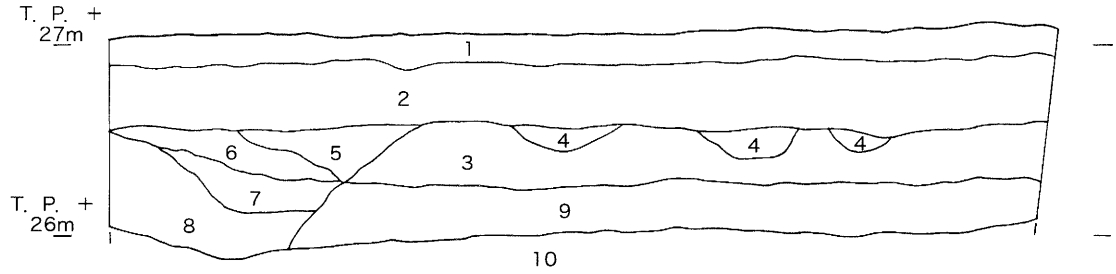
６.まとめ

調査地の平坦面(第1区～第5区)は、先述したように近年まで、畑地や水田として使用されており、これに盛土・整地を行い、現在のような様子になった。遺物が出土したのは、第2区・第4区のみで、すべて東側の調査区である。第１・第３・第５区では遺構・出土遺物は確認できなかった。これは、東側調査地付近が新池外堤から谷状に西へ落ち込んでおり、そこに砂礫層が堆積したようである。その後、砂礫層は平坦に埋め立てられ、畑地や田地として使用された。そして、第2・第4区の西側調査地周辺は、おそらく谷状地形が西側に向かって上がっていき、平坦地になっていたと考えられる。

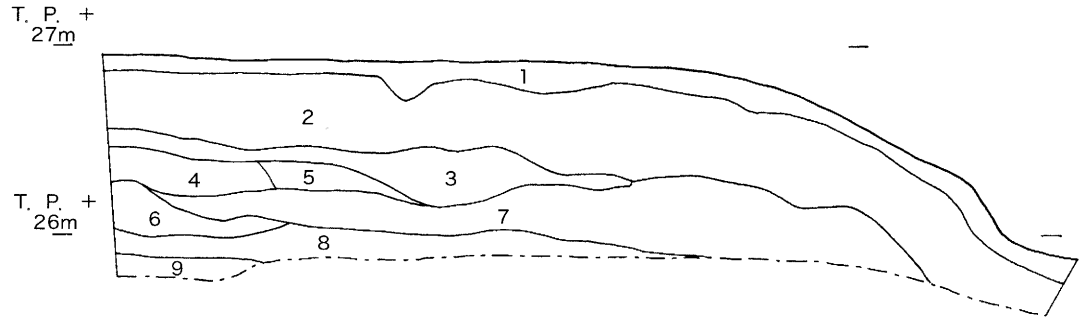
埴輪の出土から古墳時代後期の埋没古墳の存在も考えられるが、今回の調査では明らかにすることはできなかった。しかし、心合寺山古墳造営以降にも周辺では古墳の造営が引き続き行われていたことを示唆するものであり、今後周辺の調査で、該期の古墳の存在にも注意すべきである。

そして、東側の壇状の高まり(第1トレンチ～第3トレンチ)は、地山層らしい層の直上に積まれた古墳時代中期～中世の遺物を含んだ盛土層で、おそらく「新池」の堤の一部である。後世に畑地と使用され現況のように壇状の平坦面が形成されたと考えられる。この盛土の時期は不明であるが、新池の堤体改修に

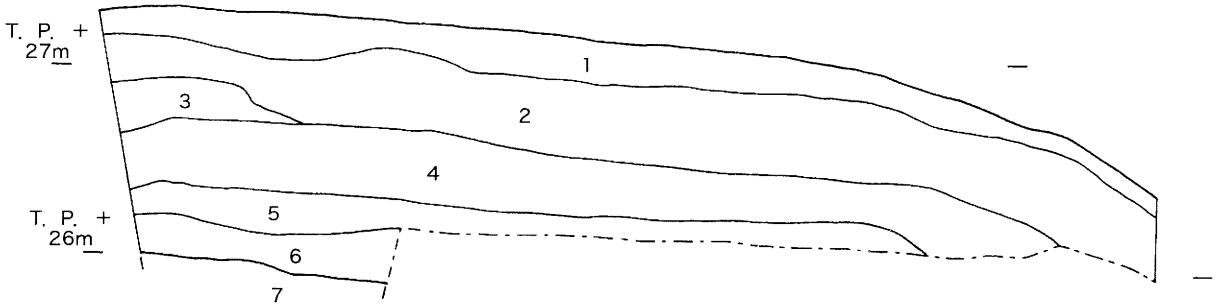
<第1トレンチ>東壁



<第2トレンチ>南壁



<第3トレンチ>南壁

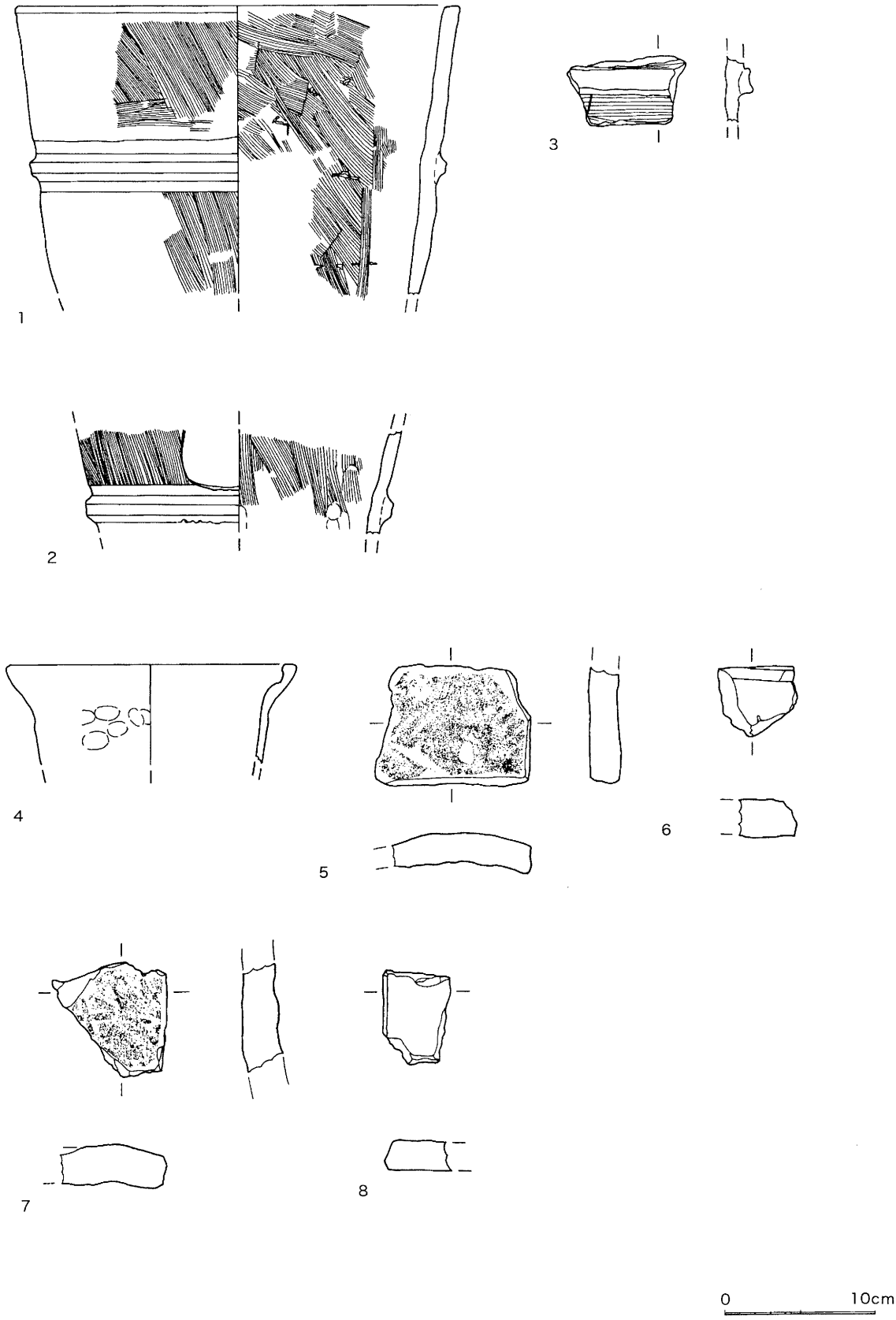


<第1トレンチ>
1. 表土
2. 淡黄褐色粘砂
3. 淡黄褐色粘砂（茶褐色粘質ブロック含む）
4. 灰褐色粘砂
5. 褐色粘質土
6. 褐色砂礫混粘質土
7. 茶褐色粘質土
8. 暗褐色砂礫混砂質土
9. 淡褐色粘質土
10. 茶褐色粘質土

<第2トレンチ>
1. 表土
2. 暗黄灰色粘質土
3. 暗黄色砂混粘質土（シルトブロック混）
4. 灰褐色砂混粘質土（粘性ブロック混）
5. 灰褐色細砂混粘質（粘性ブロック含）
6. 灰褐色砂質土
7. 暗灰褐色粘質土(粘質シルト含)
8. 淡褐色粘質土
9. 淡褐色シルト混砂質土

<第3トレンチ>
1. 表土
2. 暗黄灰色粘質土
3. 黄灰色粘質土（粘質ブロック混）
4. 黄灰色粘質シルト
5. 灰褐色粘質土（粘質シルトブロック混）
6. 暗灰褐色シルト混粘質土（少量炭混）
7. 〔地山層〕暗灰色砂礫混砂質土（硬質）

第38図　土層断面図（第1～3トレンチ・S=1／40）



第39図　出土遺物実測図（S=1／4）

伴う発掘調査の成果(成海1999)から中世以降の「新池」築造当初(中世)に築造された堤の一部の可能性がある。

今回の調査では、瓦の出土がわずかに見られたものの,「心合寺跡」の寺域に直接関連する遺構は確認できず、その範囲はなお不明である。おそらく、「心合寺」は本調査地の南側に広がっていると思われ、今後の調査で、寺域に関連する遺構等の検出を期待したい。 (藤井)

【参考文献】

八尾市史編集委員会編　1988『八尾市史(前近代編)本文編』

成海佳子　1999「VI　心合寺山古墳(第2次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会研究報告62』

八尾市教育委員会編　2000『国史跡心合寺山古墳—これまでの発掘調査の成果—』

吉田野乃　2000「2.史跡心合寺山古墳新池堤体改修工事に伴う調査(平成10年度)」『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書II』

心合寺跡　出土遺物観察表

No.	出土地点	器種	法量(cm)	調整・形態等の特徴	色調	焼成	胎土	備考
1	第2区 SK01	円筒埴輪	(口径) 29.4 (残存高) 19.0	(外面) ﾀﾃﾊｹ (内面) 不定方向ﾊｹ	(外面) 7.5YR7/6 橙 (内面) 7.5YR6/6 橙	やや軟	密	
2	第2区 SK01	円筒埴輪	(残存高) 6.8	(外面) ﾀﾃﾊｹ (内面) ﾕﾋﾞｵｻｴ後ﾀﾃﾊｹ	(外面) 7.5YR7/6 橙 (内面) 7.5YR7/6 橙	やや軟	密	
3	第2区 SK01	円筒埴輪	(残存長) 4.6	(外面) B種ﾖｺﾊｹ (内面) ﾊｹ調整	(外面) 5YR6/6 橙 (内面) 5YR6/6 橙	軟	やや密	
4	第2ﾄﾚﾝﾁ	瓦質土器	(口径) 19.0 (残存高) 6.6	(外面) ﾕﾋﾞｵｻｴ後不定方向ﾅﾃﾞ (内面) ﾅﾅﾒ方向ﾅﾃﾞ	(外面) 2.5Y7/2 灰黄 (内面) 2.5Y7/2 灰黄	やや軟	密	
5	第2ﾄﾚﾝﾁ	平瓦	(残存長) 8.1 (残存幅) 10.5	(凸面) 斜格子ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞによるｽﾘｹｼ (凹面) 布目痕	(凸面) 5Y6/2 灰ｵﾘｰﾌﾞ (凹面) 5Y6/1 灰	やや軟	やや粗	凸面摩滅大
6	第2ﾄﾚﾝﾁ	平瓦	(残存長) 5.2 (残存幅) 4.7	(凸面) ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞ (凹面) 布目痕・長軸方向ｹｽﾞﾘ	(凸面) 7.5Y5/1 灰 (凹面) 5Y5/1 灰	硬	やや粗	
7	第3ﾄﾚﾝﾁ	平瓦	(残存長) 7.7 (残存幅) 7.7	(凸面) 格子ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞ (凹面) 布目痕・長軸方向ｹｽﾞﾘ	(凸面) 5Y5/1 灰 (凹面) 2.5Y5/2 暗灰	硬	やや粗	
8	第3ﾄﾚﾝﾁ	平瓦	(残存長) 6.3 (残存幅) 4.6	(凸面) ﾅﾃﾞ・長軸方向ｹｽﾞﾘ (凹面) ﾅﾃﾞ	(凸面) 2.5Y6/2 灰黄 (凹面) 2.5Y6/2 灰黄	やや軟	やや粗	凹面摩滅

8．渋川廃寺跡（2000－65）の調査

1．調 査 地：渋川町５丁目50－３の一部

2．調査期間：平成12年６月27日

3．調査方法

施工予定地の北と南に２ｍ四方の調査区を設定し、地表下1.6～1.7ｍ前後まで調査を行った。

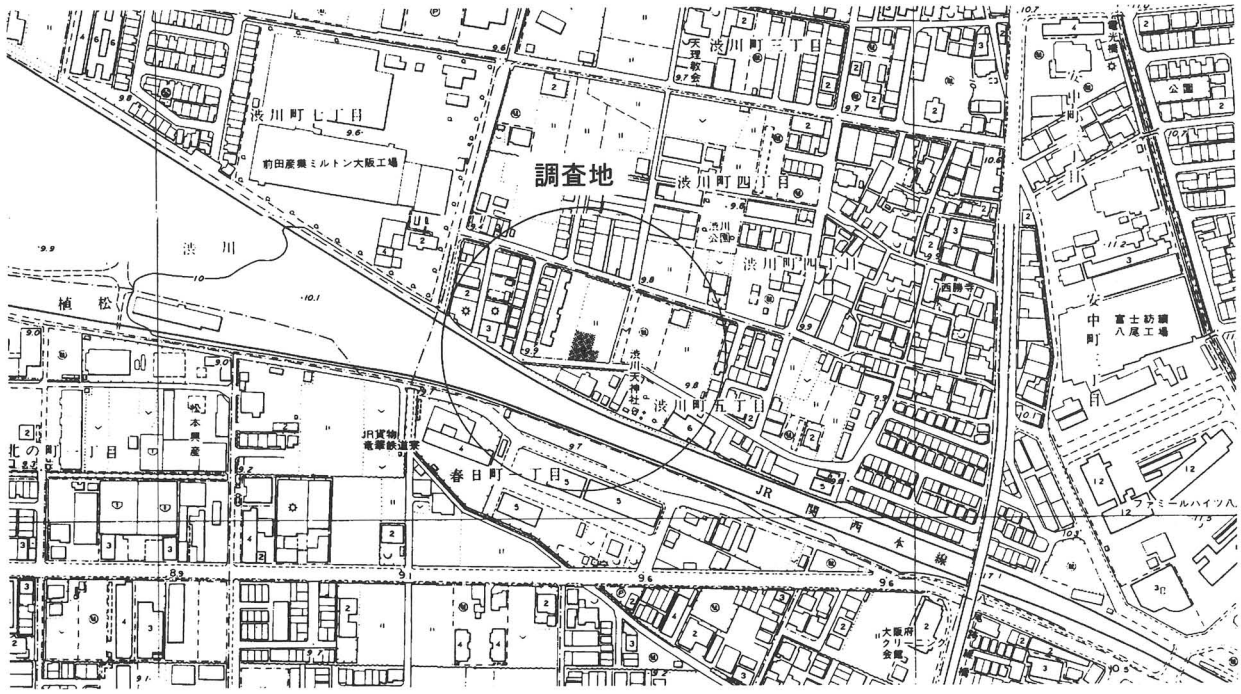
4．調査概要

北側調査区では地表下0.75～1.1ｍで瓦片、須恵器片、土師器片を少量含む褐色斑灰色粘砂層（３－Ａ・３－Ｂ層）を確認した。またその下の地表下1.1～1.36ｍで瓦片を中心に土師器片、須恵器片、瓦器片を密に含む茶灰色粘砂層（４－Ａ・４－Ｂ層）を確認した。遺物は４層直下の褐色斑灰色粘土層（５－Ａ層）直上から多く出土した。さらにこの下は地表下1.7ｍまで確認し、灰色粘土層（５－Ｂ層）、青灰色微砂シルト層（７層）を確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。南側調査区では地表下0.76～0.92ｍで３層を確認、この下の地表下0.92～1.4ｍで土師器片、須恵器片、瓦片を密に含む４－Ａ・４－Ｂ・５－１層を確認した。さらにこの下は地表下1.56ｍまで確認し、褐色斑灰色粘性砂層６層、７層を確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。

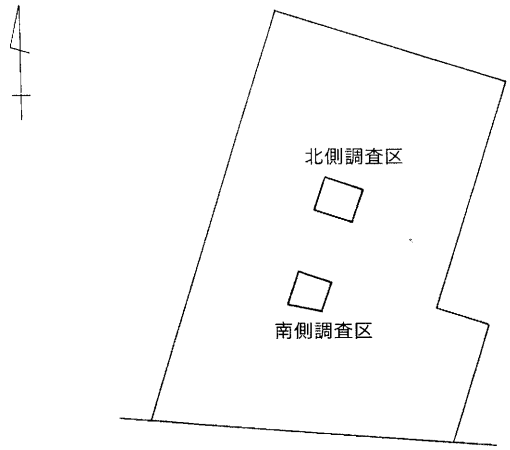
今回確認した包含層には奈良時代から平安時代にかけての土師器片（２．４．10.11他）や、須恵器片（１．７他）、瓦片（５．６）が多く含まれていた。

しかし13世紀代とみられる瓦器片（９他）が含まれていることから、中世に奈良時代から平安時代の包含層を削平して整地した痕跡とみられる。出土遺物の一部は、調査地の位置関係やその内容から渋川廃寺関係の遺物と考えられ、注意される。

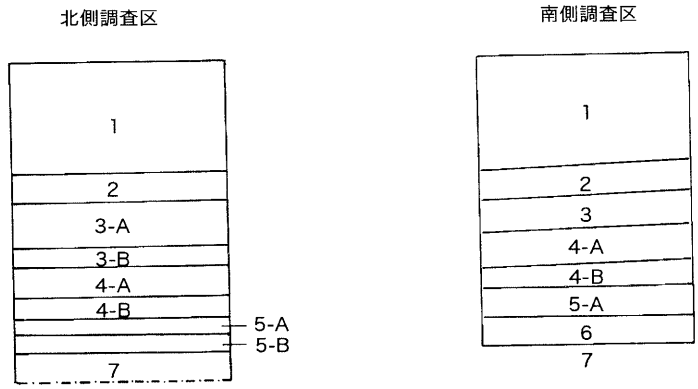
（吉田野乃）



第40図　調査地周辺図（１／５０００）

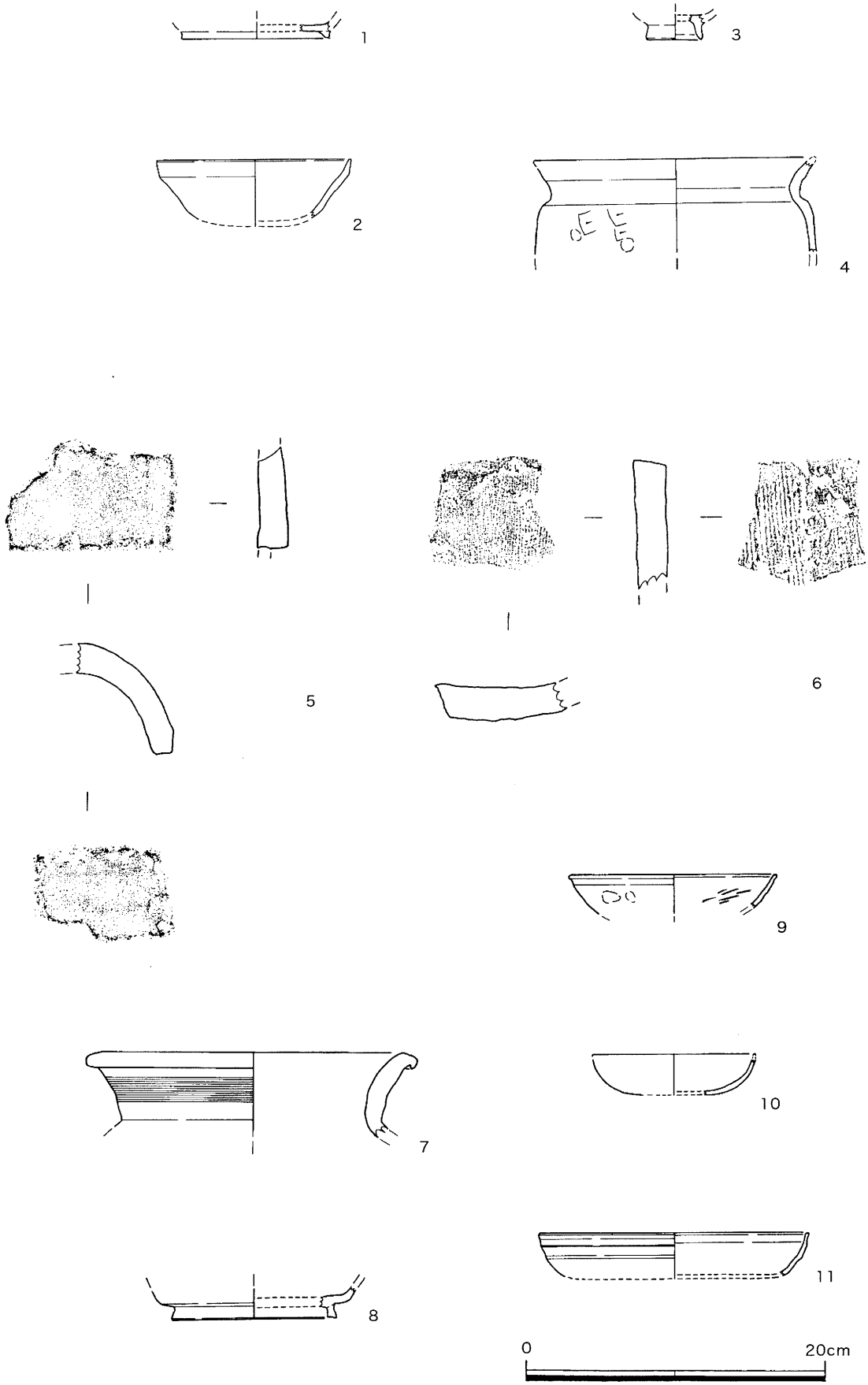


第41図　調査区設定図（1／400）



1	黄灰色砂層	(現代盛土層)
2	灰色粘土層	(耕作土層)
3-A	褐色斑灰色粘砂層	(瓦片、須恵器片、土師器片、瓦器片少量含む)
3-B	同上　粘性大	(瓦片、須恵器片、土師器片、瓦器片少量含む)
4-A	茶灰色粘砂層	(炭混、瓦片、須恵器片、土師器片、瓦器片密に含む)
4-B	同上、粘性大、硬質	(炭混、瓦片、須恵器片、土師器片、瓦器片密に含む)
5-A	褐色斑灰色粘土層	
5-B	同上、鉄分少	
6	褐色斑灰色粘性砂層	
7	青灰色微砂質シルト層	

第42図　調査区土層断面柱状図（1／40）



第43図　出土遺物実測図（1/4）

出土地	出土層	種類	番号	器種	部位	径（ｃｍ）	現高（ｃｍ）	調整・手法	色調	焼成	胎土	備考
北側調査区	３－Ｂ・４－Ａ層	須恵器	1	坏Ｂ	底部	10.0	1.2	内外面―ロクロナデ	暗灰青色	非常に硬	やや粗	
	３－Ｂ・４－Ａ層	土師器	2	椀	口縁～体部	13.0	3.9	内外面―ユコナデ　体部下半―不定方向ナデ	橙色	軟	やや粗	
	３－Ｂ・４－Ａ層	土師器	3	台付皿	底部	高台径　3.8 高台高　1.0	1.7	内外面―全体にヨコ方向ナデ	橙色	軟	非常に良	
	３－Ｂ・４－Ａ層	土師器	4	甕	口縁～体部	18.4	6.2	外面―口縁部ヨコ方向ナデ　内面―ヨコ方向ナデ	暗赤橙色	やや硬	粗	
	３－Ｂ・４－Ａ層	瓦	5	丸瓦	玉縁部片	長軸長　6.9 短軸長　6.4		凸面―短軸方向ナデ・長軸方向ケズリ 凹面―布目痕	黒灰色	やや軟	やや粗	
南側調査区	４－Ａ・４－Ｂ層	瓦	6	平瓦	端部片	長軸長　8.6 短軸長　8.7		凸面―縄目タタキ　凹面―布目痕　端面―ケズリ、一部凹面に及ぶ	灰色	硬	やや粗	
	廃土	須恵器	7	甕	口縁部	20.2	5.7	外面―回転ナデのちカキメ　内面―回転ナデ	外面―灰色 内面―オリーブ黒色	非常に硬	普通	全体に自然釉付着
	４－Ａ・４－Ｂ層	須恵器	8	椀	底部	高台径　11.0 高台高　1.0	2.2	外面―ロクロナデ 内面―ロクロナデ	内面―暗青灰色 外面―灰褐色	非常に硬	良	自然釉付着
	４－Ａ・４－Ｂ層	瓦器	9	椀	口縁～体部	13.8	2.5	外面―ユビオサエ後ナデ　内面―ヘラミガキ	黒灰色	やや軟	良	
	４－Ａ・４－Ｂ層	土師器	10	坏	口縁～体部	10.8	2.8	内外面―剥離が激しく調整不明	暗赤橙色	非常に軟	良	
	３・４－Ａ層	土師器	11	皿	口縁～体部	18.0	2.9	内外面―ナデ　体下方外面―不定方向ナデ	乳白色	軟	精良	

出土遺物観察表

９．高安古墳群（2000－407）の調査

１．調 査 地：大字教興寺560番11

２．調査期間：平成12年11月11日

３．調査方法

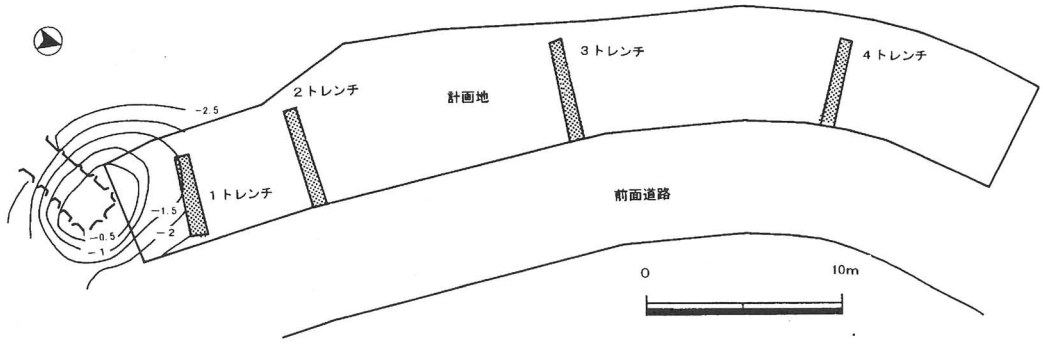
計画地南端に古墳が存在し、その他にも遺構が存在する可能性があるため、計画地内に４ヶ所のトレンチを設定して掘削を行い、古墳に関連する遺構の有無を確認した。

４．調査概要

古墳に隣接する１トレンチでは、古墳の墳丘裾の痕跡を土層で確認した他、墳丘面に古墳の石室に関わる石材が散乱するのを確認した。２～４トレンチでは、遺構・遺物はなく、後世の盛土の下に地山の一部を確認した。

５．ま と め

１トレンチで古墳の裾を確認したため造成範囲を見直し、１トレンチ以南にみられる古墳の封土を保存することで事業主の理解を得た。工事は、当文化財課の立会のもとに施工された。　（米田）



第44図　調査区設定図

第45図　調査地周辺図（１／５０００）

10. 東郷遺跡(2000－232)の調査

1. 調 査 地:光町２丁目21他

2. 調査期間:平成12年７月26日

3. 調査方法

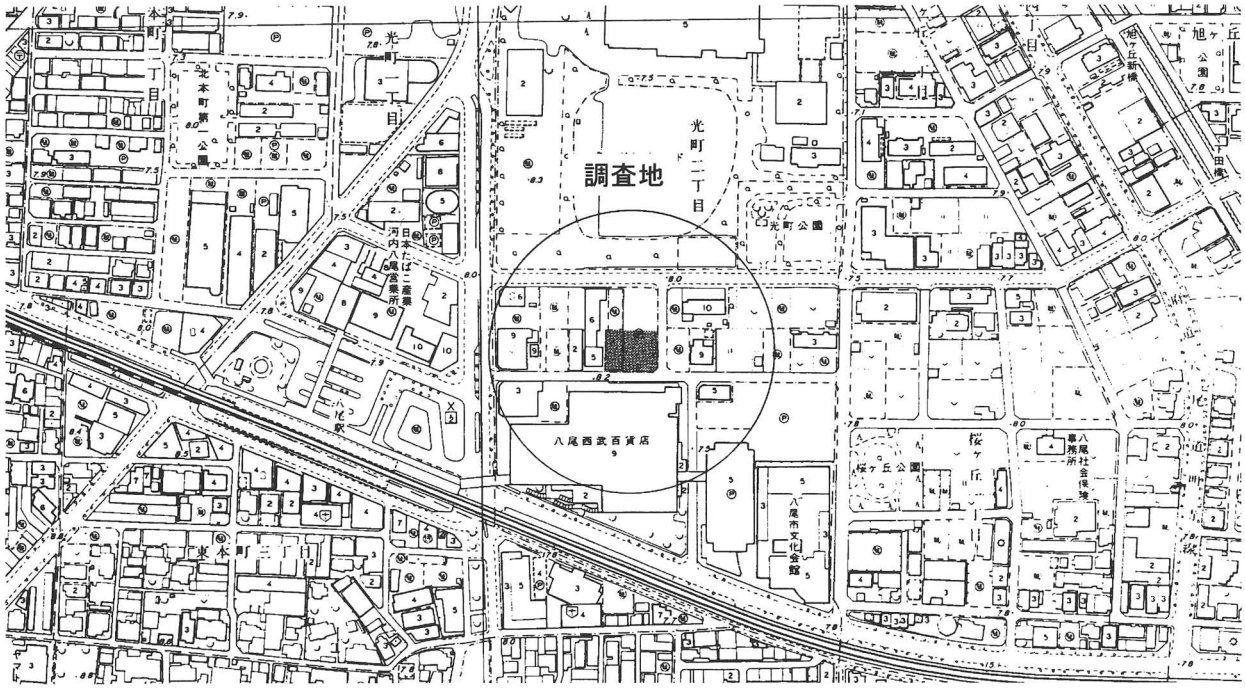
施工予定地の西と東に2.5m四方の調査区を設定し、地表下2.8m前後まで調査を行った。

4. 調査概要

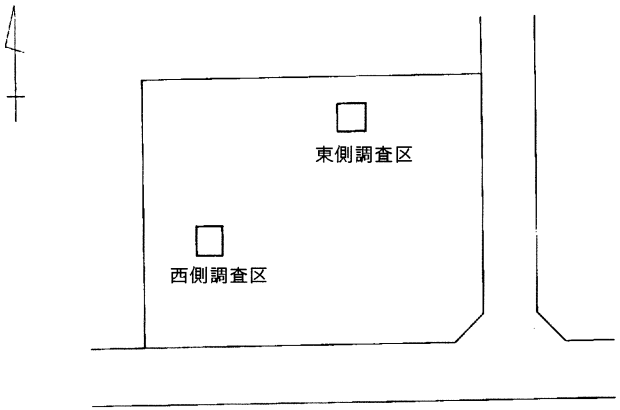
西側調査区では地表下1.44～1.5mで庄内新段階から布留古段階の土器片を含む茶褐色斑灰緑色粘砂層(５層)を確認した。さらに層直下の茶褐色斑灰緑色粘質土層(７層)上面、TP＋6.5m前後で土坑１基(ＳＫ１)を検出した。検出最大径1.04m、深さ0.29mを測る。埋土は黄茶色灰色粘質土(①層)、灰茶緑色粘砂層(②層)である。埋土内には庄内式新段階から布留式古段階とみられる土器片が含まれていた。この下については地表下2.8m前後まで下層確認を行なったが、遺構・遺物は確認できなかった。

東側調査区では地表下1.4～1.6mの３層、５層から庄内新段階から布留古段階の土器片とともに、13世紀代かとみられる須恵器片、瓦器片を確認した。また埴輪片かとみられる破片１点(２)が含まれていた。さらに５層直下の茶灰緑色粘砂層(８層)上面、TP＋6.4m前後で土坑２基(ＳＫ２・ＳＫ３)を検出した。ＳＫ２は検出最大長1.3m、深さ0.33mを測る。埋土は茶灰緑色粘質土(③層)、灰緑茶色粘砂層(④層)である。埋土内には庄内式新段階から布留式古段階とみられる土師器片(１他)が含まれていた。ＳＫ３は検出最大幅0.22m、深さ0.15mを測る。埋土は灰緑色粘砂層(⑤層)である。さらにこの下については地表下2.7m前後まで下層確認を行なったが、遺構・遺物は確認できなかった。

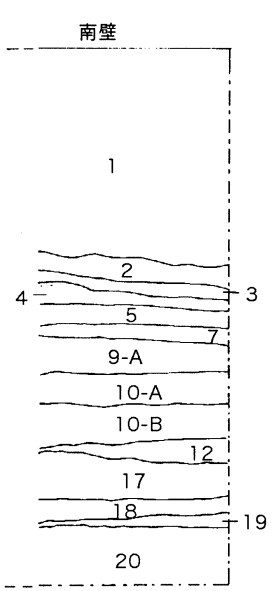
今回の調査区では弥生時代末から古墳時代初頭とみられる遺構面を確認した。周辺で確認されている同期の遺構面と対応するものである。この遺構面の直上は中世の包含層となるようである。また中世包含層内に混入していた埴輪片とみられる破片(２)は、小片であり判然としないが、内面に丁寧なヘラケズリが行われており、古墳時代前期の所産である可能性がある。 (吉田野乃)

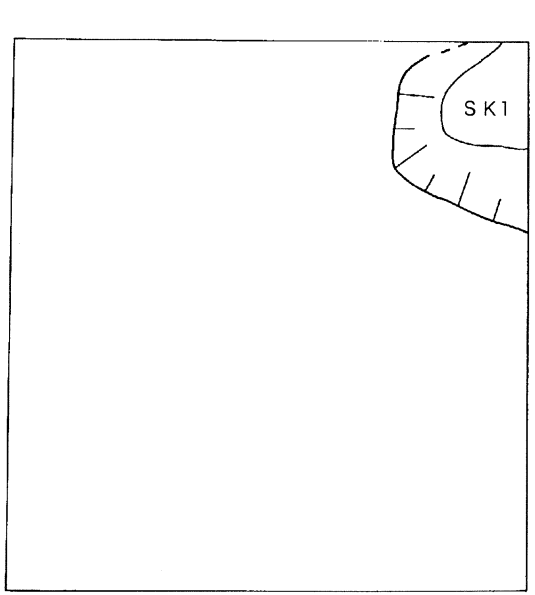


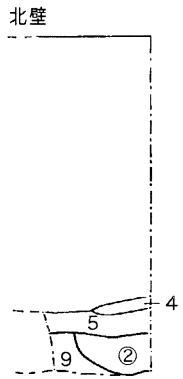
第46図　調査地周辺図(１／５０００)



第47図　調査区設定図（1／800）

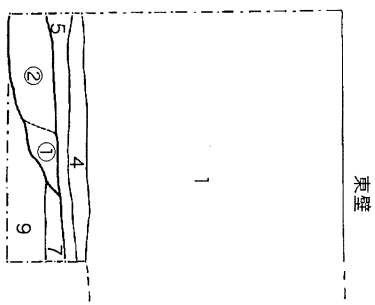




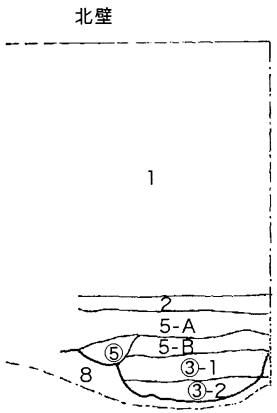


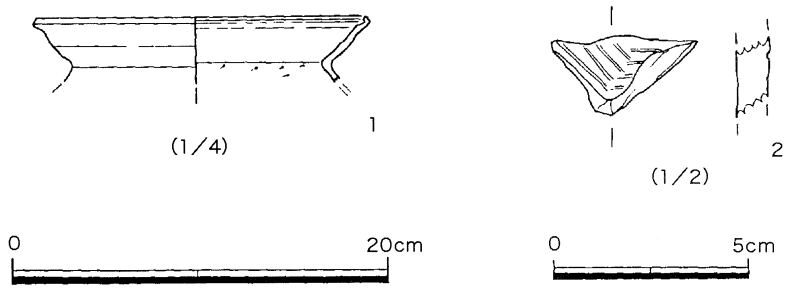
1　現代盛土層
2　耕作土層
3　暗灰緑色粘砂層
4　淡灰緑色粘砂層
5-A　茶褐色斑灰緑色粘砂層
5-B　同上　色調暗
7-1　褐色斑灰緑色粘質土層
7-2　黄色味大　粘性大　(遺構面構成層)
8　茶灰緑色粘砂層　(遺構面構成層)
9-1　淡灰緑色微砂質シルト層
9-2　同上　色調明
10　淡茶灰緑色粘質土層(灰青色微砂混)
9　明茶灰色粘砂層
11　灰紫色粘土層
12　灰黄色微砂層
13　灰色砂混粘砂層(粗砂混)
14　褐色斑灰色粘土層
15　灰色粘砂層
16　灰緑色シルト層
17　茶褐色斑灰色粘性砂層
18　灰黄白色粗砂層
19　黄色斑灰色シルト層
20　黄灰白色微砂層
21　灰色砂層

遺構埋土
①　黄茶灰色粘質土　(SK01埋土)
②　灰茶緑色粘砂層　(SK01埋土、炭多く混る)
③-1　茶灰緑色粘質土　(SK02埋土)
③-2　同上　粘性大　(SK02埋土)
④-1　灰緑茶色粘砂層　(SK02埋土)
④-2　同上　色調暗　(SK02埋土)
⑤　灰緑色粘砂層　(SK03埋土)

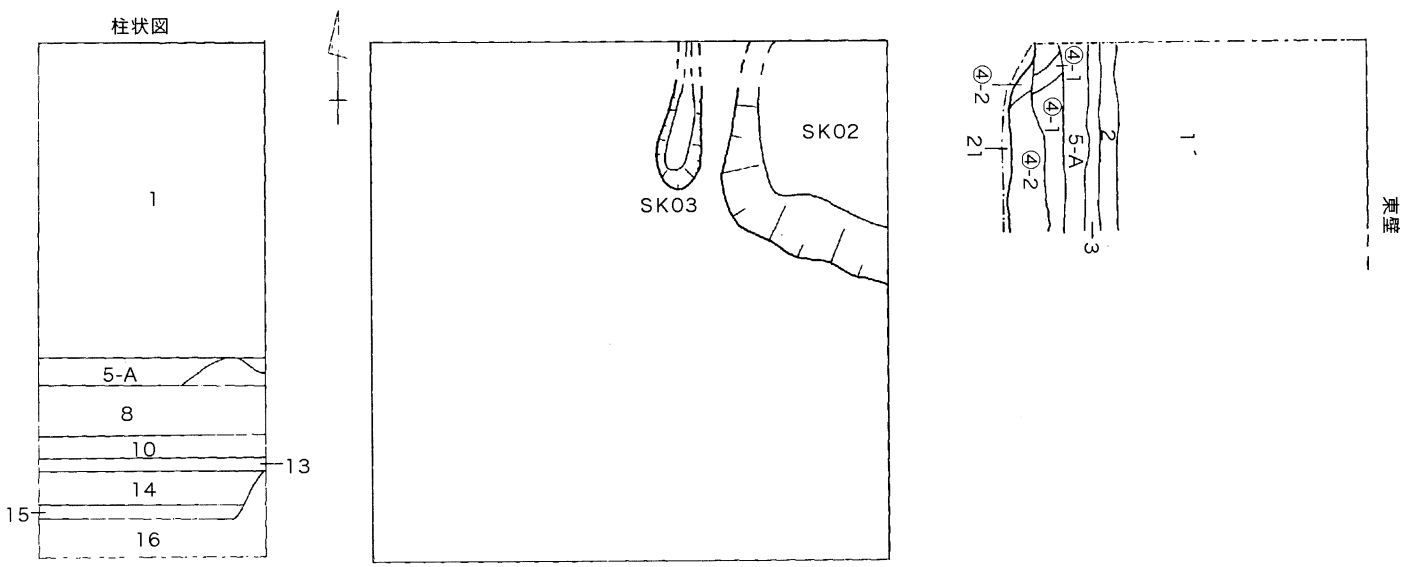


第48図　西側調査区　平面・土層断面図（1／40）





第49図　出土遺物実測図



第50図　東側調査区　平面・土層断面図（1／40）

11. 中田遺跡　(1999－114)の調査

1. 調 査 地:刑部４丁目259－２

2. 調査期間:平成12年１月27日

3. 調査方法

住宅建築に係る浄化槽部分を対象として、約１ｍ×1.7ｍの調査区を設定し、地表下約1.6ｍまで調査を行った。

4. 調査概要

本調査地は旧大和川の本流である古玉串川西岸に位置しており、洪水砂などの河川堆積を想定していた。しかし、実際は砂層は確認出来なかった。層序については図52でわかるように盛土がほとんどなく、旧作土までは0.3ｍほどであるが、近世から現代にかけての耕作土がさらに下部に１面存在していた。

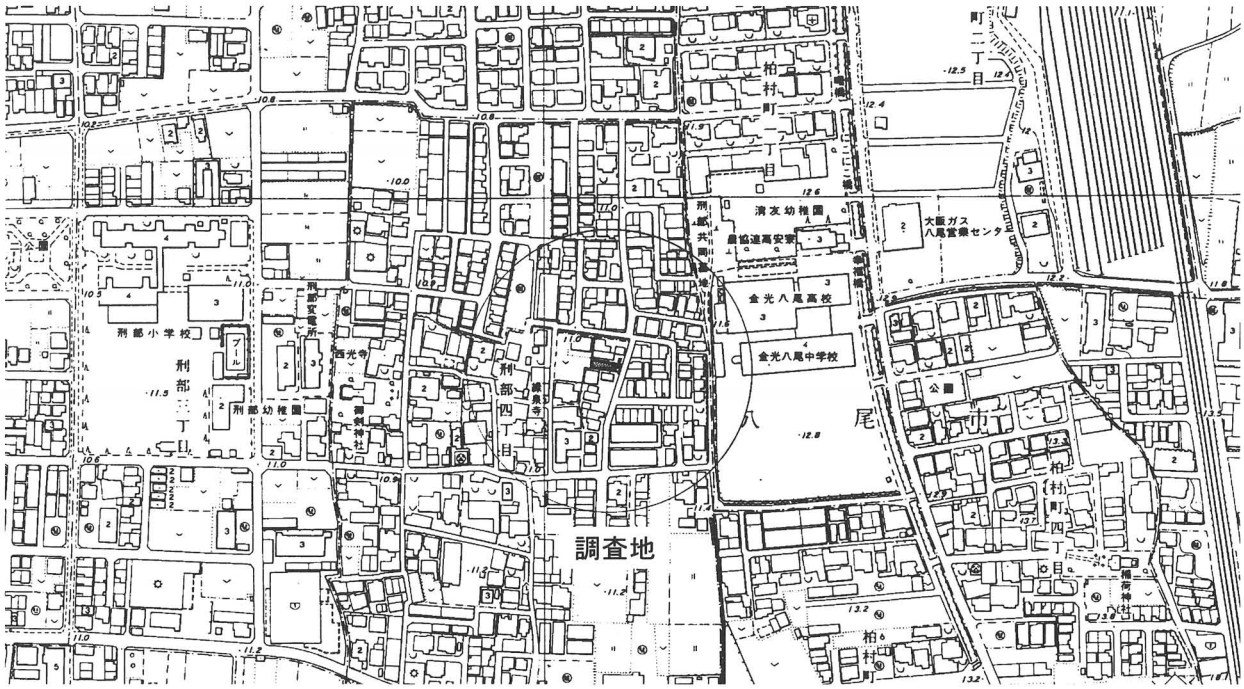
遺物包含層は地表下0.95ｍの暗灰色粘土シルト細砂混じり(植物遺体を含む)と下部の灰黒色粘土シルト細砂混じりで、上部は層厚約0.25ｍ、下部は層厚約0.1ｍである。上部は植物遺体を含むことから湿地状態であったものと推定される。ここからは、土師器羽釜(3・4)、瓦器羽釜(5・6)、須恵器練り鉢(7)、土師器皿、瓦器椀などの砕片が出土している。

遺構構築面は地表下約1.3ｍの緑灰色粘土で上面に炭化物がみられた。遺構は土坑あるいは溝と考えられるもので西肩のみを検出した。東西長約0.7ｍ、南北長約0.9ｍ、深さ0.25ｍ以上である。埋土は暗茶灰色シルト微砂混じりで植物遺体が含まれ、完形の瓦器椀(1・2)が出土した。

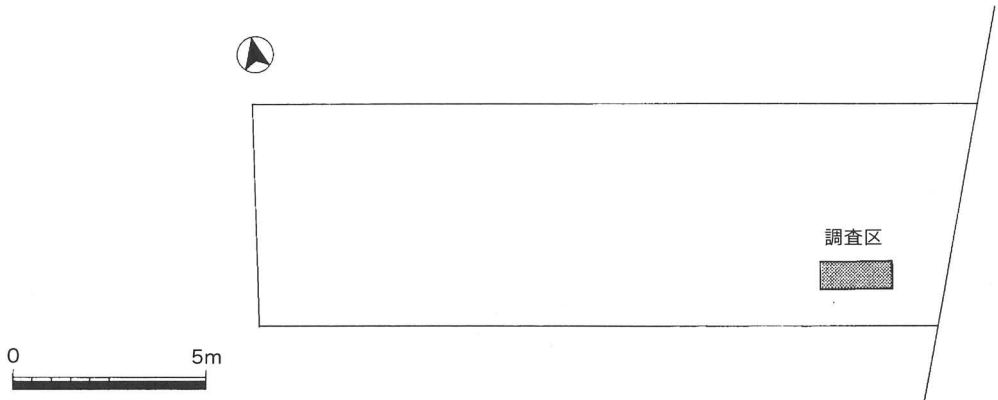
5. 出土遺物

瓦器椀(1・2)は口径約10㎝、器高約３㎝で、高台はない。体部は指頭痕が残り、口縁部のみ横ナデを施す。見込みの暗文は渦巻き状である。土師器羽釜(3)は丸い口縁端部をもち、鍔断面はU字状を呈する。口径約32㎝。(4)は大和型羽釜で鍔下部にナデ痕跡を残す。瓦器羽釜(5)は口縁外面に明瞭な段を有し、内傾する口縁端部をもつ。(6)器壁は薄く、口縁外面は段をつくる。

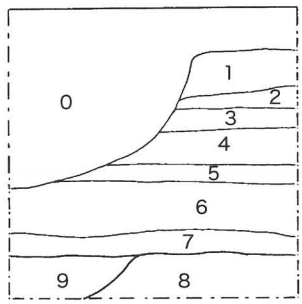
瓦器椀は13世紀後葉から14世紀初頭、その他の遺物は13世紀末から14世紀に比定される。



第51図　調査地周辺図(1/5000)

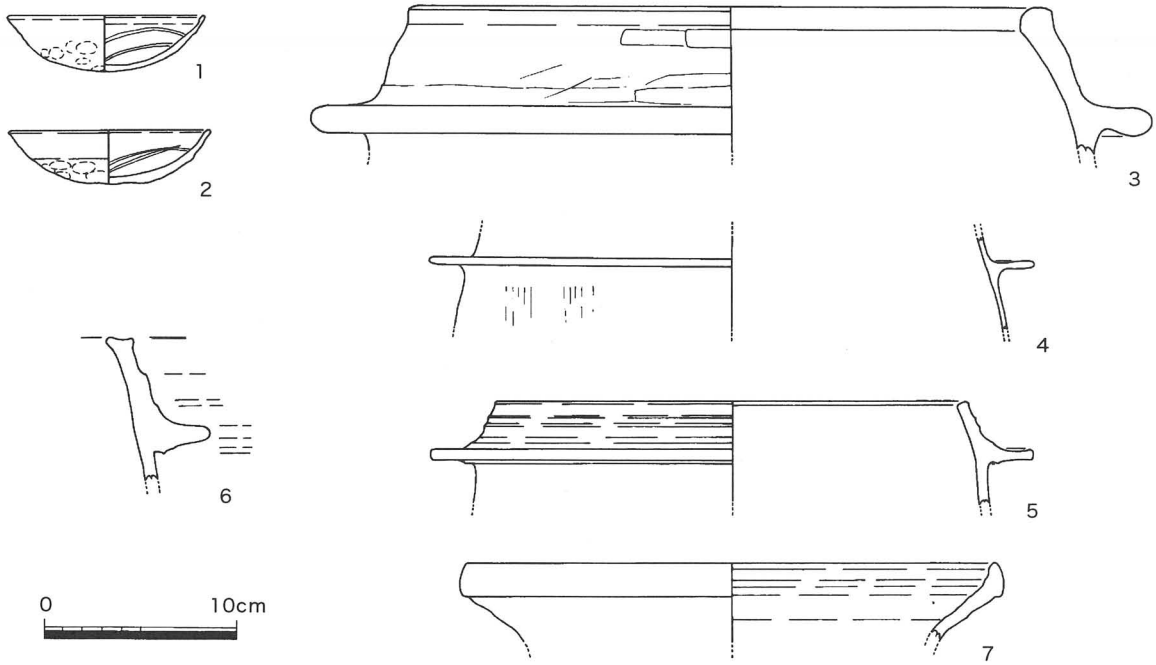


第52図　調査位置図（1／200）



0. 盛土
1. 旧作土1
2. 暗緑灰色粘砂
3. 旧作土2
4. 淡灰色シルト細砂混
5. 淡緑灰色シルト細砂混
6. 暗灰色粘土シルト細砂混(植物遺体を含む)
7. 灰黒色粘土シルト微砂混
8. 緑灰色粘土（植物遺体、上面炭化物有）－遺構面ベース
9. 暗茶灰色シルト微砂混－遺構埋土

第53図　南壁土層断面図（1／40）



第54図　出土遺物実測図（1／4）

6. ま と め

本調査地は旧大和川のひとつである古玉串川の西岸約50mの地点に位置している。にもかかわらず、中世の遺構面が依存していることが判明した。今後、河川の変化をとらえる上での資料が得られたものと思う。

（消　斎）

12. 中田遺跡(1999－244)の調査

1. 調 査 地:刑部３丁目81番２

2. 調査期間:平成12年２月22日

3. 調査方法

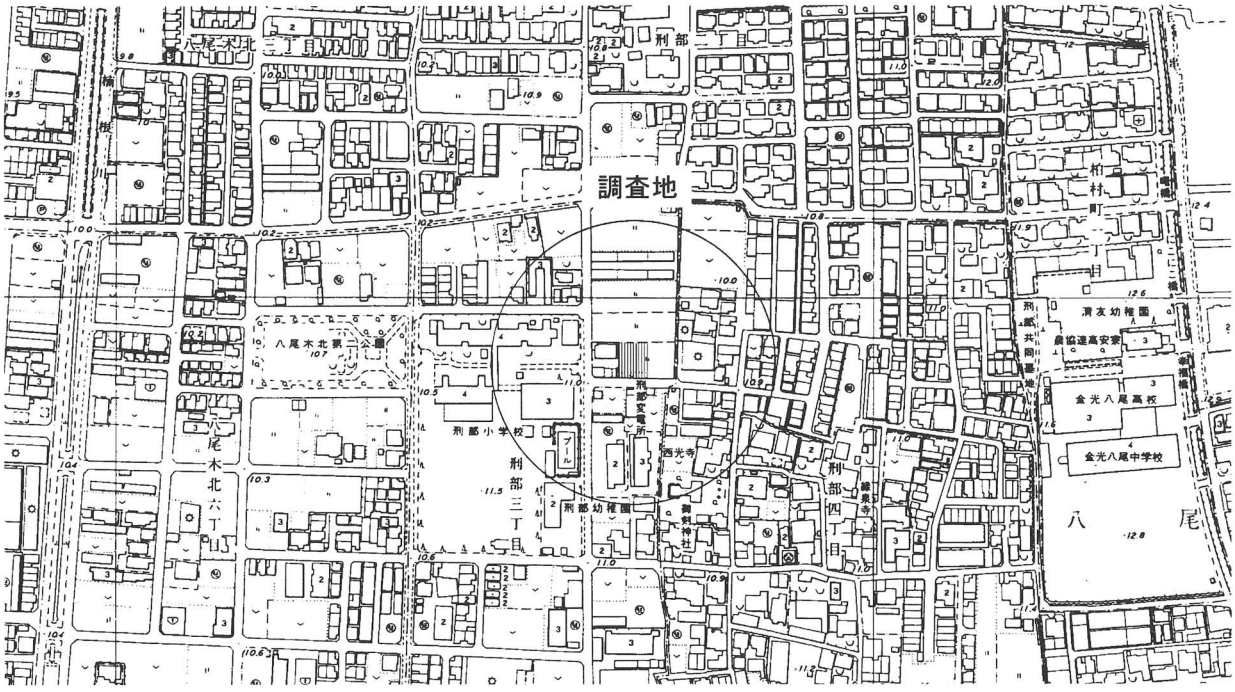
施工予定地の中央付近に2.5ｍ四方の調査区を設定し、地表下1.9ｍ前後まで調査を行った。

4. 調査概要

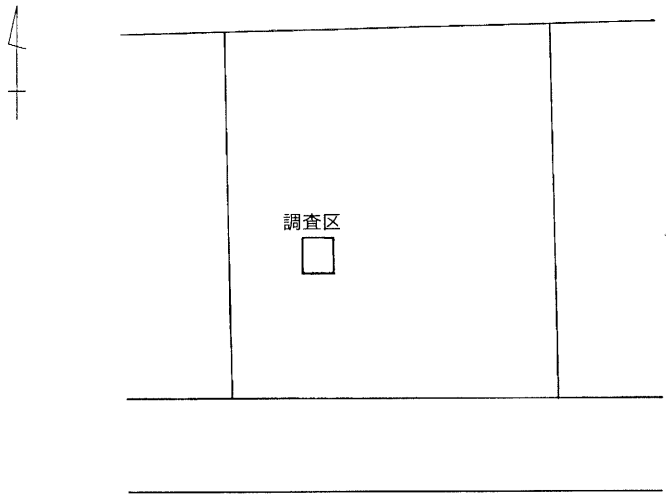
地表下0.34～0.5ｍで土師器片、須恵器片、瓦器片をやや含む灰褐色粘質土層(３－Ｂ層)を確認した。またその下の地表下0.5～0.66ｍで土師器片、須恵器片、弥生式土器片(１～３他)を密に含む灰褐色粘質土層(３－Ｃ層)を確認した。３－Ｃ層は７世紀代の須恵器・土師器片や弥生式土器片を含むが、中世まで下る可能性のある包含層である。

さらに３－Ｃ層直下の褐色斑淡灰色粘土層(４層)上面、TP＋9.34ｍ前後で東西方向の溝状遺構を検出した。検出長1.7ｍ、最大幅1.22ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は褐色斑灰色粘砂層(①層)、灰色微砂質粘土層(②層)である。埋土内には土師器片(５～７他)、須恵器片(８.９他)、埴輪片(10)、弥生式土器片(11他)、砥石(12)等が含まれていた。出土した土師器、須恵器から７世紀代の遺構とみられる。４層からは土師器片、須恵器片、弥生式土器片が出土している。さらにこの下については地表下1.9ｍ前後まで下層確認を行ったところ、地表下1.3ｍまでは粘土層、粘砂層(５～８層)が堆積し、これ以下は自然河川を起源とするとみられる褐灰色粗砂層(９層)、灰色微砂層(10層)の堆積となる。このうち褐色斑灰色粘砂層(７層)からは弥生時代とみられる土器片が１点出土した。また褐色斑淡暗灰色粘砂層(８層)からは、弥生時代中期の土器片(４他)が少量出土した。

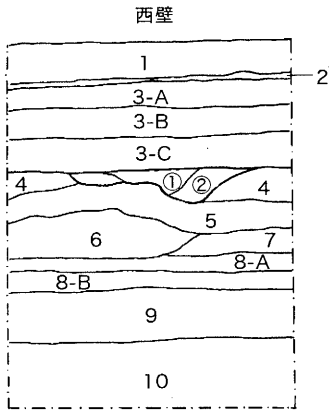
今回の調査区では７世紀代とみられる遺構面と中世の包含層を確認した。また下層では弥生時代中期とみられる包含層を確認した。７世紀代の遺構の埋土及び中世の包含層からは弥生式土器片が出土していることから、弥生時代の包含層を削平して後世の遺構が構築されている可能性がある。また遺構埋土内から朝顔形埴輪片(10)が１点出土している。これは川西編年Ⅲ期に位置付けられるとみられるものである。周辺に古墳時代中期の古墳が存在していた可能性がある。　　(吉田野乃)



第55図　調査地周辺図(１／５０００)



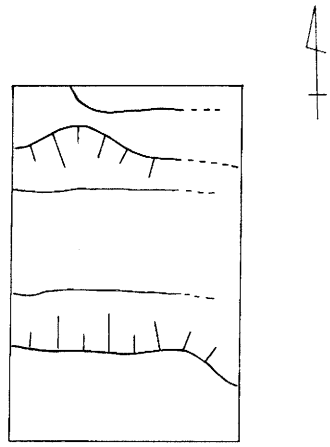
第56図　調査区設定図（S＝1／500）



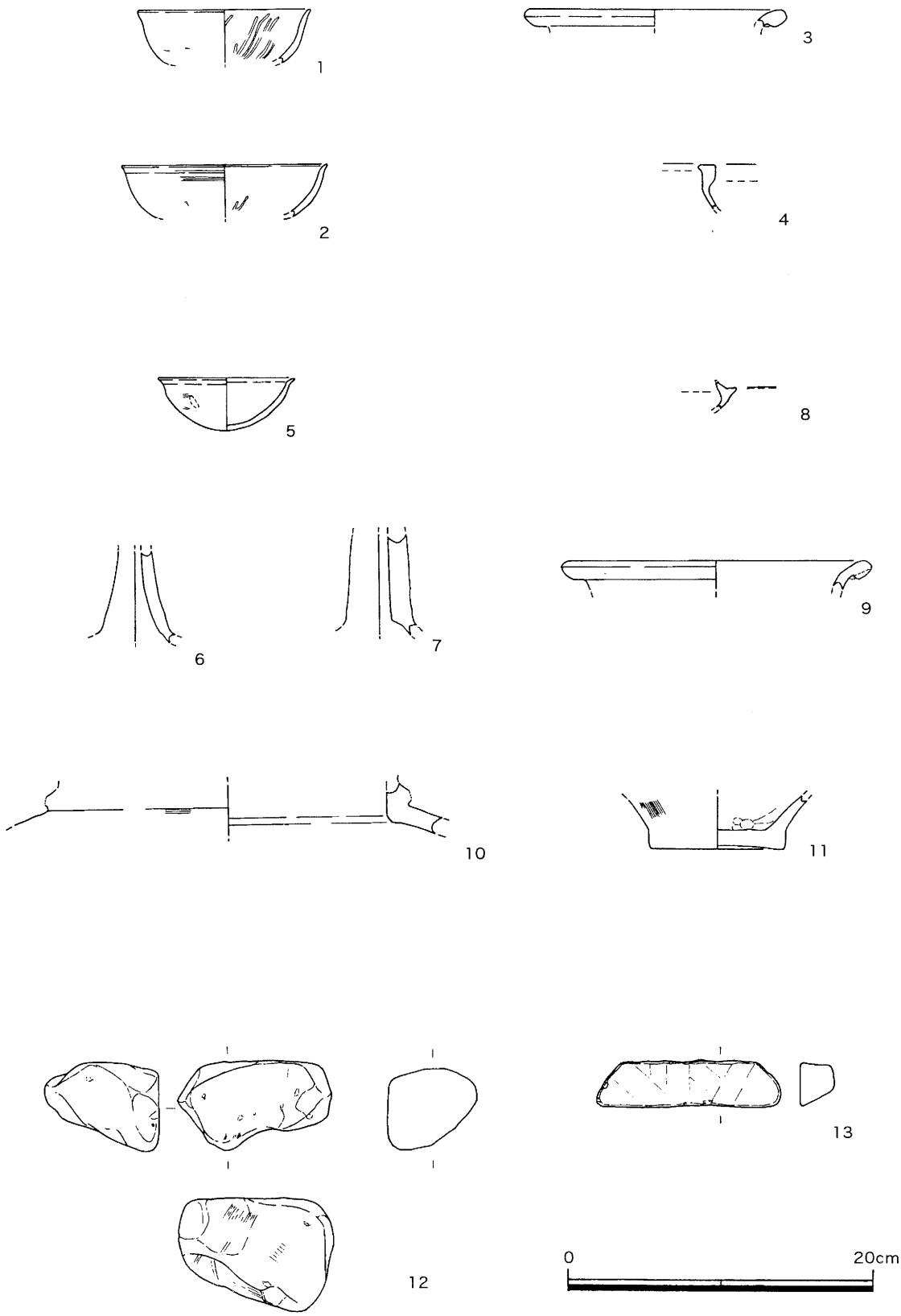
1　耕作土層
2　褐灰色粘砂層(床土)
3-A　灰褐色粘質土層
3-B　同上　粘性大(土師器片、須恵器片、弥生土器片、瓦器片やや含む)
3-C　同上　さらに粘性大(土師器片、須恵器片、弥生土器片密に含む)
4　褐色斑淡灰色粘土層(遺構面構成層。土師器片、須恵器片、弥生土器片やや含む)
5　淡灰白色粘土層
6　灰色粘砂層(?)
7　褐色斑灰色粘砂層
8-A　褐色斑淡暗灰色粘砂層(弥生土器片含む)
8-B　同上　砂多(弥生土器片含む)
9　褐灰色粗砂層
10　灰色微砂層

溝状遺構埋土(須恵器片、土師器片、弥生土器片含む)
①層　褐色斑灰色粘砂層(黄灰色砂混)
②層　灰色微砂質粘土層

第57図　調査区土層断面図（1／40）



第58図　調査区平面図（1／40）



第59図　出土遺物実測図（1/4）

出土地	種類	番号	器種	部位	径等（cm）	現高等（cm）	調整・手法	色調	焼成	胎土	備考
3－C層	土師器	1	坏	口縁～体部	11.3	3.5	外面上半―横方向ナデ 外面下半―横ヘラケズリ 内面―放射状暗文	燈色	普通	やや粗	
		2	坏	口縁～体部	13.4	3.4	外面上半―ヨコハケのち横方向ナデ 外面下半―ヘラケズリ　内面―放射状暗文、ヨコナデ	燈色	普通	やや粗	
	須恵器	3	甕	口縁部	8.6	1.1	内外面―ロクロナデ	灰色	硬	やや粗	
	弥生式土器	4	鉢	口縁部	12.8	2.9	口端部～外面―横方向ナデ　内面―ユビオサエのちナデ	黄灰色	やや軟	やや粗	
遺構埋土②層	土師器	5	坏	口縁～底部	9.0	3.4	口端部外面―横方向ナデ　体部外面―ユビオサエのちナデ、一部ヨコハケ	燈色	軟	やや粗	
		6	高坏	脚部	5.2	5.9	外面―ハケのちナデ？　内面―シボリメのちナデ	淡黄燈色	普通	普通	
		7	高坏	脚部	4.8	6.4	外面―縦方向ナデ 内面―ナデ	燈色	やや軟	非常に粗	
遺構埋土①層	須恵器	8	坏身	口縁部	不明	1.8	口端部内外面―ロクロナデ　坏部外面―ロクロヘラケズリか	灰色	硬	やや粗	
遺構埋土②層		9	甕	口縁部	19.4	1.9	口端部外面―ロクロナデ　口縁部内面―カキメのちロクロナデ　頸部外面―カキメ	灰色	硬	やや粗	
	埴輪	10	朝顔形埴輪	頸部	（頸部径）23.6	3.3	外面―ヨコハケのちナデ 内面―ナデ	燈色	やや硬	やや精良	
	弥生式土器	11	甕	底部	8.6	3.5	外面―タテハケ、ナデ　内面―ナデ、ユビオサエ	褐色	やや硬	非常に粗	
遺構埋土①層	石器	12	砥石		（最大長）10.15 （最大幅）5.8 （最大厚）7.45		両面に擦痕あり	灰白色			
3－C層		13			（最大長）12.1 （最大幅）3.0 （最大厚）2.25		両面に擦痕あり	灰白色			

出土遺物観察表

13. 中田遺跡(2000－91)の調査

1. 調 査 地:刑部４丁目37番地の一部

2. 調査期間:平成１２年５月24日

3. 調査方法

分譲住宅建設に伴い、浄化槽設置部分(東西1m・南北2m:調査面積約２㎡)について、地表下約1.5mまで遺構確認調査を実施した。

4. 調査概要

現地表面(T.P.＋11.5m)から地表下0.4mまでは盛土層が続く。以下地表下0.75mから地表下0.9mまでの層厚約0.15mの暗茶褐色粘質土層(4層)が遺物包含層となり、土師器・瓦器・須恵器の小片が出土している。そして、地表下0.9m付近(T.P.+10.7m)が奈良時代～中世頃の遺構面となると考えられる。今回の調査区内では、北から南に向かって緩やかに傾斜する遺構埋土と考えられる暗茶褐色炭混粘質シルト層(5層)が広がり、奈良時代の土器の破片が多数出土している。土器を廃棄した溝又は土壙の一部と考えられる。ただし、この層に対応するベース面は確認できなかった。

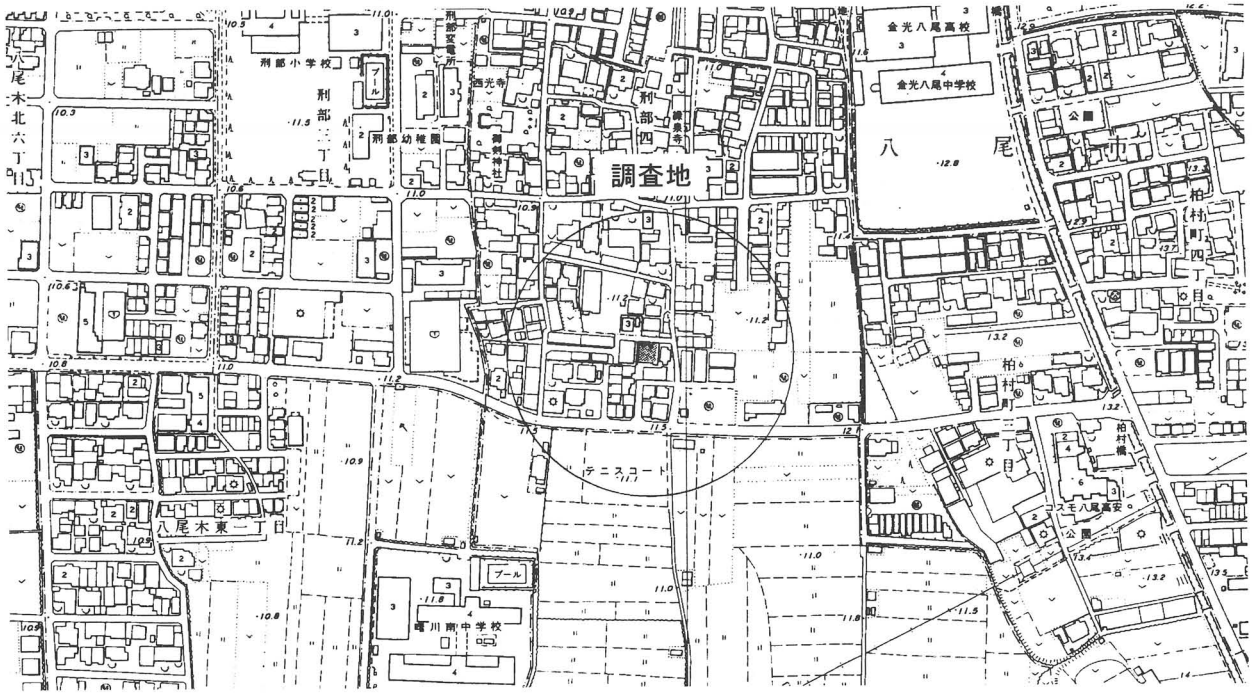
以下、地表下1m～1.3mの暗茶灰色粘質シルト層(6層)でも土師器細片が少量出土しているものの顕著な遺構等は確認できなかった。

5. 出土遺物

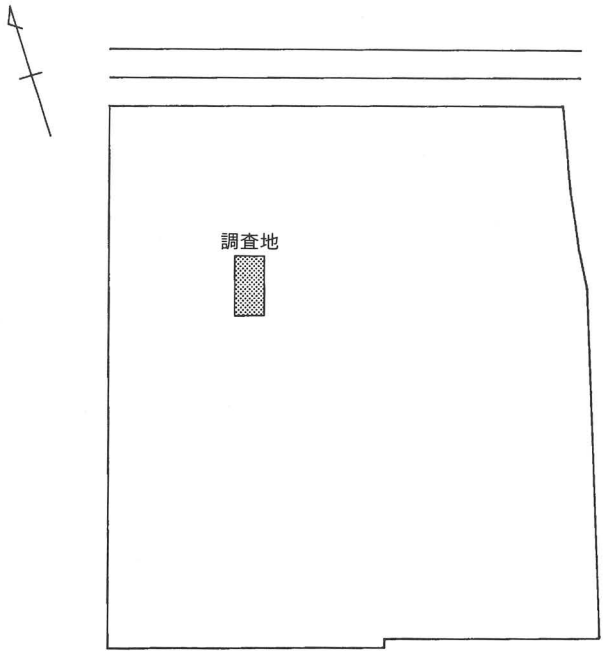
主な出土遺物は、遺構埋土となる5層から出土している。図化できたのはすべて破片で、土師器10点がある。これらは、小片ながら奈良時代の遺物を中心としている。(1)～(8)が５層の遺物で、杯A(1)、皿(2・3)、鉢(4)、壺(5)、碗(6)、甕(7・8)があり、器種構成は豊富である。また4層の遺物包含層からも、同時期の鉢(9)、壺(10)の破片が出土している。

6. ま と め

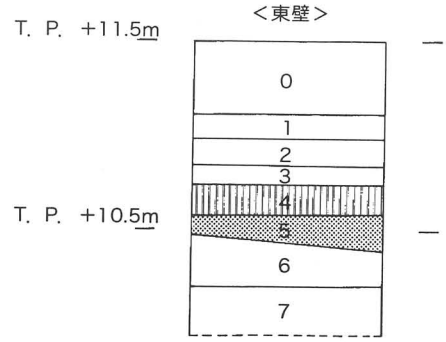
調査面積は狭小であったが、出土遺物から奈良時代の遺物包含層・遺構面が、調査地周辺に広がると考えられ、該期の遺構の存在等を含め今後の調査においても注意すべきであろう。 (藤井)



第60図　調査地周辺図(１／５０００)

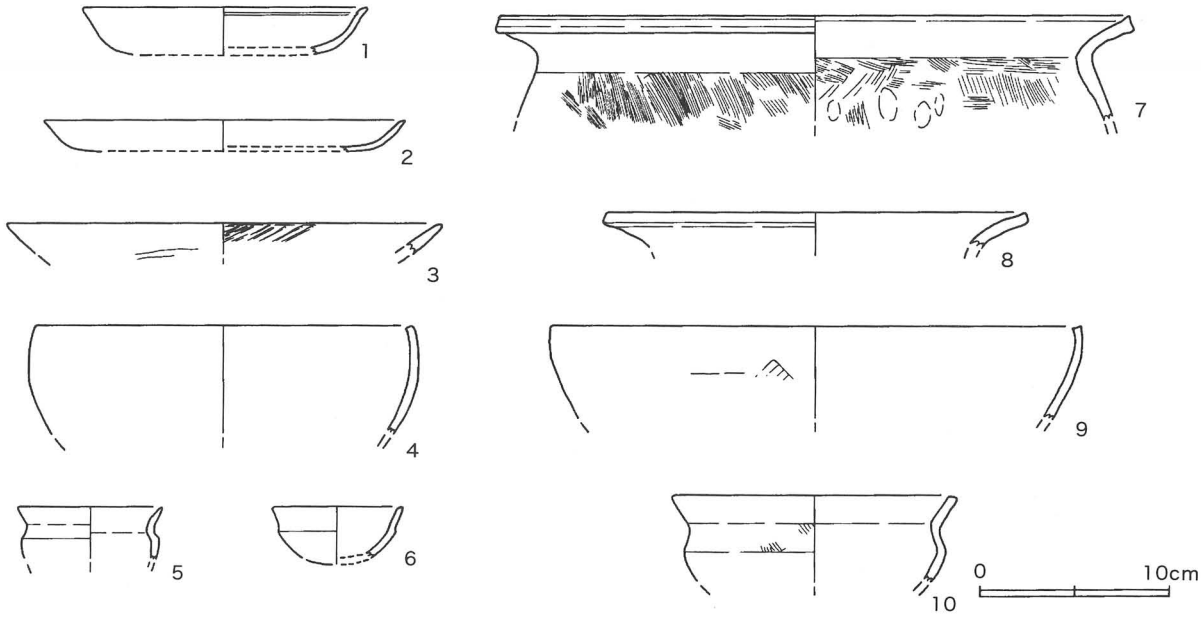


第61区　調査位置図（1／250）



0. 盛土
1. 暗灰色砂質土
2. 茶灰色砂質土
3. 茶灰色小礫混砂質土
4. 暗茶褐色粘質土（包含層）
5. 暗茶褐色粘質シルト（炭混・溝埋土）
6. 暗茶灰色粘質シルト
7. 灰色粘土質シルト

第62図　土層断面模式図（1／40）



第63図　出土遺物実測図（S=1／4）

14. 弓削遺跡(1999－429)の調査

1. 調 査 地:志紀町南４丁目204

2. 調査期間:平成11年12月15日・平成12年４月17日・24日

3. 調査概要

自動車教習所建設工事に伴い、建築範囲の東西２箇所について調査区(３ｍ×３ｍ:第1区・第2区)を設定した。さらに、浄化槽設置箇所の南北２箇所(第3区・第4区)について2.5ｍ×2.5ｍの調査区を設定し、遺構確認調査を行った。後日、浄化槽設置時に土層等の確認を行った。現地表は、平均してT.P.+14.5ｍを測る。

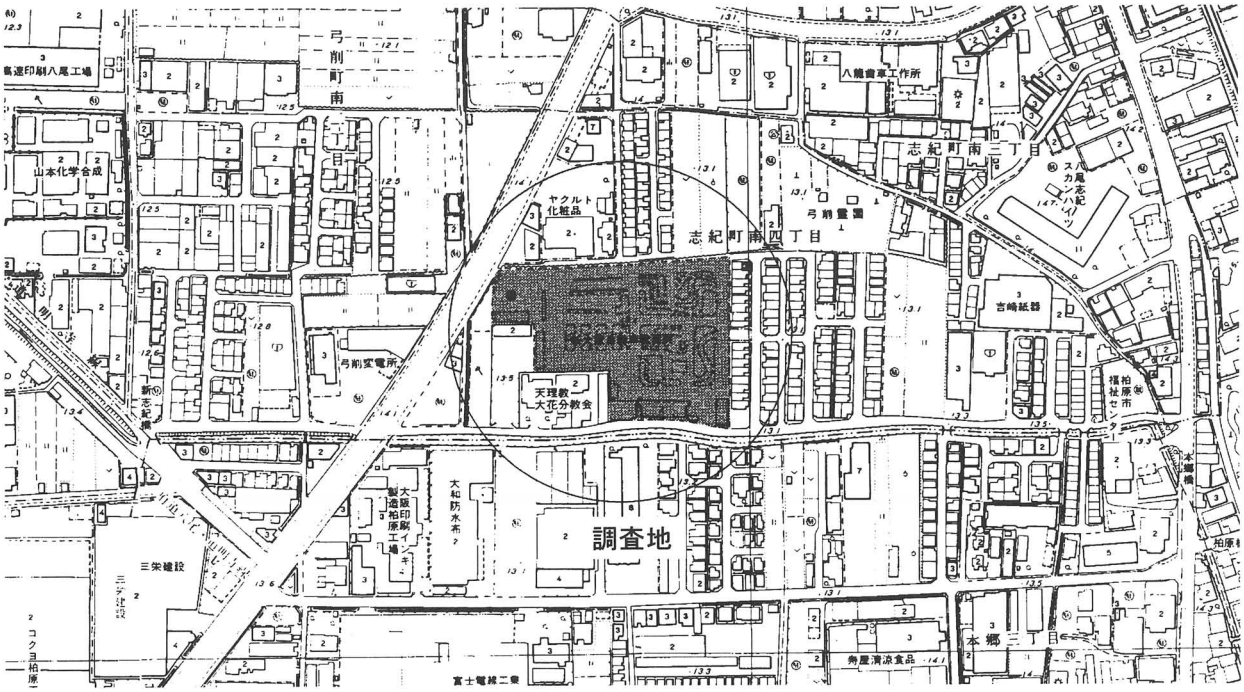
第１区　調査地の東側に設定した調査区である。地表下2.0ｍ前後において河川堆積層を確認できるものの、遺構・遺物は確認できなかった。以下、地表下2.65ｍから3.15ｍにかけての(層)から弥生土器や須恵器が出土している。上層に古墳時代後期の遺物包含層があると考えられる。特に、地表下2.75ｍから3.0ｍ付近には完形品を含む弥生時代後期の弥生土器が集中しており、溝内の土器集積の一部と考えられる。コンテナ1箱分が出土している。

第２区　第2区は、第1区の西側約８ｍの地点に設定した。第1区と同様に地表下2.0ｍ付近に河川堆積層を確認できる。以下、地表下2.65ｍ～3.1ｍが遺物包含層となる。ここからは、須恵器を中心にして、土師器、弥生土器の破片が出土している。但し、遺物は第1区に比べて少量であった。おそらく、遺物包含層上面に古墳時代後期頃の遺構が形成されていたものと思われる。しかし、第1区で確認した弥生時代後期の遺物包含層は確認できなかった。以下、地表下3.1ｍから河川堆積層となる。

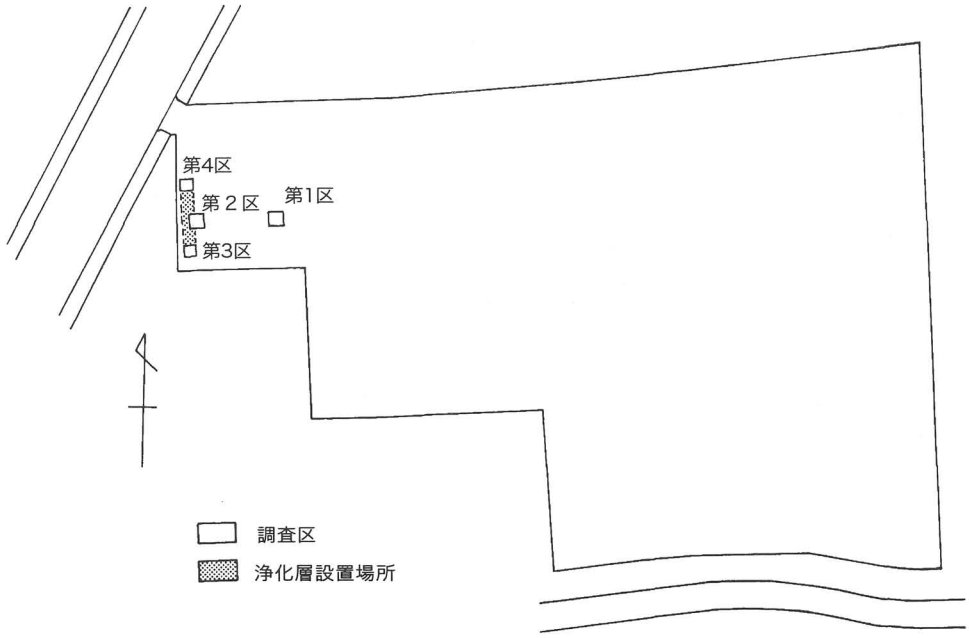
第３区　第3区は、浄化槽設置箇所の南端に設定した調査区である。地表下1.4ｍまでは盛土層が続き、以下、洪水砂直下の地表下1.8ｍ付近で、調査区中央に直径約1ｍ、深さ約1.1ｍの円形状の掘り込みが見られた。おそらく、素掘りの井戸であろう。出土遺物はなく、時期は不明であるが中世以降のものであろう。

さらに、地表下2.65ｍ～2.9ｍ付近の暗灰色粘土層が、古墳時代中期の須恵器、土師器を含む遺物包含層となる。そして、地表下2.9ｍの緑灰色粘土層上面で、土壙を1基検出している。

調査区南東隅では、ほぼ同一レベルで家形埴輪、円筒埴輪、須恵器が出土している。調査区内では当初、



第64図　調査地周辺図(１／５０００)



第65図　調査区設定図（S=1／1600）

家形埴輪の屋根部分のみが出土しており、家形埴輪の基底部分が調査区外の南側に広がったため、埴輪に伴う遺構の範囲は確認できなかった。その後、家形埴輪の破片を確認するため一部、調査区南側を広げると、家形埴輪が、ほぼ完形の1個体で、基底部が樹立したままで出土している。家形埴輪の内部にはこぶし大の石が1個置かれていた。遺構埋土らしき周辺の土層は、暗灰色小礫混粘質シルトであった。

但し、この集積周辺では、その他の形象埴輪の出土は見られなかった。わずかに円筒埴輪と土師器の小片が出土している。家形埴輪は、本来古墳に伴うものであるが、この調査区から北側の浄化槽設置部分にかけても、古墳に関連するような遺構や埴輪は確認できず、古墳が存在していた場合、調査区南側に広がっている可能性が高い。

以下、地表下3.4m付近まで、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

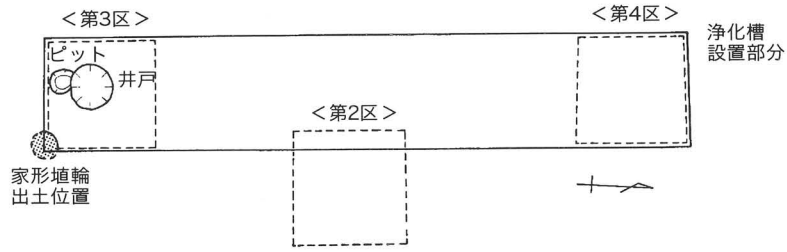
第４区　第４区は、浄化槽設置箇所の北端に設定した調査区である。地表下1.8m～2.0mに洪水砂が見られ、以下第3区の遺物包含層に対応する層が地表下2.6に5m～2.8mに確認できるものの、土師器、須恵器の小片がわずかに見られる程度であった。また、埴輪等の出土は見られなかった。北に向かうにつれて該期の遺物包含層が少なく、遺構の広がりの中心は東側となっていることが分かる。

４．出土遺物

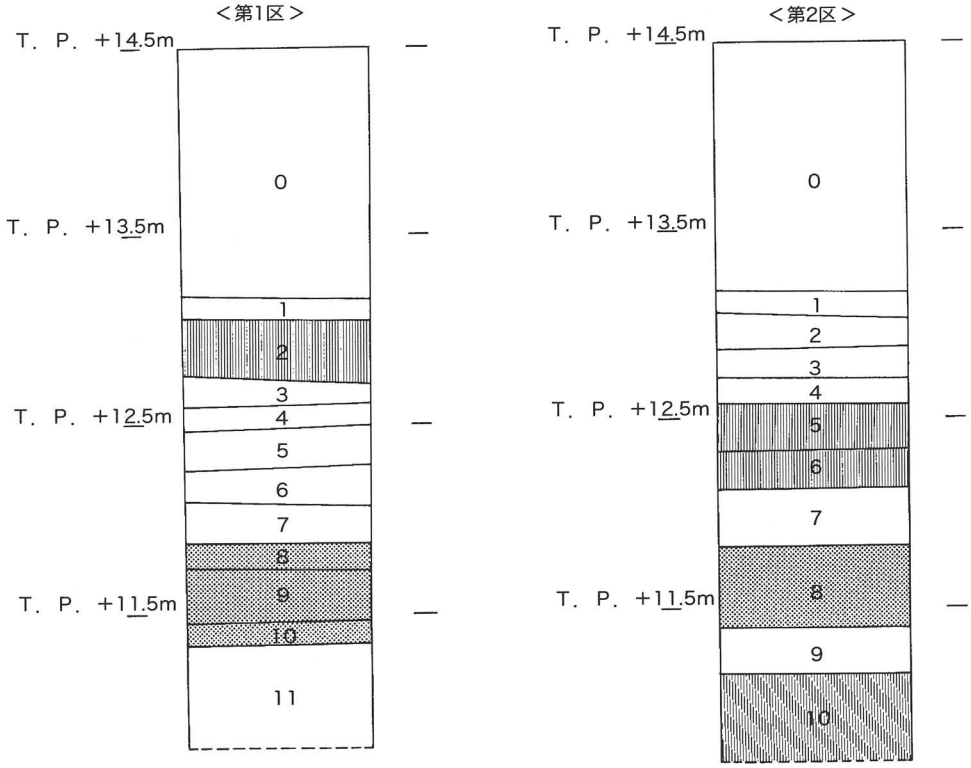
１～17は第1区の出土遺物で、すべて弥生時代後期の溝内土器集積の遺物である。１～８は甕（1～4：口縁部・5～8：底部）である。外面はタタキ調整でやや長胴化している。9・10は高坏の坏部、11～15は壺（11：直口壺・12：広口壺・15：小型壺）の破片である。16は高坏脚部、17は甕底部の破片である。

18・19は第2区の遺物包含層の出土遺物で古墳時代中期の須恵器坏身の破片である。

20・21は第3区の遺物包含層の出土遺物で20は須恵器坏身、21は小型壺の破片である。22～27は、第3区の埴輪集積の出土遺物で家形埴輪（22）、円筒埴輪（23・24）である。家形埴輪以外はすべて破片である。家形埴輪の詳細は次章に記載している。25の須恵器高坏は破片ながら5世紀後半のもので、家形埴輪の時期を考える上で指標となろう。26は高坏の脚部の破片である。また、23・24の円筒埴輪についても、図化できたものの、小片で、外面が摩滅しており調整は不明である。図化できなかったもので、一部ヨコハケやタテハケ調整のものがあることから、川西編年のⅣ期末～Ⅴ期であると考えられ、須恵器の年代とも一致す



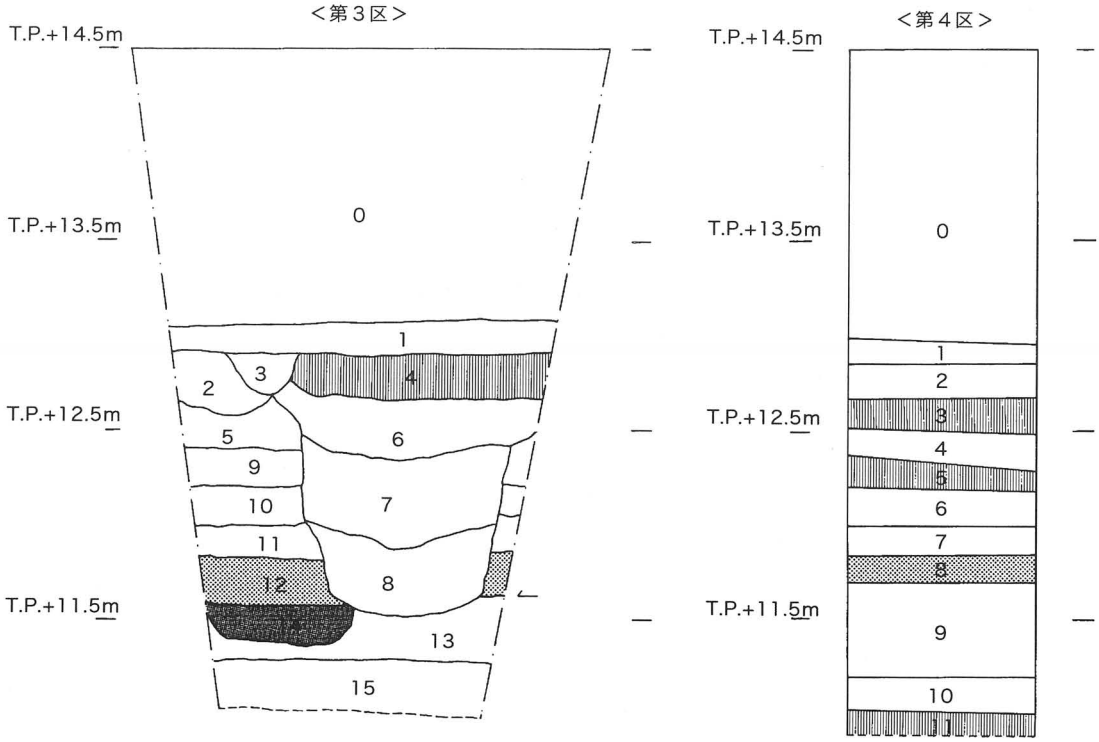
第66図　浄化槽設置部分調査位置図（1／200）



0. 盛土
1. 黒灰色砂質土
2. 淡灰色微砂　：洪水砂
3. 灰褐色微砂混土
4. 灰色粘質土（Fe混）
5. 灰色粘質土
6. 灰色砂混粘質土
7. 灰色砂混粘土（やや暗）
8. 暗灰色砂混粘土
9. 暗灰色小礫混粘質土　弥生土器出土層
１０. 暗灰色小礫混粘質土（やや淡）
１１. 灰色シルト混砂質土

0. 盛土
1. 黒灰色微砂質土
2. 青灰色微砂
3. 青灰色微砂（Fe混）
4. 淡灰色砂質土（Fe混）
5. 灰色粗砂　洪水砂
6. 灰色微砂混シルト
7. 青灰色粘土
8. 暗灰色小礫混粘土　：遺物包含層
9. 淡灰色細砂混シルト
１０. 灰色粗砂　：河川推積

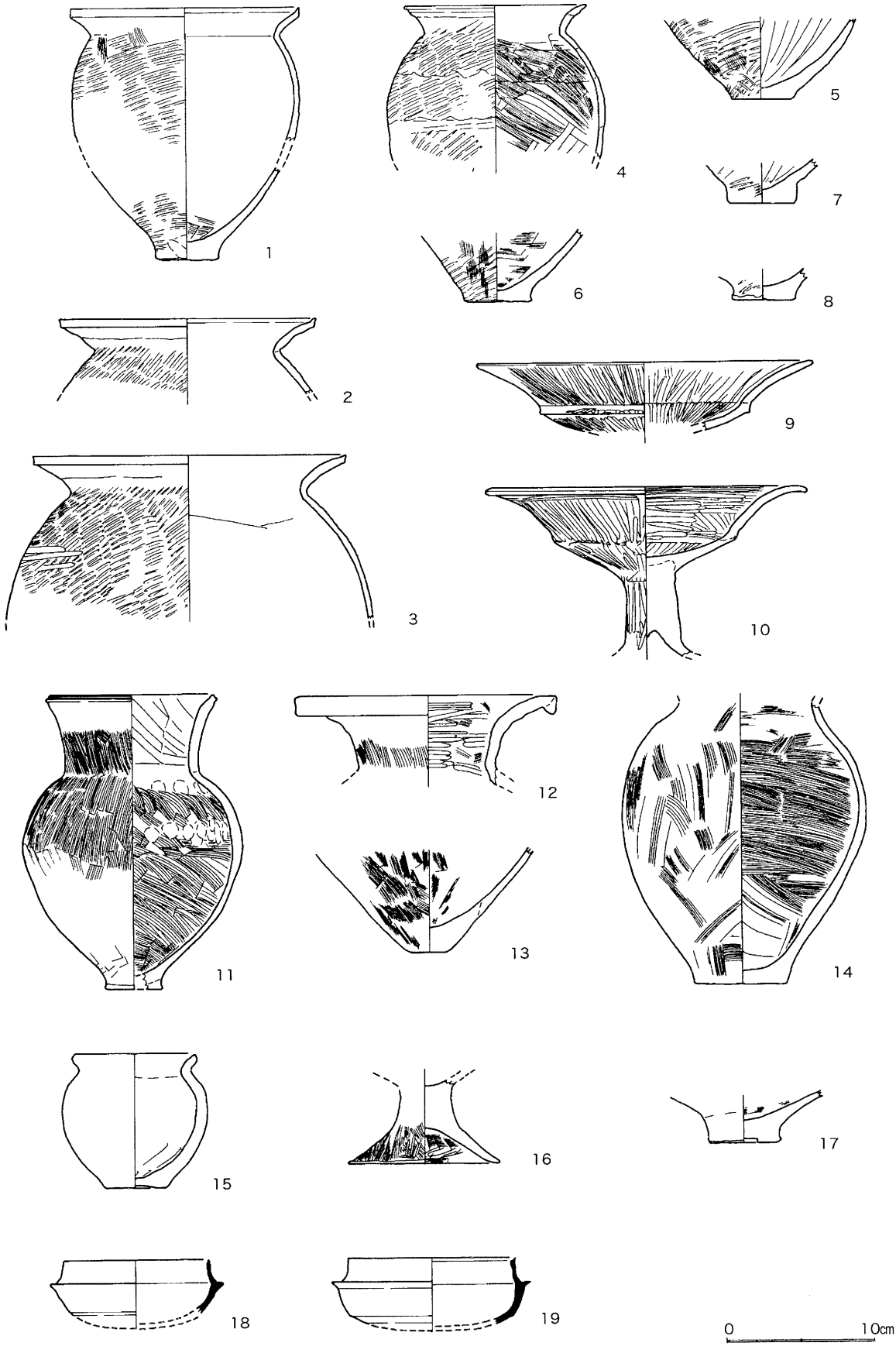
第67図　土層断面模式図（S＝1／40）



0. 盛土
1. 暗灰色シルト混微砂質土
2. 褐灰色粘質シルト
3. 青灰色微砂
4. 淡褐灰色微砂　：洪水砂
5. 淡褐灰色粘質シルト
6. 淡褐灰色粘性シルト質微砂
7. 淡褐色微砂　：井戸埋土
8. 淡褐色細砂
9. 灰褐色砂混粘質土
10. 灰色微砂シルト
11. 青灰色粘土
12. 暗灰色粘土　：遺物包含層
13. 緑灰色粘土
14. 暗灰色炭混粘土(緑色シルト混)：土壙埋土

0. 盛土
1. 暗灰色粘砂
2. 淡青灰色粘性シルト
3. 淡灰色微砂　：洪水砂
4. 青灰色褐灰色粒混粘質土
5. 褐灰色微砂　：洪水砂
6. 灰色微砂混シルト
7. 灰色粘質シルト
8. 灰色粘土質シルト(やや暗)　：遺物包含層
9. 灰色粘土質シルト
10. 灰色粗砂混シルト
11. 灰色粗砂　：河川堆積

第68図　土層断面模式図（S＝1/40）



第69図　出土遺物実測図（S＝1/4）

る。27は、家形埴輪の内部から出土した長辺約12cmの石である。加工痕等は確認できなかった。

28～31は、浄化槽設置時に調査した土層確認トレンチで出土した遺物包含層の遺物である。すべて弥生土器の細片である。第1区で確認した遺物包含層に対応すると考えられるものの、出土遺物はわずかであった。

５．弓削遺跡出土家形埴輪の検討

１）家形埴輪の概要

平側２間、妻側２間の切妻造の高床式家形埴輪である。平行きは裾廻突帯部で32.8cm、妻行きで27.7cmである。屋根残存部を含めた大きさは、平行きで40.7cm、妻行きで29.7cm、高さ38.4cmである。

妻には破風板を持ち、正面向かって左側には桁の表現があるが、右側にはわずかにその痕跡らしきものを残すのみである。上部右側には入口を方形スカシ孔で表現している。また、棟持柱を２本の線刻で表現し、左右対称に綾杉文を施す。ただし、右中央の綾杉文だけは反対方向に線刻されている。外面は縦方向のハケで調整されている。

屋根部は横方向のハケを施し、破風板部分はその外縁に沿ってハケを施す。また屋根の中程に横方向に半綾杉文（註１）を、その上半部には綾杉文を線刻し、押縁と棟帯を表現している。

内面は縦方向のユビナデを基調に調整されているが、一部板ナデや縦方向のハケが見られる。また、軸部（註２）と屋根部の接合にはユビナデとユビオサエを併用している。

表面には赤色顔料の塗布が見られ、正面向かって左側の屋根部に顕著に残っている。

焼成は土師質であるが比較的良好で硬質である。色調は浅黄橙色を呈し、屋根部はにぶい橙色を呈する。胎土には長石・クサリ礫・金雲母・黒雲母・石英を含む。

２）製作技法について

軸部は４～５cmほどの粘土帯を積み上げて成形（註３）しているが、四隅には粘土の補充痕が顕著に残っているため、粘土紐でつくった粘土板を組合せ、コーナー部分で張り付けた可能性が考えられる。外面は成形段階でタテハケ調整を施し、３～3.5cmの裾廻突帯を張り付けた後に、２次的にタテハケ調整を行っている。裾廻突帯は下部に粘土を補充し、上部はナデツケによって接合されている。

背面右柱部分にはヘラ状工具による切り込みが見られる。これはスカシ孔を穿孔する際にあやまって切り込んだものと思われる。

軸部と屋根部は「一括成形技法」（註４）で接合されている。

屋根部の閉塞技法は、その大半を欠失してしまっているため不明である。破風板は屋根部を取り付けた後、その上部に乗せる形で接合している。その後に棟木を接着している。

屋根部の重みによって全体的に正面側へ傾いている。正面中央の柱が内傾して、左平側の右柱も内傾していることがわかる。

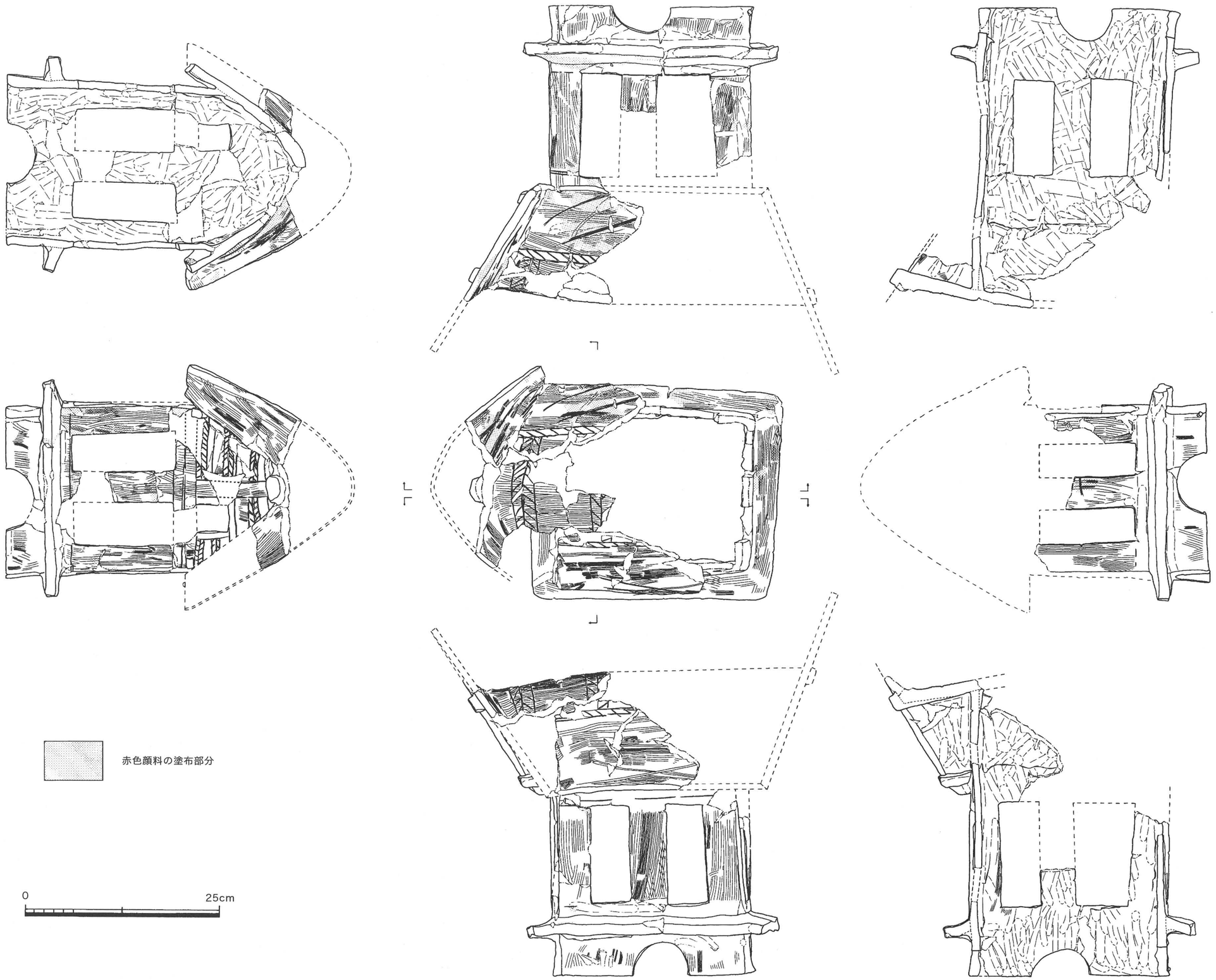
家形埴輪基底部底面には、藁のような植物痕と砂粒が付着した痕跡が認められる。このことから製作台からの離脱材として植物と砂が使用されていたことが想起される。

３）検討

出土状況が判然としないが、左平側に赤色顔料が顕著に残るため、左平側を下にして転落したか、先に埋没したことが考えられる。

今回出土した切妻造高床式家形埴輪の類例としては、管見によると大阪府玉手山１号墳・同府亀井遺跡・同府土室遺跡・同府岡山南遺跡・奈良県赤土山古墳・同県室宮山古墳・鳥取県長瀬高浜遺跡・福岡県月ノ岡古墳・宮崎県西都原169号墳（註５）がある。いずれも西日本に見られる形式であることがうかがえよう。

また弓削遺跡のような低平地から出土したことについても、今後中河内における埴輪祭祀を考察する上で貴重な資料と言えよう。



第70図　家形埴輪（22）　実測図（S＝1/5）

註）1　ちょうど綾杉紋を半截したような表現であるため、便宜上「半綾杉文」としておく。

2　青柳泰介1995「特別寄稿　家形埴輪の製作技法について」(『日本の美術５　No.348　家形はにわ』所収)

3　赤塚次郎1979「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』90

4　青柳1995(註２)

5　九州前方後円墳研究会　2000『九州の埴輪その変遷と地域性　－壺形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾－』西都原169号墳出土とされているが、170号墳との帰属関係が不明とされている。

４）弓削遺跡出土の家形埴輪の表面に見られる砂礫（奥田　尚）

家形埴輪の表面に見られる砂礫を裸眼と倍率30倍の実体顕微鏡で観察した。観察結果と砂礫の採取推定地について述べる。

埴輪の表面に見られる砂礫

構成砂礫種は岩石種として花崗岩、流紋岩、砂岩、チャート、火山ガラスであり、鉱物種として石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩は灰白色、粒形が角、亜角、粒径が0.5～6mm、量が僅かである。石英・長石・黒雲母・石英・長石が噛み合っている。流紋岩は灰色で、粒形が円、粒径が0.7mm、僅か１個確認できたのみである。ガラス質で、溶結が顕著な石である。砂岩は茶褐色で、粒形が亜円、粒形が5mm、僅か１個のみ確認できた。細粒砂からなる。チャートは灰色、暗灰色で、粒形が亜角、亜円、粒径が0.5～６mm、量がごくごく僅かである。火山ガラスは無色透明、貝殻状で、粒径が0.5mm、量がごく僅かである。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～1.5mm、量が中である。複六角錐あるいはその一部が認められる石英がごくごく僅かにある。長石は白色、灰白色で、粒形が角、粒径が0.1～5mm、量が中である。黒雲母は金色、板状、粒状で、粒径が0.1～2mm、量が僅かである。角閃石は黒色、粒状で、粒形が角、粒径が0.1～0.3mm、量がごくごく僅かである。

砂礫種構成からみれば、花崗岩質岩起源の砂礫を主とし、流紋岩質岩起源・閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、チャートや砂岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫である。また、長石が比較的多い。類型区分によれば、１ｂｄｇ類型に属するものである。砂礫相を考慮して、砂礫の採取地を推定すれば、藤井寺市の土師里東方から飛鳥川との合流点までの石川の川原の砂礫に酷似している。土師の里遺跡付近の埴輪や埴輪窯から出土している埴輪の中にも砂礫構成が酷似するものがある。

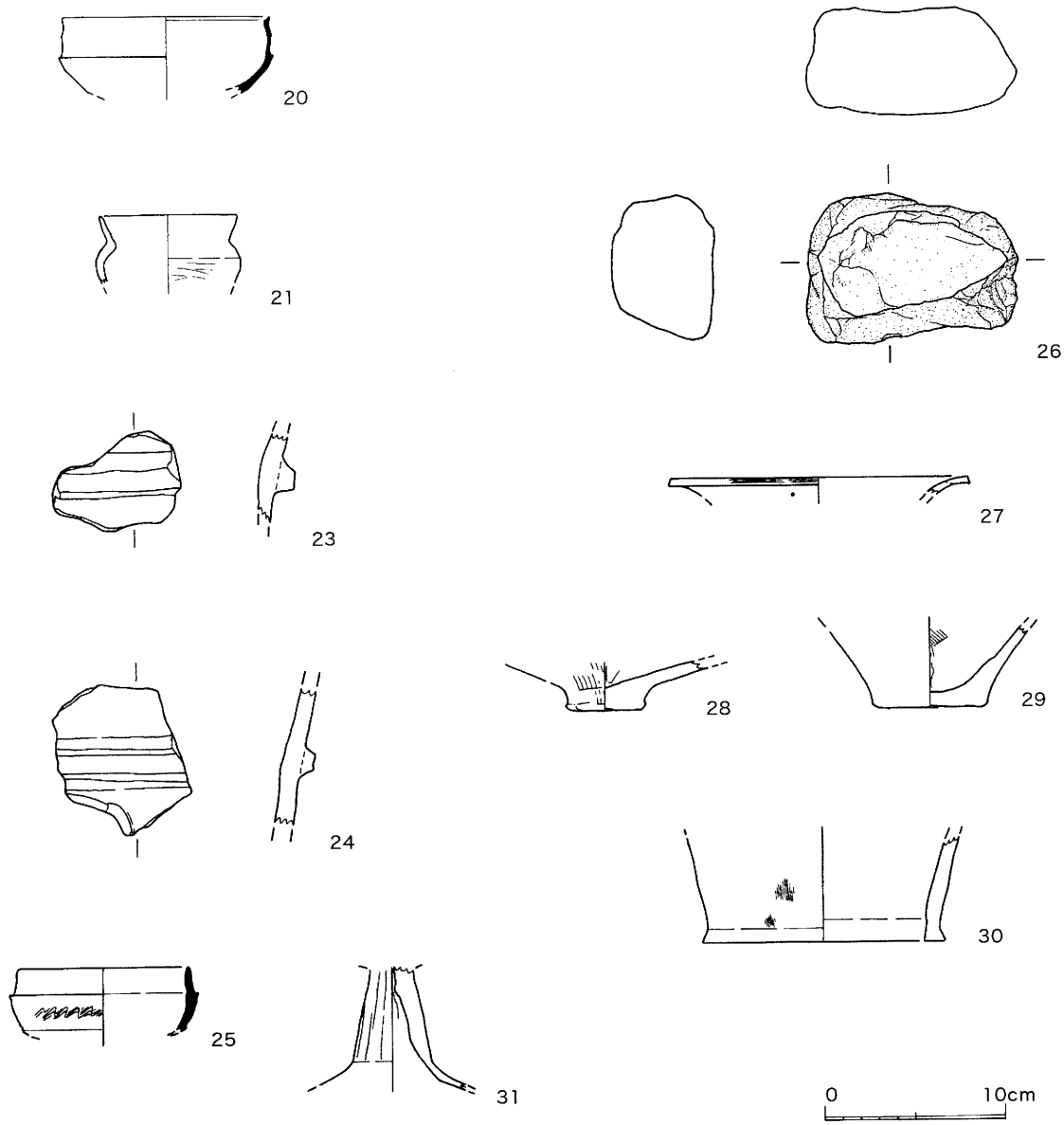
６．まとめ

今回の調査地は、弓削遺跡の西端に位置している。調査地の南側には、小銅鐸の出土した本郷遺跡に隣接しており、該期の集落の広がりを考える上でも重要となる。第1区でのみ多数の弥生土器の出土していることから、この範囲に弥生時代後期の集落が広がっていることが予想され、集落西端であることを示している。おそらく、出土した土器は溝内に廃棄された土器である可能性が高い。これは、第２～４区では顕著な弥生土器が出土しなかったことからも明らかである。

そして、今回出土した家形埴輪は、共伴する埴輪や・須恵器から古墳時代後期(5世紀後半)のもので、胎土分析の結果から、古市古墳群の土師の里周辺で製作された可能性が高い。このことは、地表下3.0m前後に埋没した良好な依存状態の古墳の存在が指摘できるとともに、弓削遺跡内及びその周辺でも埴輪の出土(八尾市教育委員会1999)が散見できることから、今後低地における該期の形象埴輪を伴う古墳群の存在、分布の広がりには注意すべきである。

なお、「５．弓削遺跡出土の家形埴輪の検討　１）～３）」については、近畿大学大学院生　島田拓が記述した。

「４）弓削遺跡出土の家形埴輪の表面に見られる砂礫」については、奥田尚氏に家形埴輪を観察して頂き、分析結果についての玉稿を賜った。　（藤井）



第71図　出土遺物実測図（S＝1／4）

【参考文献】

柏原市教育委員会　1993『本郷遺跡　1991・1992年度』

八尾市教育委員会　1999「弓削遺跡(98-380)の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』

八尾市教育委員会　2000『弓削遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要10

No.	出土地点	器種	法量(cm)	調整・形態等の特徴	色調(上:外面、下:内面)	焼成	胎土	備考
1	第1区 土器集積	弥生土器 甕	(口径)15.5 (残存高)9.2	(外面)ﾊｹ・ﾀﾀｷ・ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ後ﾅﾃﾞ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙～黒	良好	密	
2	第1区 土器集積	弥生土器 甕口縁～肩部	(口径)17.4 (残存高)5.2	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	硬	粗	
3	第1区 土器集積	弥生土器 甕口縁～肩部	(口径)21.5 (残存)11.1	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ・ﾅﾃﾞ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ	5YR6/6 橙 5YR7/4 にぶい橙	硬	粗	
4	第1区 土器集積	弥生土器 甕口縁～体部	(口径)12.4 (残存)10.5	(外面)ﾅﾃﾞ・ﾀﾀｷ (内面)ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾅﾃﾞ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙	やや硬	粗	
5	第1区 土器集積	弥生土器 甕底部	(底径)4.0 (残存高)5.4	(外面)ﾊｹ・ﾀﾀｷ (内面)ﾊｹﾅﾃﾞ	2.5YR6/6 橙 7.5YR6/4 にぶい橙	硬	やや粗	
6	第1区 土器集積南西隅	弥生土器 甕底部	(底径)4.6 (残存高)4.5	(外面)ﾊｹ・ﾀﾀｷ (内面)ﾊｹﾅﾃﾞ	2.5YR6/6 橙 7.5YR6/4 にぶい橙	硬	密	
7	第1区土器集積 土器集積南西隅	弥生土器 甕底部	(底径)4.4 (残存高)2.6	(外面)ﾀﾀｷ・ﾊｹ (内面)ﾊｹ	5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/3 にぶい褐	硬	やや密	
8	第1区土器集積 土器集積南西隅	弥生土器 甕底部	(底径)4.0 (残存高)2.1	(外面)ﾀﾀｷ (内面)ﾊｹﾅﾃﾞ	10YR7/3 にぶい黄橙 5YR6/2 にぶい橙	硬	密	内面ｽｽ付着
9	第1区 土器集積	弥生土器 高坏杯部	(口径)22.8 (残存高)4.7	(外面)ﾀﾃ方向ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾖｺﾅﾃﾞ (内面)ﾍﾗﾐｶﾞｷ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙	硬	密	
10	第1区 土器集積	弥生土器 高坏	(口径)21.8 (残存高)11.5	(外面)ﾐｶﾞｷ (内面)ﾀﾃ方向ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	5YR5/6 明赤褐 2.5YR5/6 明赤褐	やや軟	粗	
11	第1区 土器集積	弥生土器 直口壺	(口径)11.2 (底径)3.6 (残存高)20.0	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾅﾃﾞ・指押え痕・ﾊｹﾅﾃﾞ	7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	やや硬	やや粗	
12	第1区 土器集積	弥生土器 広口壺口縁部	(口径)17.0 (残存高)6.0	(外面)ﾀﾃﾊｹ・ﾖｺﾅﾃﾞ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ	7.5YR6/4 にぶい橙 10YR7/3 にぶい黄橙	やや軟	やや粗	内面ｽｽ付着
13	第1区 土器集積下層	弥生土器 壺底部	(底径)2.5 (残存高)6.8	(外面)ﾊｹ (内面)ﾀﾃﾊｹ・ﾅﾅﾒﾊｹ	5YR5/3 にぶい赤褐～黒 5YR4/3 にぶい赤褐	良好	やや粗	内面一部黒変あり
14	第1区 土器集積下層	弥生土器 壺底～体部	(底径)5.9 (体部最大)16.6 (残存高)19.1	(外面)ﾀﾃﾊｹ・ﾖｺﾅﾃﾞ・不定方向ﾅﾃﾞ (内面)ﾖｺﾊｹ・左ﾅﾅﾒ方向ﾊｹ	10YR5/3 にぶい黄橙 10YR5/3 にぶい黄橙	軟	粗	外面ｽｽ付着
15	第1区 土器集積	弥生土器 小型壺	(口径)8.2 (残存高)9.1	(外面)ﾅﾃﾞ (内面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾅﾃﾞ	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/4 にぶい黄橙	やや硬	やや密	
16	第1区 土器集積	弥生土器 高坏脚部	(底径)10.4 (残存高)5.5	(外面)ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ・ﾅﾅﾒﾊｹ (内面)ﾐｶﾞｷ・ﾊｹ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙	良好	密	
17	第1区 土器集積南西隅	弥生土器 甕底部	(底径)4.4 (残存高)3.1	(外面)ﾅﾃﾞ (内面)ﾊｹ	7.5YR5/1 褐灰 5YR5/4 にぶい赤褐	硬	やや粗	
18	第2区 包含層	須恵器 坏身	(口径)10.0 (残存高)3.7	(外面)ﾛｸﾛﾅﾃﾞ (内面)ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	2.5YR7/1 灰白 2.5YR7/1 灰白	硬	密	
19	第2区 包含層	須恵器 坏身	(口径)11.4 (残存高)4.5	(外面)ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ (内面)ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	7.5YR6/1 褐灰 7.5YR6/1 褐灰	硬	密	
20	第3区 包含層	須恵器 坏身	(口径)11.5 (残存高)4.3	(外面)ﾍﾗｹｽﾞﾘ・ﾛｸﾛﾅﾃﾞ (内面)ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	N7/0 灰白～黒 N7/0 灰白	硬	密	
21	第3区 包含層	土師器 小型壺口縁	(口径)7.8 (残存高)3.8	(外面)ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾛｸﾛﾅﾃﾞ (内面)ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	7.5YR5/3 にぶい褐～灰白 7.5YR5/3 にぶい褐	やや硬	密	
22	第3区 埴輪集積	家形埴輪		(外面)ハケ (内面)ユビオサエ・ナデ	10YR8/3 浅黄橙色（内外面とも）	硬	密	
23	第3区 埴輪集積	円筒埴輪 体部		摩滅により調整不明	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	良好	やや粗	
24	第3区 埴輪集積	円筒埴輪 体部		摩滅により調整不明	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙	良好	やや粗	
25	第3区 埴輪集積	須恵器 高坏杯部	(口径)9.8 (残存高)3.7	(外面)ﾛｸﾛﾅﾃﾞ・波状文 (内面)ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	5YR6/2 灰褐 5YR6/2 灰褐	良好	密	
26	第3区 埴輪集積	土師器 高坏脚部		摩滅により調整不明	7.5YR6/3 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙	良好	密	
27	第3区 埴輪集積	家形埴輪内 安置石	(長辺)11.75 (短辺)8.0					
28	土層確認 トレンチ	弥生土器 甕口縁	(口径)16.8 (残存高)1.0	(外面)調整不明 (内面)ハケ	5YR6/4 にぶい橙 5YR5/3 にぶい赤褐	良好	密	
29	土層確認 トレンチ	弥生土器 壺底部	(底径)4.0 (残存高)2.3	(外面)粗いハケ・ﾀﾃﾊｹ後ﾖｺﾅﾃﾞ・ｵｻｴﾅﾃﾞ (内面)ﾍﾗﾅﾃﾞ	7.5YR6/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙～黒	良好	密	
30	土層確認 トレンチ	弥生土器 甕底部	(底径)5.8 (残存高)4.5	(外面)摩滅のため調整不明 (内面)ハケ調整	10YR5/4 にぶい黄褐 10YR5/4 にぶい黄褐	良好	やや密	
31	土層確認 トレンチ	弥生土器	(底径)13.4 (残存高)5.9	(外面)ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾃﾊｹ (内面)調整不明	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR6/2 灰黄褐	良好	やや密	

出土遺物観察表

15. 弓削遺跡(1999－524)の調査

1. 調 査 地:志紀町南３丁目173番地

2. 調査期間:平成12年２月１日

3. 調査方法

共同住宅建設に係る事業計画地に２ｍ×２ｍの調査区を２ヶ所(第１区、第２区)と３ｍ×３ｍの調査区を１ヶ所(第３区)を設定し、重機および人力を併用して地表下約2.3～2.6ｍまで層理にしたがって掘削を行い遺構、遺物の検出に努めた。現地表はT.P. ＋14.0ｍ前後である。

4. 調査概要

１)基本層序

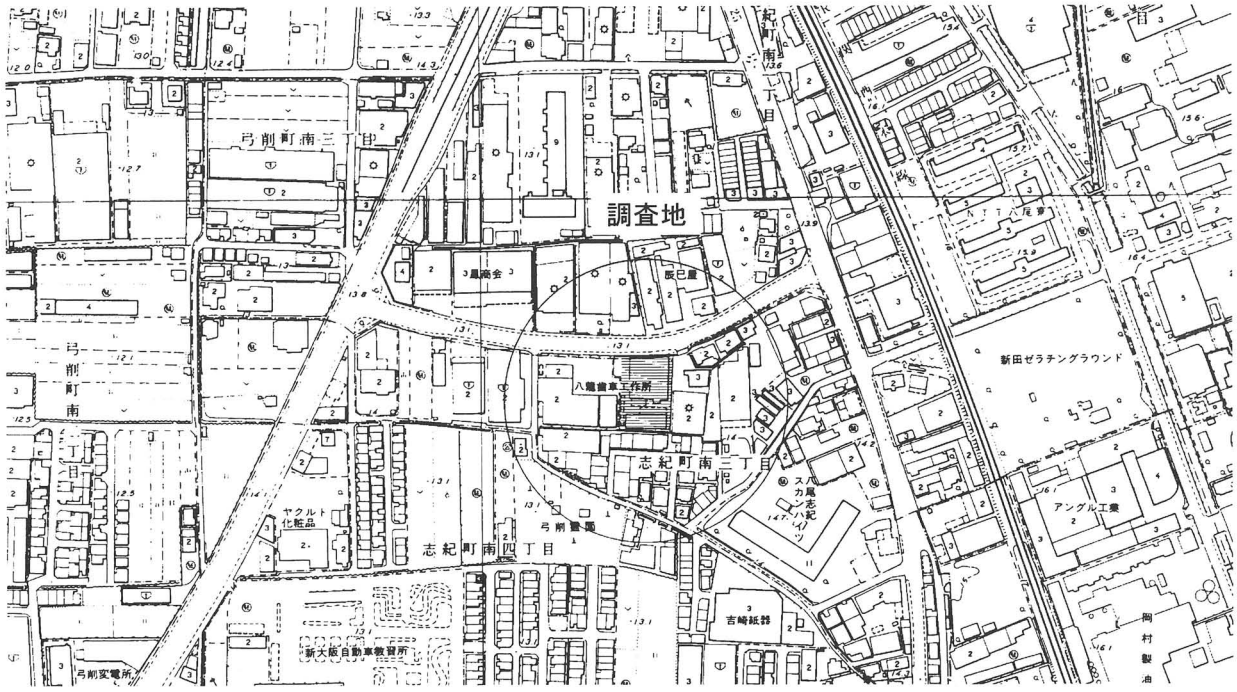
基本層序は以下のとおりである。①盛土(層厚0.6～0.75ｍ。) ②旧作土(層厚0.15～0.2ｍ。) ③暗緑灰色シルト微砂混じり(層厚0.1ｍ。グライ化の顕著な旧作土の床土) ④淡緑灰色シルト～黄灰色シルト細砂混じり(層厚0.1～0.2ｍ。西に向かうにつれ、グライ化が進み厚く堆積する。 ⑤灰色粘質シルト(層厚0.1～0.15ｍ。酸化鉄分を少量含む。古墳時代の包含層である。) ⑥暗茶灰色粘土シルト(層厚0.15～0.3ｍ。西側で層が厚くなる古墳時代の遺構面である。) ⑦暗灰色粘土シルト(層厚0.2～0.4ｍ。西側では炭化物を薄く含む。弥生時代後期の遺構面となる。) ⑧暗灰色粘土(層厚0.35ｍ。南側で確認された。弥生時代後期の遺構面となる。) ⑨淡オリーブ灰色シルト(0.15ｍ以上。全調査区でみられた。無遺物層である。)

④層上面ではきれいな⑩層または⑩'層のような砂あるいはシルトが切り込んでいる様子が２区、３区で確認されたが、砂層中にはラミナなどは見られず、河川による堆積とは考えにくい。時期は明確にできないが近世以降に掘削された遺構と思われる。

古墳時代

２)検出遺構

古墳時代中期の溝(第１区)と弥生時代後期の溝状遺構とピット(第１区・第３区)、落ち込み(第2区)を検出し、弥生時代中期の遺物が出土(第３区)した。



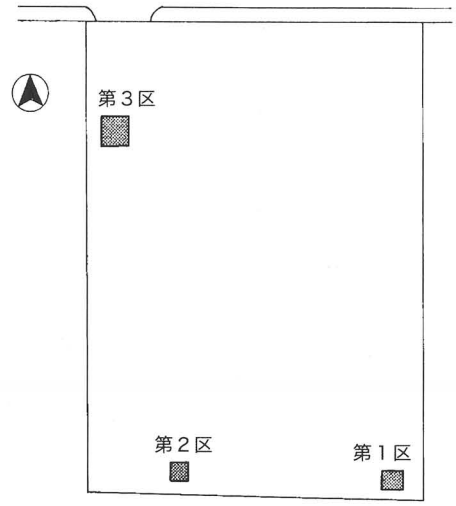
第72図　調査地周辺図(1/5000)

第１区、地表下1.6m（T.P.＋12.6m）の暗茶灰色粘土シルト上面で南北方向の溝を検出した。西肩のみ検出したため全容は不明である。長さ２m以上、幅0.35m以上、深さ0.12mで、灰色礫混じり粘土を埋土とする。埋土上面でⅤ期の円筒埴輪片（1）や須恵器片が出土した。

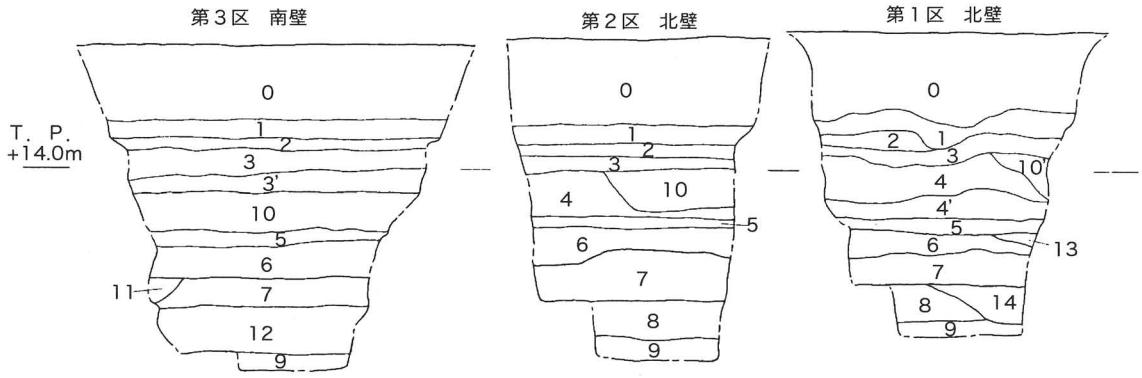
弥生時代後期

第１区では地表下2.0mで土坑とみられる遺構とピットを検出した。土坑は調査区外にひろがり、西肩のみ検出したため平面形態は不明である。東西長0.62m以上、南北長1.1m以上、深さ0.29mを測る。埋土は暗茶灰色シルトで、甕の口縁部（2）や底部（3）、石器剥片（4）などが出土している。

また、調査区西側には東西幅0.35m以上、南北幅0.95m以上の範囲で厚さ0.03mほどの炭化物の広がりを確認し、直径0.07～0.1m、深さ0.1m程度のピットを３基検出した。埋土は灰色砂混シルトで、遺物は出土していない。調査区外に続いていくとみられるが、その性格は不明である。

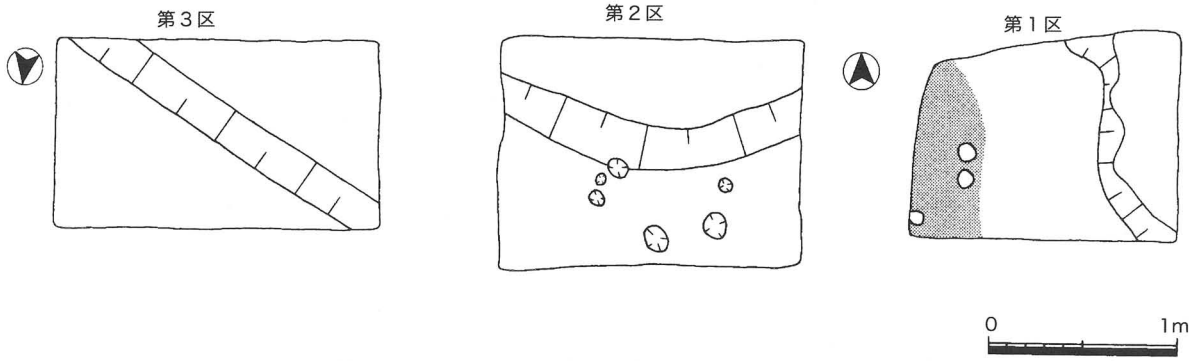


第73図　調査位置図（1/800）



0.盛土
1.旧耕作土
2.暗緑灰色粘質シルト　微砂混
3.淡緑灰色シルト～黄灰色シルト　細砂混
3'.暗緑灰色シルト　細砂混
4.暗緑灰色シルト
4'.淡灰色シルト
5.灰色シルト粘土
6.暗茶灰色粘土シルト
7.暗灰色粘土シルト
8.暗灰色粘土
9.淡オリーブ灰色シルト
10.灰白色細砂
10'.明灰白色シルト
11.灰黒色粘質シルト（溝状遺構埋土）
12.暗黄緑灰色シルト粘土
13.灰色礫混粘土シルト
14.暗茶灰色シルト（土坑埋土）

第74図　土層断面図（1/60）



第75図　弥生時代後期遺構面平面図（1/40）

第２区では地表下1.73mで落ち込みとピットを検出した。落ち込みは湾曲しながら東西方向にひろがる。落ち込み内の埋土は上部の堆積層である淡茶灰色粘土シルトであることから、人為的に埋められたものとは考えられない。このような状況を呈しているためあるいは落ち込みとするよりも北側に高くなっていることが想定される。ピットは落ち込み部分に6基検出され、直径0.06～0.15m、深さ0.05～0.12mで埋土はいずれも暗黄褐色粘土シルトである。堆積層である淡茶灰色粘土シルトから弥生時代後期の甕（５・６）、高杯（７・８）などが出土している。

第３区では地表下1.85mで溝状遺構を検出した。北西－南東方向に伸びており、南肩のみ検出した。検出長1.85m、検出幅0.9m、深さ0.22mである。埋土は灰黒色粘土シルトで、ヘラ状工具による沈線を施す垂下口縁の壺(9)、甕底部(10)などが出土している。

弥生時代中期

遺構を検出することはできなかったが、全調査区で遺物が出土した。なかでも第３区では地表下約2.1mにある暗黄緑灰色シルト粘土から多くの遺物(11～17)が出土している。上下に肥厚する口縁に加飾する壷(11･12)や口縁を屈曲させ、体部をヘラミガキする甕(16･17)がある。しかし、全体的に後期の遺物と比較すると摩滅が著しく遺存状態は不良である。

遺構に伴わない遺物

第１区では⑥層から弥生時代後期の高坏の坏部(18)や脚裾部(19)、⑦層からは凹線文が施された器台の脚部(20)が出土している。

第３区では⑫層から(21～32)が出土している。壺では短く垂下した口縁に波状文と円形浮文で口縁端部を加飾した(21)、ややぼってりと下方に肥厚する口縁部の(22)がある。底部は外面にヘラミガキを施した(23)がある。甕では全体的に薄手で短い口縁端部を「く」の字上に屈曲させた(24)以外は緩やかに外反する口縁部をもつもの(25～28)が多くを占めている。底部(29～32)は端部が突出するタイプとしないタイプがある。また高坏は口縁のみ(33･34)であるがいずれも外反するしながら斜め上方にのびるものである。

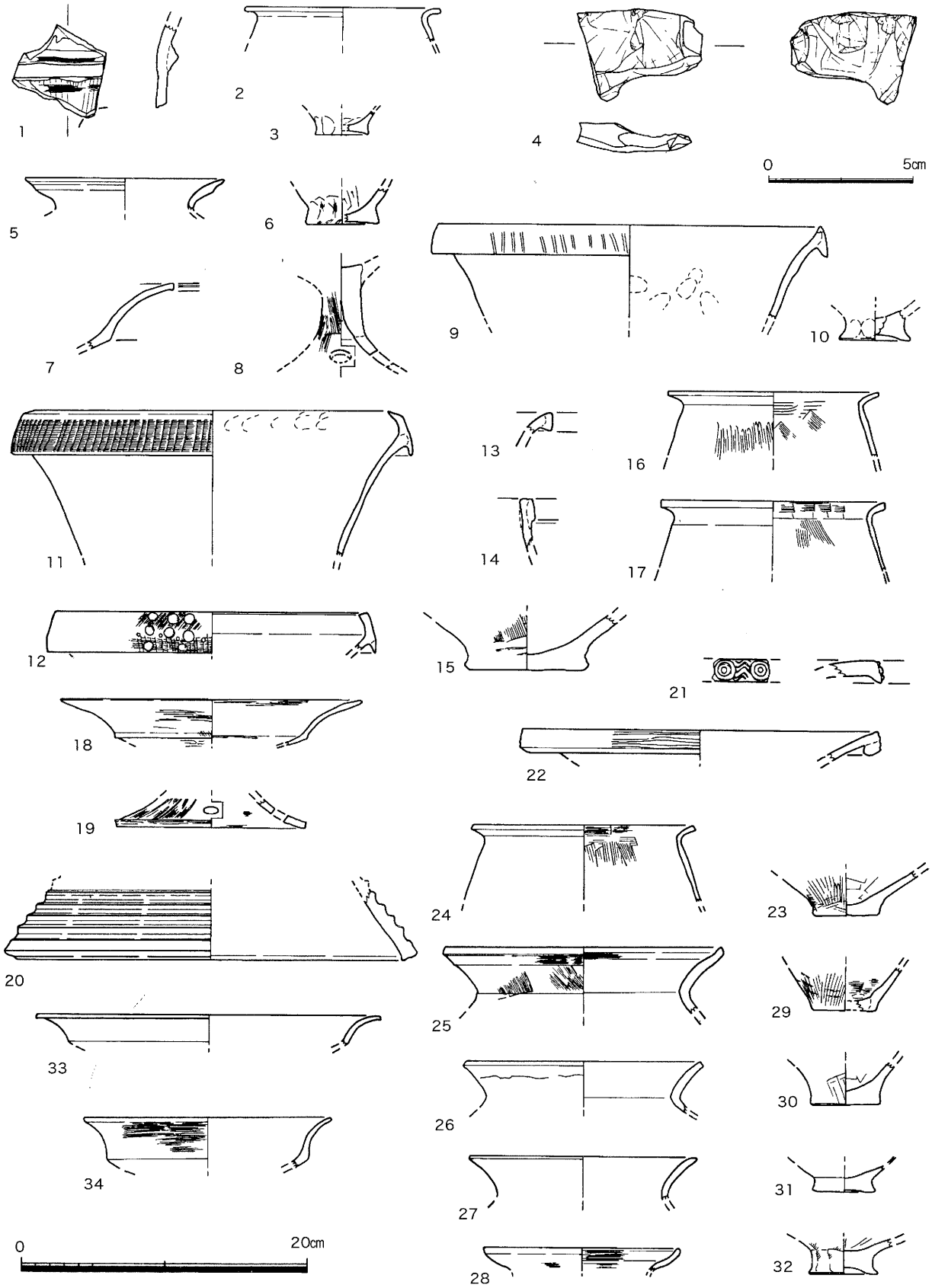
このように⑫層出土遺物は若干弥生時代中期の土器が含まれるが、大半は後期に属するものであった。

５．まとめ

本調査地では古墳時代後期の埴輪と土器、そして弥生時代後期の遺構、中期の土器が出土した。古墳時代の遺物、なかでもＶ期の埴輪は平成10年度に本調査地の南隣で当教育委員会が行った調査でも出土している。ただし、後世の土層からの出土とされている。今回、埴輪は溝状遺構の上面見つかっており、あるいはこれは周溝が埋まった状態とも推定される。実際、この後に（財）八尾市文化財調査研究会が調査を行った結果多くの円筒埴輪や蓋形埴輪が出土した。調査地は旧大和川の後背湿地に位置し、埋没古墳が存在していても不思議ではない。しかし、教育委員会はグリッド調査（２ｍ×２ｍを13箇所）を指示したため、埴輪が出土する以外不明である。

弥生時代後期については遺構面の存在が確認できたが、中期は面として調査することはできなかった。遺物も後期の土器と混在して出土しており、後期の遺構面と差がないのかも知れない。この点は今後の調査の結果を待ちたい。

（渚　斎）



第76図　出土遺物実測図（1/4）〔石器のみ1/2〕

図　　版

図版1　萱振遺跡（1999―383）の調査

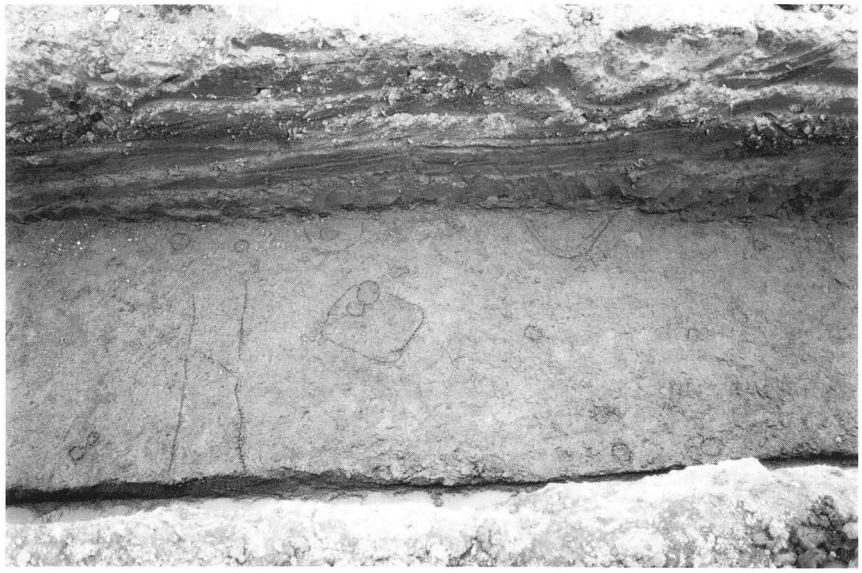
東側調査区（南より）

中央調査区（南より）

西側調査区（南より）

図版2　萱振遺跡（1999―383）の調査

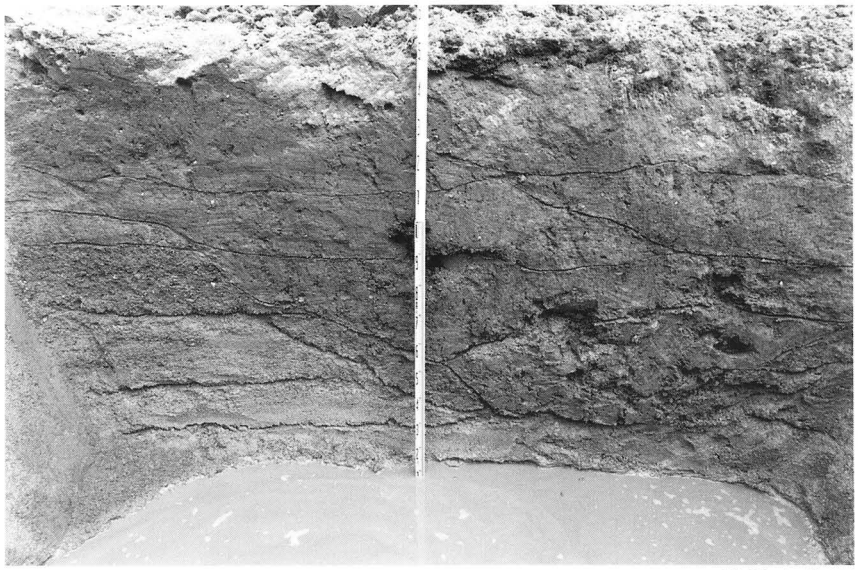
東側調査区　検出土坑



西側調査区　検出ピット

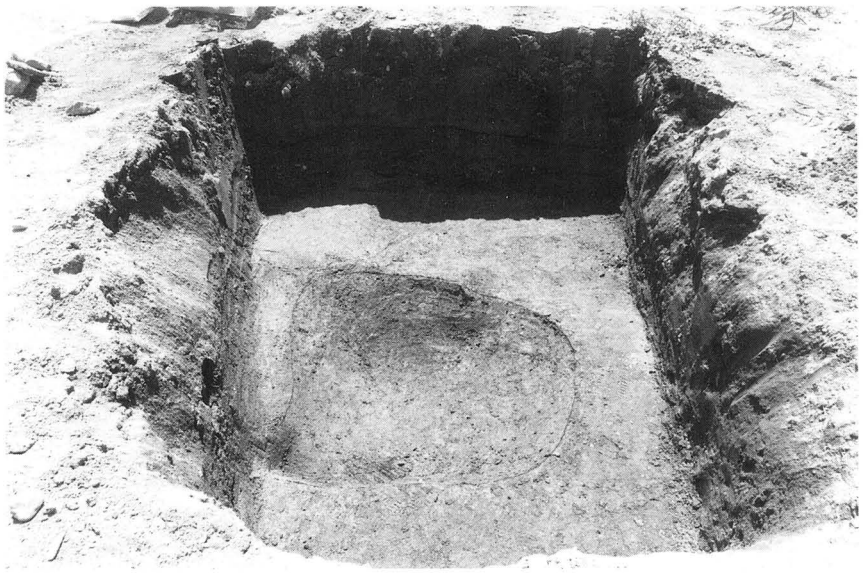
調査区　全景

図版3　萱振遺跡（2000―103・214）の調査



1区　溝検出状況

7区　落ち込み検出状況



7区　方形土壙検出状況

５区　調査地周辺（南東から）

５区　全景（北から）

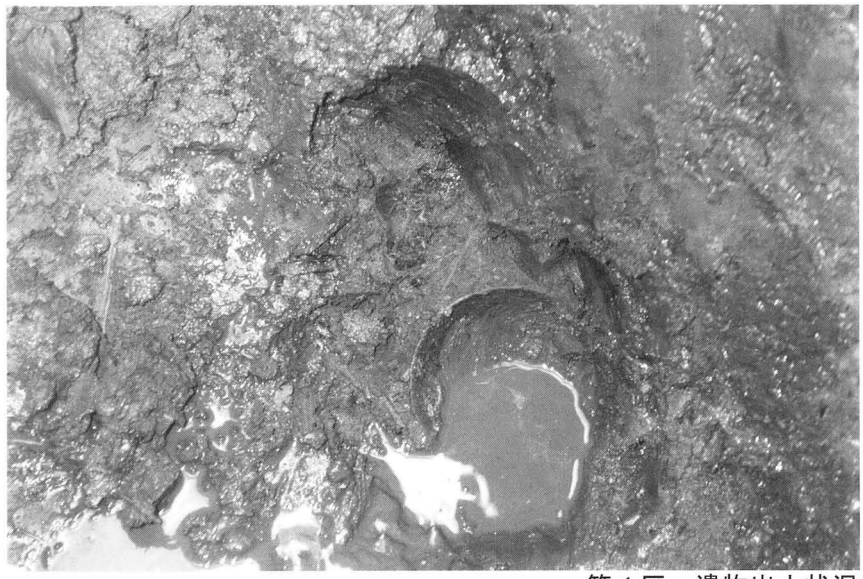
６区　調査状況（南から）

調査風景

第１区　土層断面

第２区　土器出土状況

弓削遺跡　第１区　遺構検出状況（北より）



第１区　遺物出土状況

郡川遺構　第１面　土抗１検出状況（東より）

第２面　溝検出状況（北より）

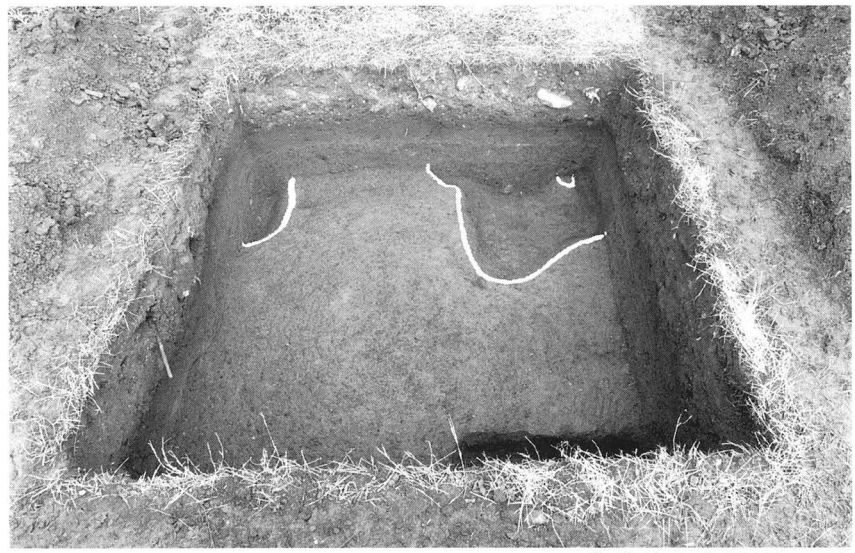
第４面　溝内遺物検出状況（東より）

短頸壺（２）出土状況

図版8　心合寺跡（範囲確認）の調査

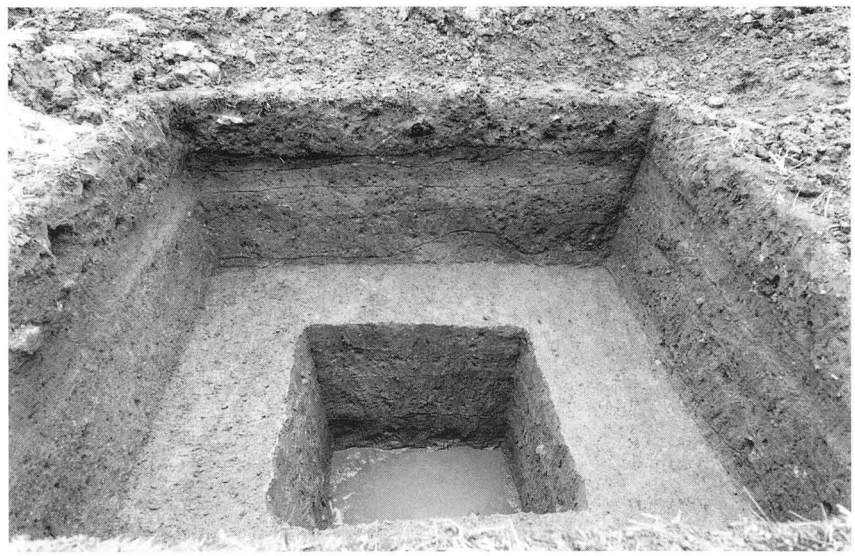
調査地全景（調査前）

調査風景（第２区）



遺構検出状況（第２区）

図版９　心合寺跡（範囲確認）の調査

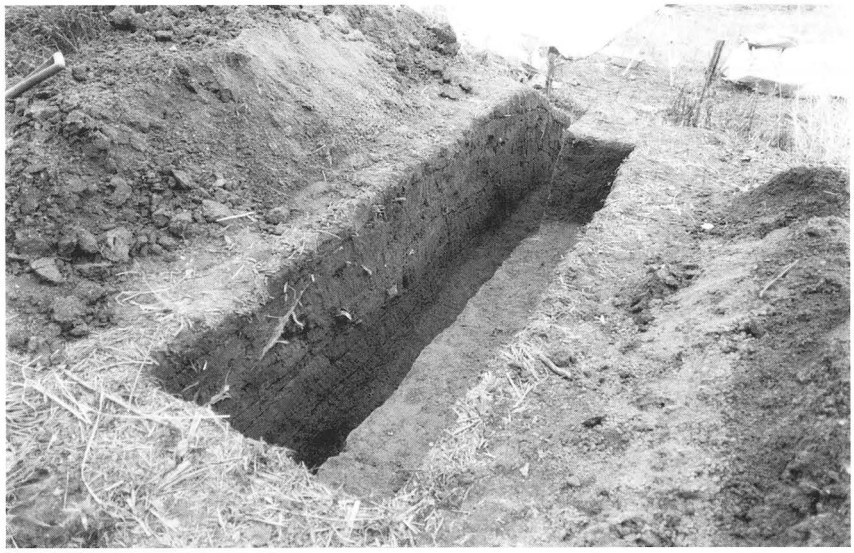


第４区　土層断面

第１トレンチ　設定

第１トレンチ　上層

第２トレンチ（西から）



第２トレンチ（東から）

第３トレンチ（西から）

調査地（北より）

第１トレンチ墳丘検出状況

第１トレンチ南断面

第１区　調査状況

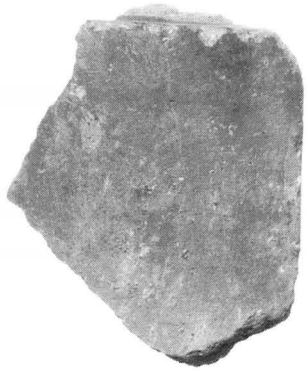
浄化槽設置場所調査風景

家形埴輪出土位置

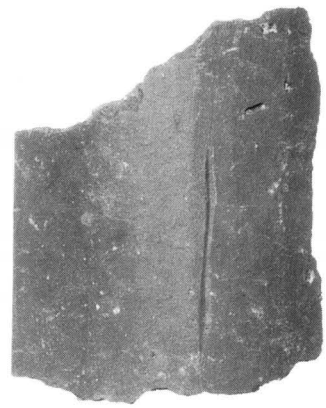
図版13　萱振遺跡（2000―103）出土遺物

1

萱振遺跡（2000-103）



2



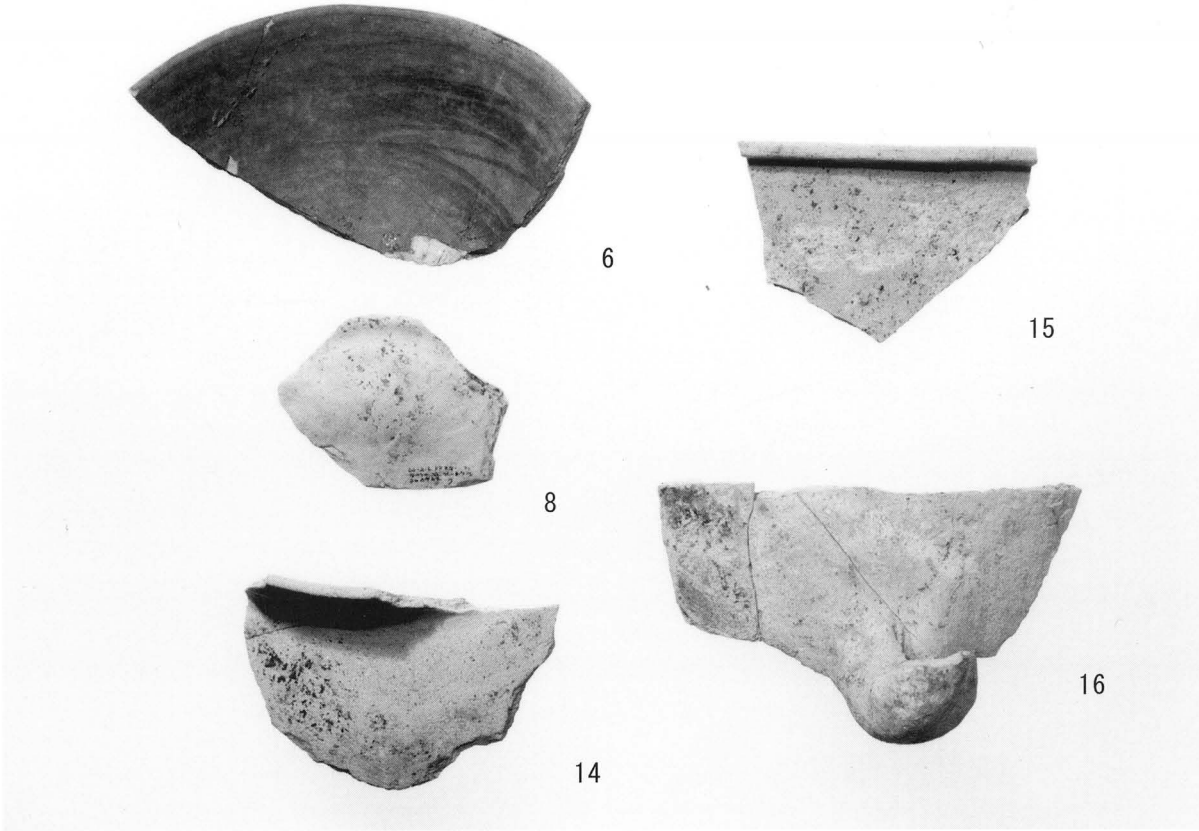
3

4

5

萱振遺跡（2000-103）

図版14　萱振遺跡（2000―214）・久宝寺遺跡（1999―639）出土遺物



萱振遺跡（2000-214）

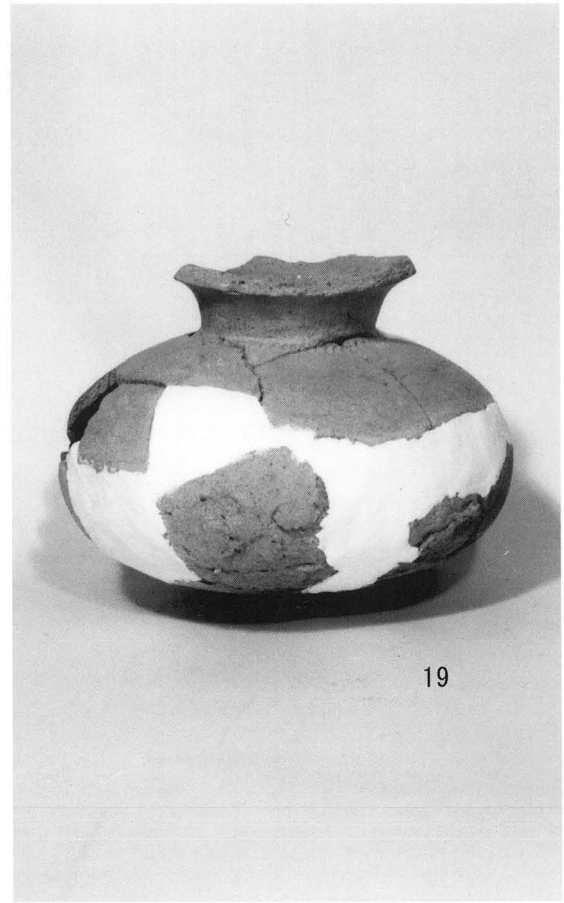
久宝寺遺跡（1999-639）

図版15　久宝寺遺跡（1999—639）出土遺物

3

10

5

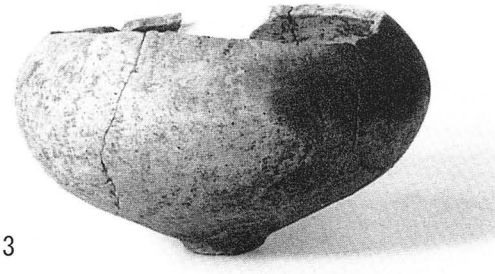


19

図版16　郡川遺跡（1999―627）出土遺物

1

2

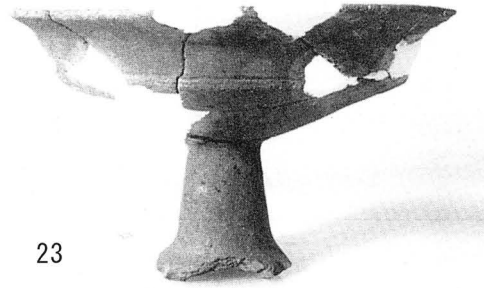

3

8

9

12

24


23

弥生時代後期溝出土遺物

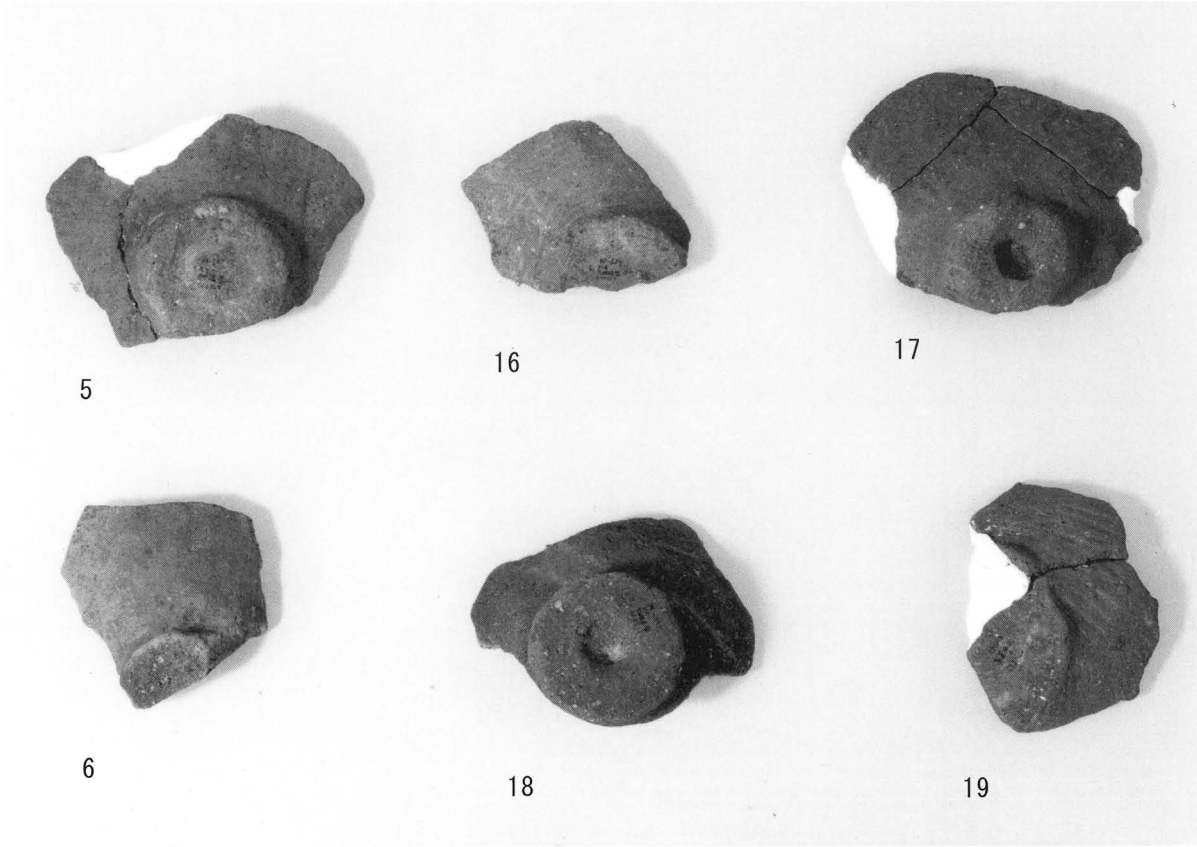
図版17　郡川遺跡（1999－627）出土遺物

15

21

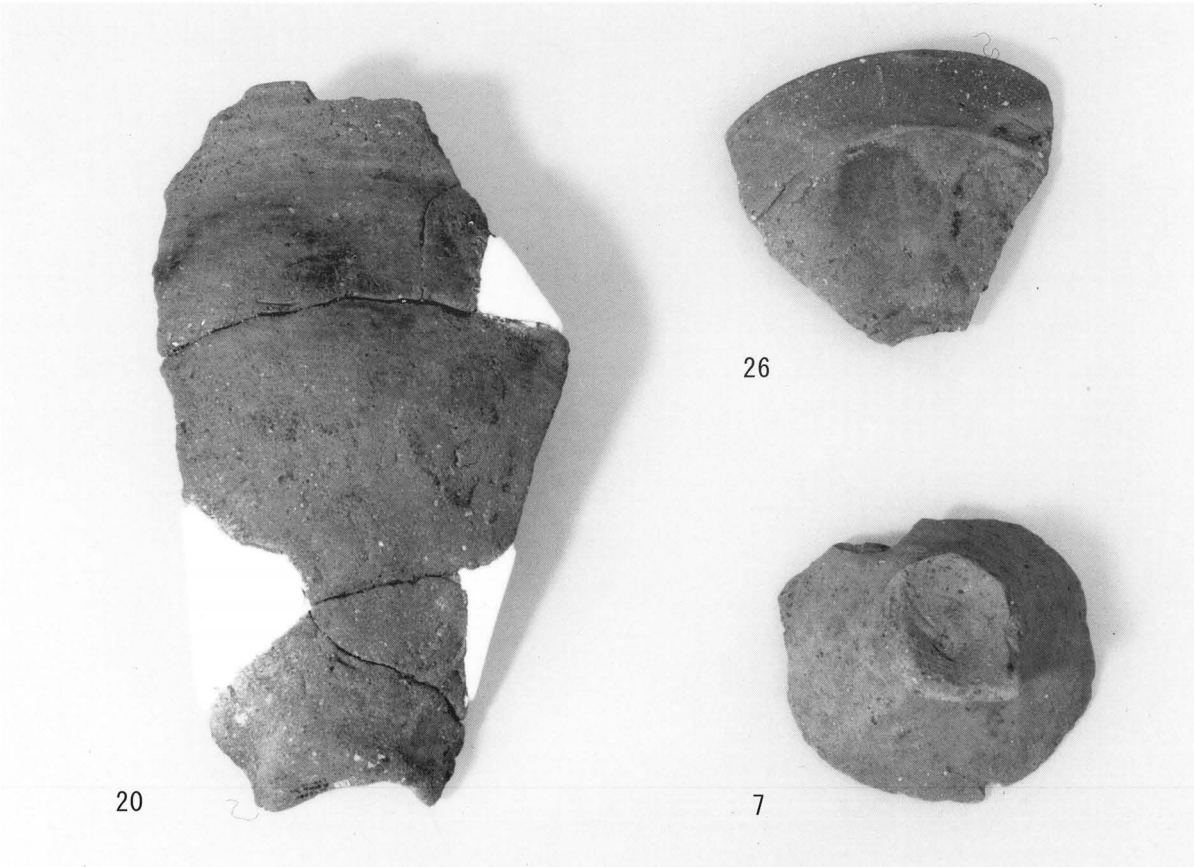
22

27



弥生時代後期溝出土遺物

図版18　郡川遺跡（1999—627）出土遺物

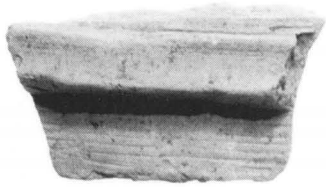


弥生時代後期溝出土遺物

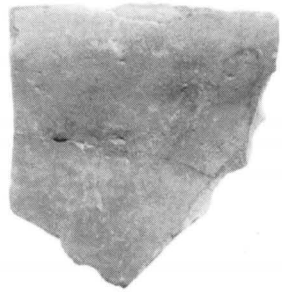
図版19　心合寺跡（範囲確認）出土遺物

1

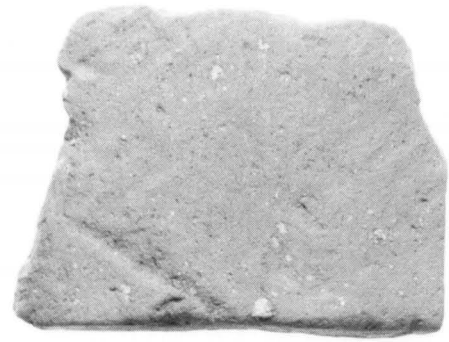
2



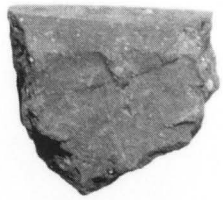
3



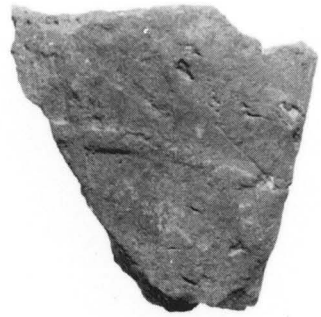
4



5



6



7

8

図版20　弓削遺跡（1999―429）出土遺物

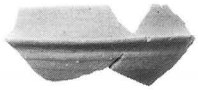
4

14

10

15

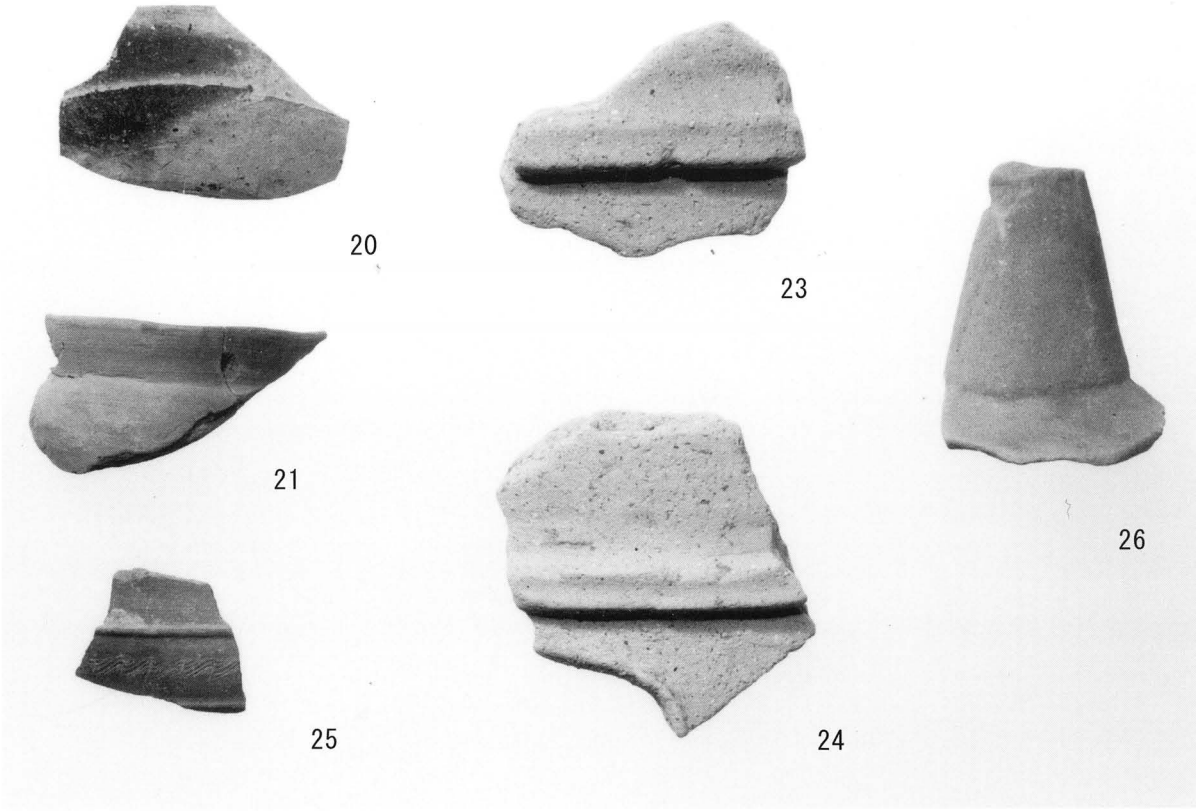
11



18

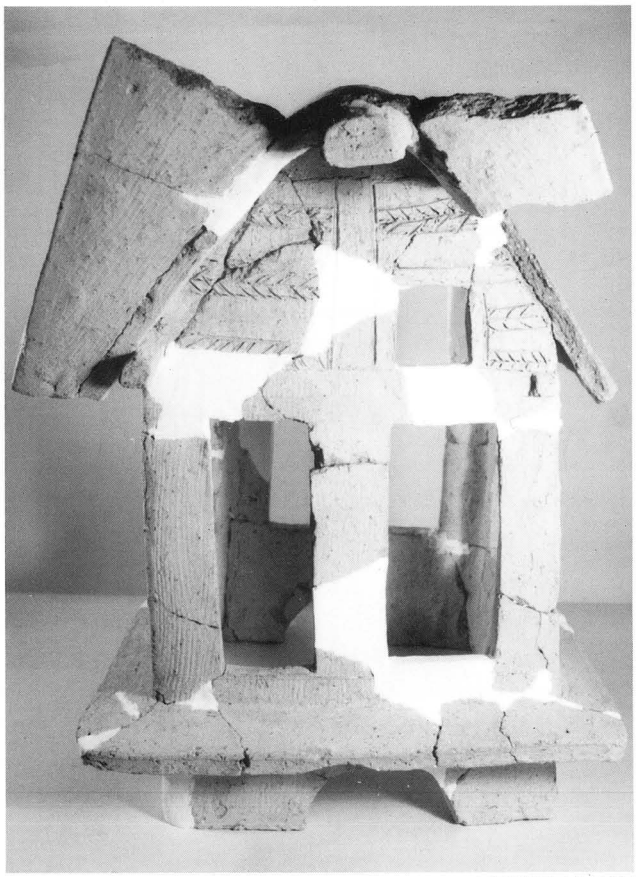
19

図版21　弓削遺跡（1999―429）出土遺物



図版22　弓削遺跡（1999―429）出土遺物

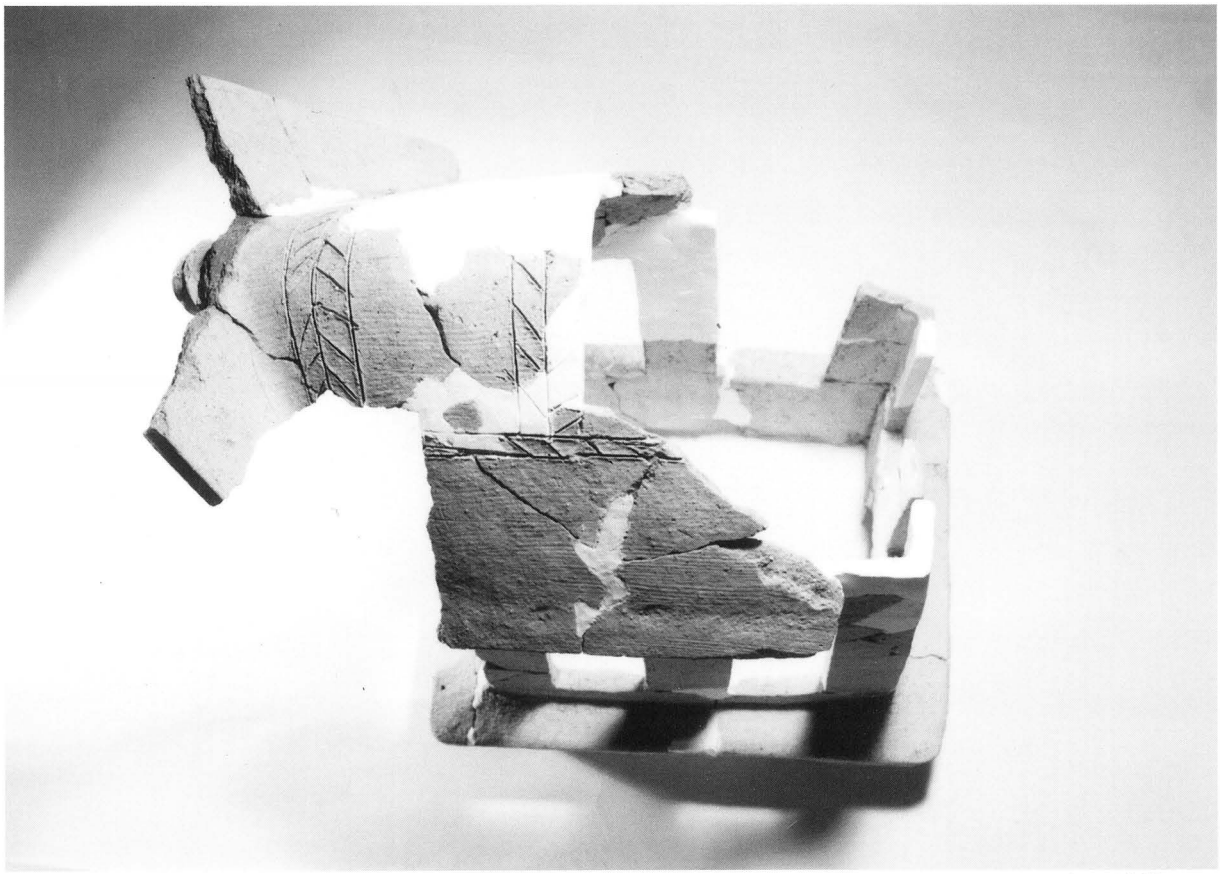
家形埴輪全景



家形埴輪妻側

家形埴輪内面

図版23　弓削遺跡（1999—429）出土遺物



家形埴輪上面

家形埴輪製作時の切り込み

報　告　書　抄　録

ふりがな	やおしないいせきへいせい12ねんどはっくつちょうさほうこくしょ
書名	八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書
副書名	平成12年度国庫補助事業
巻次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	44
編著者名	米田敏幸・溝斎・吉田野乃・吉田珠己・藤井淳弘・西村公助
編集機関	八尾市教育委員会
所在地	〒581-0003　大阪府八尾市本町１丁目１番１号　TEL０７２９-９１-３８８１
発行年月日	西暦2001年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村　遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
おんぢいせき 恩智遺跡	やおし　おんぢなかまち 八尾市　恩智中町	27212	34 36 11	135 37 58	20000217	2.25	専用住宅建設に伴う遺構確認調査
かやふりいせき 萱振遺跡	やおし　かやふりちょう 八尾市　萱振町	27212	34 38 23	135 36 18	20000126～ 20000201	81.5	倉庫建築に伴う遺構確認調査
	かやふりちょう 萱振町	27212	34 38 18	135 36 29	20000818・ 20000904	28	分譲住宅・店舗建設に伴う遺構確認調査
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡	やおし　じんむちょう 八尾市　神武町	27212	34 37 18	135 35 07	20000508～ 20000510	112.88	工場建設に伴う遺構確認調査
	きたかめいちょう 北亀井町	27212	34 37 05	135 34 57	20000515・ 20000516	16	工場建設に伴う遺構確認調査
こおりがわいせき 郡川遺跡	やおし　くろたに 八尾市　黒谷	27212	34 36 57	135 38 39	20000324	3	専用住宅建設に伴う遺構確認調査
しおんしあと 心合寺跡	やおし　おおたけ 八尾市　大竹	27212	34 38 10	135 38 33	20000111～ 20000131	47	遺跡範囲確認調査
しぶかわはいじ 渋川廃寺	やおし　しぶかわちょう 八尾市　渋川町	27212	34 36 59	135 35 37	20000627	8	事務所建築に伴う遺構確認調査
たかやすこふんぐん 高安古墳群	やおしおおあざきょうこうし 八尾市　大字教興寺	27212	34 36 34	135 38 28	20001111	20	駐車場建設に伴う遺構確認調査
とうごういせき 東郷遺跡	やおし　ひかりまち 八尾市　光町	27212	34 37 37	135 36 30	20000726	12.5	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
なかたいせき 中田遺跡	やおし　やおききた 八尾市　八尾木北	27212	34 36 37	135 37 26	20000127	1.7	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
	おさかべ 刑部	27212	34 36 38	135 37 18	20000222	6.25	共同住宅建設に伴う遺構確認調査
	おさかべ 刑部	27212	34 36 30	135 37 21	20000524	2	分譲住宅建設に伴う遺構確認調査
ゆけいせき 弓削遺跡	やおし　しきちょうみなみ 八尾市　志紀町南	27212	34 35 27	135 37 00	19991215・ 20000417・ 20000424	30.5	教習所建設に伴う遺構確認調査
	しきちょうみなみ 志紀町南	27212	34 35 30	135 35 09	20000201・ 20000202	17	共同住宅建設に伴う遺構確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恩智遺跡	集落	弥生時代～中世	包含層・溝・土坑	須恵器・土師器・瓦器・石器	
萱振遺跡	集落	古墳時代	包含層・溝・土坑・小穴	弥生土器	
	集落	古墳時代・中世～近世	包含層　土坑	土師器・須恵器・瓦	
久宝寺遺跡	集落	古墳時代	土壙	土師器	
	集落	弥生時代～古墳時代	土器集積	弥生土器　土師器	
郡川遺跡	集落	弥生時代	土壙	弥生土器　土師器	
心合寺跡	寺院跡	古墳時代・中世	土壙・整地層	埴輪　土師器　須恵器　瓦	
渋川廃寺	寺院跡	奈良時代	包含層	土師器　瓦	
高安古墳群	古墳	古墳時代	古墳	なし	
東郷遺跡	集落	弥生時代～古墳時代	包含層	土師器　埴輪	
中田遺跡	集落	鎌倉時代・古墳時代	包含層	瓦器・土師器	
	集落	鎌倉時代・古墳時代	包含層・溝状遺構	土師器・須恵器・瓦器・埴輪	
	集落	奈良時代	包含層　土坑状遺構	土師器　須恵器	
弓削遺跡	集落	弥生時代・古墳時代	落ち込み・埴輪集積	弥生土器　埴輪　須恵器	
	集落	弥生時代・古墳時代	包含層・落ち込み・溝状遺構・ピット	埴輪・須恵器・弥生土器・石器	

八尾市文化財調査報告44
平成12年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書
発　行　日　2001年３月
編集・発行　八尾市教育委員会　文化財課
〒581-0003　八尾市本町1-1-1
TEL(0729)24―8555(直通)
印　　刷　旭堂印刷株式会社
〔八尾市刊行物番号　Ｈ１２―７１〕